神奈川県の民話

白いツバキの精ほか



日本児童文学者協会 編



小田原や平塚など東海道ぞいの宿場町、信仰の山だった箱根や大山、幕府のおかれた鎌倉、明治になってから外国との玄関口としてさかえた横浜など、歴史とともにあゆんできた神奈川県の町や村、山や海につたわる民話のかずかず。都市化の波におしながされ、きえさろうとしている、この貴重な先祖の遺産を、ぜひ、現代に生きるきみたちにも知ってもらいたくて、いま一さつにあつめました。



県別ふるさとの民話 8

神奈川県の民話

日本児童文学者協会編

偕成社

●刊行のことば

いつの時代にも子どもたちは民話が大すきです。本ぎらいな子も，民話の本ならば喜んで読むという話も聞きます。考えてみれば，それも当然のことかもしれません。

民話には、長い時間にみがきぬかれた簡潔平明な語りのおもしろさと，ふるさとの風と光，遠い祖先の知恵，夢と希望，喜びと悲しみ，笑いと涙が，さまざまにこめられているはずですから。それを読むものが，どんなに幼くても，同じ風土にそだったのならば，おのずからなる親しみをそこに見いだすのでしょう。

わたしたち児童文学にたずさわるものは，日本の子どもたちに，この祖先の貴重な遺産を正しい形でつたえることを，なによりもたいせつなことだと考え，ここに日本児童文学者協会創立30周年記念出版として，県別『ふるさとの民話』（全47巻）を発行することにいたしました。

各県の代表的な民話のほか，これまで紹介されなかった民話，活字化されなかった民話をできるかぎりほりおこし，さらに明治以降の新しい民話もくわえて，従来にない，地方色豊かな民話シリーズをつくるべく努力したのです。

むろん，このような大事業は，わずかな人数だけでできるものではありません。地方在住の会員の協力と，各地の民話研究家，民俗学者の一方ならぬご援助をあおぎました。心よりお礼もうしあげます。

日本児童文学者協会
『ふるさとの民話』編集委員会



「箱根のあまのじゃく」より（本文18ページ）

はじめに

萩坂　昇

横浜市緑区北八朔にすむ八十歳の前田じいちゃんは、子どものころ、キツネのよめいりをたしかに見たといいます。

「そうよ。あの山んとこだに。雨のシトシトふるばんによ。テラテラとあかりがともって中山のほうへむかっていったんだに。まちがいなくキツネのよめいりだに。」

と、いまは団地でうまった山をさして、そのことをお孫さんにきかせようとしたら、むすこさんがきて、

「おやじ、とうとう頭にきたな。そりゃあ目のさっかくで、夜光虫のあつまりだよ。」

と、いったので、前田さんは、語ってきかせるのをやめてしまいました。キツネのよめいりを夜光虫のあつまりにしていたら、こんなたのしいむかし話は、のこらなかったでしょう。山、海、湖ありの神奈川県には、ふしぎな話、こわい話、わらい話やかなしい話も語られてきました。そこには、むかしの人のゆめやねがいがこめられています。あなたも語り手となって祖先の心を語りつたえてくだされ。な。

神奈川県の民話——もくじ

海や沼の主とかたった話

キツネやタヌキとかたった話

村や町にのこった　かなしい話

村や町にのこった　おどけ話

●**編集委員**

岩崎　京子	大石　　真
久保　　喬	木暮　正夫
柴野　民三	渋谷　清視
竹崎　有斐	鳥越　　信
西本　鶏介	浜野　卓也
前川　康男	松谷みよ子
萩坂　　昇（神奈川県責任者）	

■**装　丁**――――――司　　修

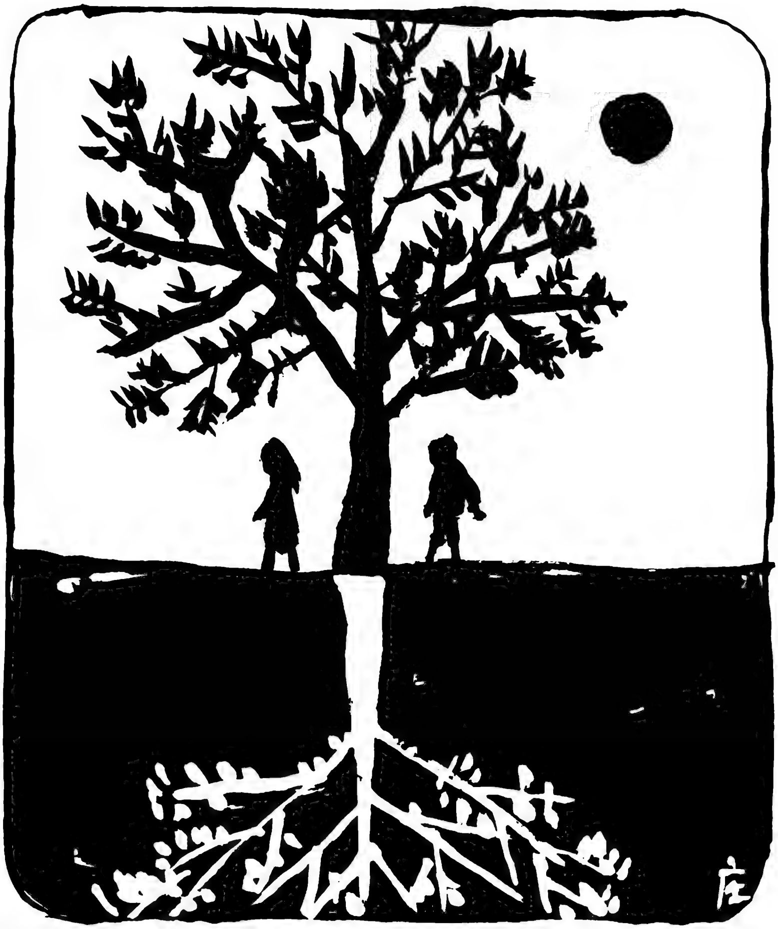
■**さし絵**――――　福田庄助

■**絵地図**　――――坂川知秋

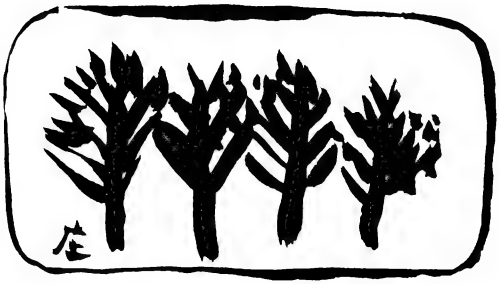
日本児童文学者協会編

神奈川県の民話

白いツバキの精ほか



てんぐや やまんばと かたった話



やまんばの糸車

〈伝説・足柄上郡〉

むかし、西丹沢のふもとの村に、長七という百姓がおった。

長七は、百姓のくせにのらしごとをほったらかして、鉄砲うちばかりしとった。そんで、カラスなんかとってきちゃ、

「おら丹沢一のかりゅうどだぞ。」

と、いばっておった。

村の衆は、草ぼうぼうの長七の畑を見て、

「長七、カラスばっかりとってこねえでよ、かりゅうどならたまには、みんなにイノシシなべ

でもふるまってみい。なんだ、この畑は。」

と、からかった。

おこった長七は、「ようし。」と、丹沢の山ふかくはいっていった。あっちの谷、こっちの谷とえものをさがしていたが、イノシシどころかウサギも見かけん。そのうちに日はくれて、あたりはまっくらくらになってしまった。

「しかたねえ、今夜は、ここにやっかいになるか。」

長七は、からからと火をおこし、たき火のはたにうずくまって、夜あけをいまかいまかとまっていた。

夜もかなりふけたころ、雨がしぽしぽとふってきた。ときどき、なまあったかい風が長七のほおをなぜていく。

（こんな晩にゃ、ゆうれいだか、ばけものがでるっちゅう話だな。）

長七がおっかなおっかなあたりをうかがうと、むこうの木の下にあんどんがひとつともっているのに気がついた。

なんだべ、あんなところにと、目をこらしてよくよくうかがうと、そのよこに、しらがのばあが糸車をブーン、ブーンとまわしているではないか。



長七は水でもあびせられたように、ぞっとした。

「こ、こいつが話にきいた丹沢のやまんばにちがいねえ。どうすべか。このままにしていたら、おらは食われてしまう。」

長七はふるえる手で、鉄砲にたまをそろりとこめると、やまんばをねらって、

ズダーン

と、ぶっぱなした。

だが、やまんばは、長七のほうをちらっとむいて、にかにかわらっただけで、あいかわらず、ブンブンと糸車をまわしておる。

「おのれ。」

と、二はつめをぶっぱなしたが、やっぱりやまんばは、へいきで糸車をまわしている。三ぱつ



ぶっぱなしても、四はつぶっぱなしても、五はつぶっぱなしても、十ぱつぶっぱなしても、おなじだった。とうとう長七は、とっておきのいのちだま（かりゅうどがいのちをまもるためにさいごの一ぱつだけとっておくたま）をひとつのこすだけになった。

（これがしっぱいしたら、どうしよう。）

長七は、なむなむと心の中でとなえながら、さいごのたまをそろりとこめた。かた目をしっかりとつぶって、ねらいさだめたが、

「まてよ、どうもあのあんどんがくせものだぞ。よし。一か八か、あんどんをねらってみるべ。」

と、ひき金をひいた。

ズダーン

そのとたん、どこからともなく、

「長七、なかなかやりよるのう。」

と、しわがれた声がしたかとおもうと、あんどんはぱっときえてしまった。

あまりのきみわるさに長七は、岩かげにうずくまってしまった。

ながいながい夜があけて、やっと東の空が白くなった。長七はおそるおそる、あんどんのともっていたあたりへいってみたが、そこには、なにひとつのこっていなかった。

「するとおらは、ゆめを見ていたのかな。」

長七、目をこすって地べたを見ると、どす黒い血のしたたりが、てんてんとむこうの岩のほうにつづいている。

「やろう、にげやがっただな。」

長七、血のしたたりをおっていくと、ほらあなのところにでた。中をのぞくと、おくのほうで、てらてら、てらてらと、へんな光がともって、まっ黒いものがうずくまっている。

長七は、鉄砲をかまえ、しのび足ではいっていった。足もとには、人間だかけものだかの骨が、がらがらころがっている。

石をひろってなげつけたが、黒いものはびくともするけはいがない。

「やろう、死んでいるだな。ならこっちのものだ。」

それでも長七は、おっかねえもんで、そろりそろりとちかづいて、足でそっとけってみると、

やっぱりうごかん。つよくけると、黒いものは、あおのけにひっくりかえった。

長七が、まっ黒いけものをひきずって、ほらあなからだしてみると、なんと七貫め（約二十六キログラム）もあるおいぼれムジナであった。いのちだまが一ぱつ、みごと急所にあたって死んでいた。そいつが目をむいて、うらめしげに長七をにらんでいる。

長七はすっかりとくいになり、ムジナをひっかついで村へかえってきた。村の衆はムジナをかこんで、長七からやまんばの糸車の話をきき、たまげてしまった。

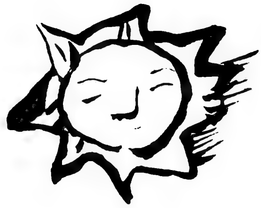
「いやあ、ムジナもでかいが、長七どんのきもっ玉もでかいなあ。」

「むーん。長七どんは、やっぱり丹沢一のかりゅうどじゃ。百姓じゃねえ。」

ところが、それからも長七は、あいかわらず、カラスかなんかをぶらさげて、山からかえってきたとさ。

〈再話・萩坂昇〉

箱根のあまのじゃく〈伝説・足柄下郡〉



むかし、むかーし、気がとおくなるくれえの大むかしのことだ。

箱根山に天からきたという、神さまとも人間ともつかぬつらをして、へそまがりで力もちのあまのじゃくというもんがおった。

だども、このあまのじゃく、くそ力がでるのは晩げだけで、おてんとうさまがあまのじゃくの頭にあたると、ふにゃふにゃと力がぬけてしまう。だからいつも、山のくらがりにすんでおった。

ある年の、すっぽーんとはれた日。

あまのじゃくは、箱根山のてっぺんにつっ立って、あたりを見まわしておった。

四方には、いろんなすがたの山やまが、でこん、ぼこんとならんでせいくらべしていた。

「とくにたかい山もねえし、だいたいうまくいっておるわい。」

あまのじゃくは、まんぞくげにぐるーっと首をまわしたが、西のほうを見たときに、ジャガリと

目がひかった。

そこには、雲の上にまで頭をつんだし、お姫さまの衣のようなすそをすんなりとひろげて、富士の山が立っとるでねえか。おまけに芦ノ湖のやつめが、そのはれすがたを、くっきり水鏡にうつしとる。

「なんとまあ、うつくしい山だんべさ。あの高さといい、あのすがたといい、ほれぼれするわい。里のやつどもが、箱根山にけつっぺたをむけて、朝に夕に富士山をながめてかしこまっているのも、むりのねえこったのう。」

あまのじゃくは、ためいきついて富士に見とれていたが、そのうち富士がにくくなってきた。

「わしの箱根山がそっぽをむかれるのは、そばにあいつがいるからじゃ。ようし、いまにみておれ、わしのくそ力でてっぺんをひったくってやっから。」

あまのじゃくは、岩のような力こぶをつくってみせた。

その晩、里のものがねしずまったころ、あまのじゃくは、てんびん棒で大ふご（竹やわらをあんでつくった物をいれる容器。もっこ）をまえとうしろにかついで、富士山へのぼっていった。土をほりおこすと、大ふごにいれて、

うんとこ　すっとこ

うんとこ　すっとこ

と、かついで海っぱたにきては、沖あいめがけて、土をぶんなげた。
つぎの晩も、そのつぎの晩も、

うんとこ　すっとこ
うんとこ　すっとこ

と、やらかしておった。
そしたらば、その土が海のどまん中につもりにつもって、島ができた。
それがな、いまも太平洋にある大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島の伊豆七島で、なげそこなって海っぱたにおちてできたのが熱海の初島じゃ。
島の八つぶんも土をほったから、さあ、これでだいぶひくくなったべと、あまのじゃくは富士山をながめたが、どうもおもったほどでない。
「むーん、まだたけえ、もうひといきじゃ、今晩もがんばらにゃあ。」
ところがその晩。よくばったあまのじゃくは、いっぺんにでっかい岩をひっぺがすべとしたが、えらくてこずって、時間ばっかしくってしまった。やっとこさふたつの大ふごにおしこんで、

エッチャ　モッチャ
エッチャ　モッチャ



と、箱根山をこそうとしたとき、里のほうから、

ケケロケー　ケケロロー

と、一ばんどりがないて東ん空が白み、おてんとうさまが、ほんわり、ほんわりとのぼってきたでねえか。

「こ、こりゃあ、えらいこった。おてんとうさまが頭にあたったら、わしの力がふんぬけてしまうわい。」

あまのじゃくは、あわくって大ふごの中の岩をふたつともそこへおんまけると、ふりかえりもせず山のくらがりをめがけてふっとんでいった。

やがて、おてんとうさまがのぼってきて、箱根の山をぎんぎら、ぎんぎらとてらしておった。すんと、おわんをふせたみたいなあたらしい山がふたつできているでねえか。

これがな、あまのじゃくがおんまけた土でできた山で、いまも箱根の山にでがん、でがんとのっかっている二子山じゃ。

うそでねえ、箱根へいったらたしかめてみな。ラクダのこぶみてえな山がふたつ、ちゃんとならんでいっからよ。

〈再話・萩坂昇〉

犬越路

〈伝説・津久井郡〉

むかし、甲斐の国（いまの山梨県）の武田信玄が、相模の国（いまの神奈川県）の北条氏をせめたときのこと。

甲斐の国は、相模の国と、相模川、道志川によってつながっているが、その川すじには、北条軍の出城がいくつもあって、かんたんにせめこむことはむずかしかった。

そこで信玄は、丹沢のたかい山やまをこえて、ふいをつこうとかんがえた。

道志川をくだって国ざかいまでくると、とっぷりと日がくれた。とおく川岸のがけの上に青根の部落が見える。そこはもう北条方で、ちかくにはのろし台がある。

のろし台は、川ぞいの山の上にいくつもあって、敵がせめてきたことがわかると、つぎつぎにのろしをあげて、小田原の北条方の本城まで、すぐに急を知らせるしくみになっている。

信玄は、青根部落をよけて、丹沢の山おくからながれてくる神の川の沢ぞいに、道のない山にわ



けいることにした。
ところが、山にはいりかけたころから、一ぴきの犬があとをつけてきた。
おっぱらおうとすると、ワンワンとほえる。
信玄のけらいたちはきみわるがった。
「こいつはきっと敵の犬じゃ。きりすてよう。いま、敵に見つかったらたいへんだ。」
けらいのひとりが、かたなをぬいて犬にちかづいた。
すると、信玄はそれを見てとめた。
「まて、だいじないくさのまえに殺生をするものではない。ちくしょうに敵もみかたもあるまい。」
そういって、えさをあたえた。
犬はよほどおなかをすかしていたのか、よろこんでそれをたべると、まるで信玄のかい犬のように、あとになりさきになりしてついてきた。
丹沢の山はけわしい。川すじにはいくつも滝があって、ゆく手をさえぎられ、おもうように軍ぜいをすすめることができなかった。
夜もふけて、方角もわからなくなった。
「このようすでは、とてもこすことはできまい。夜のあけるのをまとう。」



　さすがの信玄も、山中に一夜をあかす決心をした。
　すると、ついてきた犬が、信玄のさきに立って、
「どうしたのですか。もういくさはやめるのですか。」
というように、首をかたむけてふりかえった。
　信玄がまたえさをやると、犬はとっととさきに立ってあるきだした。
「りこうな犬じゃ。わしらに道をおしえてくれるらしいぞ。」
　信玄はそういうと、犬のあとについて軍ぜいをすすめた。
　すると、やがて月あかりに富士の見える山の上にでた。富士山がわかれば、方角もわかる。

「おお、小田原はあのあたりだぞ。ぬかるな。」

信玄の軍ぜいは夜があけるまえに、いっきに山を南にくだり、小田原をとりまく深沢、足柄、新庄の三つの城をせめおとし、大勝利をおさめた。

犬は、山をくだりはじめたころから、どこへともなくすがたをけしてしまった。

「こんどのいくさにかてたのは、あの犬のおかげであった。」

と、信玄は、犬がおしえてくれた峠の道に、〈犬越路〉と名をつけた。

いまもこの道は、丹沢山地をこえて甲斐にぬける、たったひとつのだいじな道になっている。

〈再話・今西祐行〉

白い ツバキの精

〈伝説・海老名市〉



いまからおよそ千二百年ほどまえ、聖武天皇の時代に、相模の国、海老名の里（いまの海老名市）に国分寺がたてられた。それからながい年月がたち、さまざまなできごとがあったが、とおくちかくから国分寺におまいりにくる人はあとをたたなかった。

国分寺金堂の庭にある大きなツバキの木の、かさをひろげたような枝には、まい年、白い花が、びっしりと、すきまもなくさいた。

そのうち門前になんげんかの茶店ができて、どの茶店もはんじょうした。

ある年、ちょうどその花もさかりのころ、寺のまえの茶店に、まい晩のように、お茶をのみにくる、ひとりのうつくしいむすめがあった。

むすめは黒いかみをながく両わきにたらし、からだがすきとおって見えるかとおもうほど、うすい、まっ白なきものをきていた。

顔だちといい、すがたといい、海老名の里のものとはおもえない気品があった。

たまに茶店の人が、えんりょぶかくことばをかけても、むすめはほほえみをうかべるだけで、なにもこたえようとはしなかったし、茶をのみおわると、金もおかずにすっと立っていく。それなのに、どの茶店でもむすめがくるのをたのしみにしていた。このむすめがくると、いくら夜がふけていても、わるい顔ひとつしないで、ありったけよい茶をだしてやった。

うつくしいむすめのことは、しだいにあたりのひょうばんになった。しかし、むすめがどこからきて、どこへかえっていくのか、それを知るものはひとりもいなかった。

やがて、国分寺の庭にさきみだれていた白いツバキの花が、ひとつちり、ふたつちり、ついに庭いっぱいにちりおちてしまうと、あのうつくしいむすめは、どこの茶店にもすがたを見せなくなってしまった。

つぎの年。

海老名の里に、春がきて、国分寺金堂の庭のツバキの花が、白くさきはじめると、むすめはまた門前の茶店にやってくるようになった。

「おいおい、きょ年のむすめが、またきはじめたというぞ。」

むすめのことは、たちまち門前の町のうわさになった。
門前の町の人たちは、
「いったいどこのむすめだろう。」
「どこからくるのだろう。」
と、ささやきあったが、それはだれにもわからなかった。
ある晩のこと。
国分寺のちかくにすむひとりの若者が、こっそりとむすめのあとをつけてみた。むすめはおぼろの月にてらされながら、国分寺金堂のほうへ、しずかにあるいていく。そして、大きなツバキが道いっぱいにかげをうつしているあたりまでくると、むすめのすがたは、かきけすように見えなくなってしまった。
若者は、ツバキの木の下にたたずんで、なんとかむすめのゆきさきをつきとめられないものかと、じっとかんがえこんでいた。
つぎの夜、茶店がそろそろ店をしめようとしているころ、むすめはまた、どこからともなくあらわれ、桜屋という店にはいった。
「今夜もむすめはきっとくる。」

と、茶店(ちゃみせ)のかげでまっていた若者(わかもの)は、いそいで桜屋(さくらや)にはいり、なにげなくむすめのそばにこしをおろした。

むすめはしずかにうつむいて、茶(ちゃ)をすすっている。若者(わかもの)はふところから、ながい糸をとおしたぬいばりをとりだすと、そっとむすめのきもののすそにさした。むすめは茶(ちゃ)をのみおわると、すこしも気づかずかえっていった。

むすめがあるくにつれて、若者(わかもの)のふところの糸まきが、くるくるほぐれていく。

「うーむ、きょうも金堂(こんどう)のほうへいくぞ。」

若者(わかもの)は足音(あしおと)をしのばせて、むすめのあとをつけていった。

やがて大きなツバキの木の下までくると、むすめのすがたは、またふっときえてしまった。しかし、若者(わかもの)のふところの糸まきは、まだくるくる、くるくるとほぐれている。

しばらくして、糸のほぐれがとまった。

若者(わかもの)は糸のゆくえをたどろうとしたが、その夜(よ)も月(つき)はおぼろで、見きわめようもなかった。

(よし、あすの朝(あさ)、この糸をたぐっていけば、きっとむすめのすむ家(いえ)がわかる。)

と、若者(わかもの)は心(こころ)につぶやきながら、家(いえ)にかえった。



つぎの朝はやく、若者は国分寺へでかけていき、夕べの糸をたぐっていった。糸は、金堂の庭の大きなツバキの木のてっぺんまでつづいていた。

若者はまよわず、ツバキの木にのぼっていった。すると、どうだろう。夕べむすめのきもののすそにさしたはりは、ツバキの木のてっぺんにさいている、まっ白な花の、一まいの花びらにささっているではないか。

おぼろの春の夜に、茶店にお茶をのみにきたうつくしいむすめは、国分寺金堂の庭の大きなツバキの木にさく、白い花の精であった。そうして、それっきり、二どとむすめは茶店にあらわれなかった。

このことがあってから、このツバキの木にさく白い花には、どの花にも花びらの一まいに、小さなはりのあなのあとがあるとつたえられている。

〈再話・角山勝義〉

てんぐにさらわれた吾八

〈伝説・足柄上郡〉



足柄上郡の篠窪の鎮守の森は、シイの木森というてな、天をおおうようなシイの木が、でーんとはえていた。その下は、冬はぽかぽか、夏にはひやーっとした風がふいて、そりゃあいいところだった。木の下には〈大山え五里　道了尊え三里〉（一里は約四キロメートル）の道しるべが立っていて、この森はちょうど大山（足柄上郡にある信仰の山）と道了尊（南足柄市にある大雄山最乗寺）のまん中あたりだったから、相模のてんぐたちの、たまり場になっておったそうな。

この村に、むかし吾八という男がおった。

それはある日の晩がたのことだったそうな。吾八は、湯からあがって、あがり段のところでふんどしひとつでやすんでいた。というところまでは家のものも知っているが、それっきり吾八は、ふいっとすがたをけしてしまっただ。

家のもんは、はじめはそこらにいるとおもっていたが、夜がふけてももどらん。あんじて（しんぱいして）たずねあるいたが、見たものはない。ふんどしひとつできえてしもうた。

村のもんもしんぱいして、そこらじゅうをさがしたが、見つけることはできなかった。吾八のかみさんは、

「てんぐさまの神かくしにあっただべ。」

となきくずれ、村のもんはたいまつをせんとうに、かねをたたき、

「かやせ、もどせ、かやせ、もどせ。」

とどなりながら山の中をさがしまわったが、やっぱり見つけることができなかった。

「こうなったらシイの木森じゃ。あの森へいくべ。」

かみさんは、シイの木森へかけだそうとしたが、村の衆は、

「とんでもねえ。こんどはおまえさんが、てんぐの神かくしにあいにいくようなもんじゃ。」

と、かみさんをしっかりかかえて、いかせようとしなかった。

かみさんはまい日なきくらしておったが、日がたつにつれ、これまでの縁とあきらめて、いなくなった日を命日ときめ、空そうしきをすませた。

はやいもので、それから三年たった。

きょうは吾八の命日。かみさんは、寺の坊さんや親類のものをよんで法事をすることになった。坊さんがなむなむとお経をあげ、親類のものたちもいっしんに手をあわせているときだ。そこへ吾八がぷくりとかえってきた。

うすよごれたふんどしひとつで土間につっ立ち、手には備前どっくり（備前やきというやきもののとっくり）をもっていた。

「おい、かえったぞ。ありゃ、きょうはだれの法事だい。おしょうさままでよんできてよ。おやじの命日かい。」

吾八がでっかい声でいうものだから、親類やら村のもんがふりかえってたまげた。坊さんもお経をやめて、あいた口がふさがらん。

かみさんがころげるようにとんでいって、吾八にだきついた。

「おまえさん、生きていたのかよ。いったいどこへいっていただよ。なんの知らせもねえので、てっきり死んだとおもって……。きょうはおまえさんの法事なんだよ。」

「な、なに？　おれの法事だって？」

「そうよ。三年ものあいだ、なんのおとさたなしでいるんだもん。」

みんなは吾八をとりまいた。

「い、いったいどこをほっつきあるいていただ。」

「おら、どこへもいっていたんじゃねえ。シイの木森でてんぐさまと、まい日すもうをとっていただ。夜は酒もりだ。ほれ、このとっくりは、てんぐさまからいただいた備前どっくりだぞ。」

吾八は、とっくりを見せびらかした。

「なに？　すもうをとっていたんだって？　おらの気も知らねえで三年もかよ。」

かみさんはおこった。

「三年だって？　おら、せいぜい三日だとおもっていたのによ。もっとあそんでいたかったんだが、てんぐのかしらが、ふんどしがきたなくなったから、うちへかえってとりかえろというもんで……。」

かなしい法事は、めでたい酒もりにかわった。吾八は、備前どっくりを手に、てんぐからおそわったという おどりをおひろめした。

すまぐら　すまぐら
すっそっそ
テレツクテンテン
テレツクテン



わしらは相模のてんぐ連
シイの木森で　おどりゃんせ
へっとこ　へっとこ
すっとんとん

かみさんや親類のもんは、はらをかかえてわらいころげた。
しまいには、かみさんもとびだして、吾八といっしょにおどっておった。
それからというもの、村まつりになると吾八は、てんぐの面をかぶっててんぐおどりをするようになった。
また、あのときの備前どっくりは、いまも吾八の家の宝ものとなっていて、めでたいときには、酒をいれてつかっているんだとよ。

〈再話・萩坂昇〉

ひとつだまの源
〈伝説・津久井郡〉



むかし、佐野川村（いまの津久井郡藤野町佐野川）に、源作というりょう師がおった。鉄砲の名人で、いったんえものを見つけると、けっしてのがすことはなく、一ぱつでしとめてしまい、二はつとたまをうつことはなかったそうな。それで、みんなから〈ひとつだまの源〉とよばれていた。

この源さん、ただ鉄砲がうまいだけでなく、えらくどきょうのある男だったそうな。

ある日、なかまといっしょに和田峠をこえて、八王子の宿へ買いものにでかけたのだが、一年に一どか、二年に一どの八王子ゆきだから、なにやかやと買うものが多く、夜あけに家をでたというのに、かえりにはもう日がくれてしまった。

和田峠は甲州街道のわき街道で、小仏峠のように人どおりもなく、ほんにさびしい峠道だった。オオカミがでるというので、夜この道をとおる人はめったになかった。

「源さんよう、今夜は恩方村（いまの八王子市）にとまっていくべ。いくら源さんだって、鉄砲なしじゃ、オオカミにかないっこねえだべ。」

なかまはオオカミをおそれてひきとめたが、源さんはきかなかった。

「おめえさんたち、こわけりゃとまっていくがええ。おらあ、子どもがまってるで、ひとりでかえるから。」

でも、源さんがひとりで夜道をかえって、もしオオカミにやられでもしたら、村のものになんといわれるかわからない。なかまはしぶしぶいっしょに夜道をかえることにした。

峠をこえてまもなくのことだった。なにかうしろに、もののけはいがしたのでふりかえると、はたしてオオカミが、音もなくあとをつけていた。赤い火の玉のようなふたつずつの目が、ひかっている。

はじめふりかえったときは、四つしかなかった目が、二どめにふりかえると、十も十二も一れつにつづいてあとをつけてくる。

「源さんよう、オオカミが、だんだんふえてくるぞ。どうすべえ。」

なかまは、がたがたふるえながら、源さんのそでをひっぱった。

すると、源さんは、



「おらあ、ちいとくたびれたで、ここらでいっぷくしていくべ。おめえさんたちさきにいってくれ。すぐおいつくから。」

そういって、道にこしをおろし、きせるをとりだした。

「源さん、なにいってるだ。そこにオオカミがなんびきもきてるでねえか。」

なかまがいっても、源さんはゆうゆうときせるにたばこをつめている。

「おら、もう知らねえ。ひとりでオオカミに食われるがええ。」

なかまがそういってさきにかえりかけると、うしろで、

「おい、ちょっくら火をかしてくれねえか。」

と、源さんの声がした。

見ると、源さんは、くわえたきせるのさきを、火のように赤くひかったオオカミの目にちかづけている。たばこの火をかしてくれと、オオカミにいっているのだ。

さすがのオオカミも、源さんにはかなわないと、すごすごとくらやみの中へすがたをけしてしまった。

源さんはなかまにおいつくと、いったそうな。

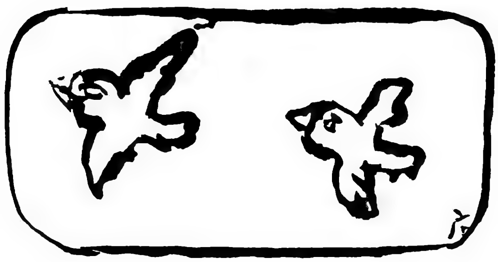
「オオカミってやつは、けちなやろうだ。おらにたばこの火もかしてくれなんだ。」

これにはなかまもあきれていったと。

「源さんよ、おめえさんはいままで〈ひとつだまの源〉っていわれていたがよ、これから〈たまなしの源〉っていおうかよ。」

〈再話・今西祐行〉

海や沼の主とかたった話



芦ノ湖の主、九頭竜

〈伝説・足柄下郡〉

とおいむかし、箱根の芦ノ湖が万字が池とよばれていたころ、その万字が池に、胴がひとつで頭が九つという、おそろしい竜がすんでいた。竜は九頭竜とよばれていた。九頭竜は、月が青白くひかる晩になると、しらしらと湖をわたり、里へきて、女子どもをひとのみにすると、まんぞくそうに湖へかえっていった。

だいじにそだてたわが子を三人もうしなった家もあった。

里の衆はおそれおののき、月が青白くひかる

晩には、がんじょうな戸をたて、そとに子どもをださんようにした。それでも竜は、こけのはえた胴をくねらせて家いえをたたきつぶし、子どもたちをのみこんでしまった。

目のまえでわが子をのまれたものは、くるったようにかまやくわをふりあげて、竜にうってかかった。

しかし、竜にかなうはずはない。ずたずたにひきさかれ、むごいすがたとなって食われてしまう。それだけではない。手むかいされた竜のいかりはすさまじく、山はもえあがり、畑は水びたしとなり、おそろしい病にばたばた人がたおれた。

「こら、竜神さまがおこったんじゃ。ひもじくなって、くるったんじゃ。」

里の衆はよりあつまった。

「なんとしても、竜神さまの心をしずめねばならん。このままでは、村は死にたえてしまうぞ。きけばこんなときには、むすめを人身御供(いけにえ)として竜神さまにさしだせばよいとか。」

人身御供ときいて、みんなはふるえおののいた。しかし、村のためにはしかたがない。

「もうけっして、手むかいはしませんだ。年に一ど若いむすめを人身御供としておそなえしますで、なんとかお心をしずめてくだせえ。」

里の衆はそういって地にひれふし、竜にいのった。そして、それからはまい年、若いむすめをさ

しだすのがならわしとなった。くじにあたったむすめのなきさけぶすがた、だきしめる親のすがたは、あわれともなんともいいようがなかった。

この話がやがて、箱根山中で修行していた万巻上人の耳にはいった。

「なに？　竜神に人身御供じゃと。」

上人は里へやってきた。

「村の衆、それはそれはなんぎであったのう。この万巻、み仏の力によって、かならずや竜神をたいじしてくれよう。さっそくじゃが、湖のほとりに、石段をつくってくだされ。」

里人が石段をつくると、上人はその上で二十一日間、断食していのりつづけた。

雨にうたれ、風にふかれながら、上人はいっしんにいのりつづけた。

満願の夜となった。上人がひときわたかくいのりをとなえると、青くひかった湖面にとつぜんゴーッとうずがまきおこり、九頭竜がうかびあがってきた。

竜はふかく頭をさげると、

「万巻上人さま、とうといお経の力で心のよごれがぬけおちました。いままでのつみは、なにとぞおゆるしのほどを。」

と、わびた。



「ならぬ、ならぬ。おまえのおかしたつみは、山よりもおもい。そのようなことばだけでは、ゆるすことはできん。」
と、上人は竜をしばり、湖底からはえているスギの木にゆわえつけた。
「竜よ、そこでおまえがおかした罪悪を、とくとかんがえるがいい。」
といって上人がかえろうとすると、竜は、
「上人さま、上人さま、まってください。」
とよびとめた。竜はなみだながらに、
「わたしはつみのつぐないとして、これからは箱根の山と村をおまもりいたします。どうか、わたしのもうすことをしんじてください。」
と、いった。
上人はなきながらちかう竜のすがたをあわれ



とおもい、竜のことばをしんじてなわをといてやった。すると、竜は万巻上人にしずかに九つの頭をさげ、湖の底にしずんでいった。

それからというもの、箱根では山火事もなく、湖もあふれることはなかった。山くずれのときは、九頭竜が身をのりだして、それをおしとめて村をまもってくれた。

里人は、

「これは九頭竜さまがまもっていてくださるからじゃ。まもり神としてまつらねば。」

と、芦ノ湖のほとりにやしろをたてて九頭竜をまつり、九頭竜神社と名づけた。

そして、年に一ど、三斗三升三合三勺三才（約六十リットル）の赤飯をひつにつめて、船で九頭竜がつながれていたスギの木のところにしずめ

てくるようになった。

もし、そのひつがうかびあがってくると、九頭竜がうけとることをやめたといい、その年には不漁になったり、山があれ、わるい病がはやるといわれていた。

この行事は、いまもまい年七月三十一日にひらかれる芦ノ湖の湖上まつりにひきつがれている。赤飯の量は三升三合三勺三才とへり、御供船という三そうの船で清水の沢というところへいってしずめてくるが、そのときにはけっしてしゃべってはならず、またかえりにふりかえると、その年には大水がでるという。赤飯がなげられたころをみはからって、箱根神社の大とうろうに火がともされる。これは氏子が竜神にささげる聖火といわれ、このまつりは竜灯祭ともいわれている。

〈再話・萩坂昇〉

まさかりが淵

〈伝説・横浜市〉



むかしのことだ。
戸塚の里（いまの横浜市戸塚区）にひとりの木こりがおった。ある日、しごとで山にでかけたが、いつまでたってもかえってこなかった。
「ひょっとしたら、足をすべらせて、滝つぼにおちたんではなかんべか。」
と、人びとはうわさした。
しかし、木こりのおっかあは、
「あの子は、しっかりもんだで、そんなことあってたまるか。」
と、いいはった。
だが、いく日たっても、木こりはもどってはこなかった。村じゅう総出で、山がりをやったが、やっぱり見つからなかった。

さすがのおっかあも、せがれが滝つぼにおちて死んだとおもわないわけにはいかなくなった。やむなくそうしきをだした。

ところが、いなくなって、ちょうど三年めに、木こりがひょっこりかえってきた。山へでかけたときと、そっくりおなじかっこうをして、あのときのようにまさかりをかついでな。

「ゆうれいじゃなかんべな。」

と、人びとはうたがったが、おっかあは、大よろこびで、

「おめえ、どこへいってただ。」

と、きいた。

木こりは、だまって下をむいておったが、あんまりおっかあがたずねるので、やがて、ぽつり、ぽつりはなしだした。

あの日、木こりは、せっせとしごとをしていたが、おもいっきりうちこんだまさかりが、つるりと手からすべった。

まさかりは、えらいいきおいで、がけをころがりおち、ドボンと、滝つぼにきえてしまった。

だいじなまさかりだ。あれがなくてはしごとができぬ。木こりは、あわててかけおり、滝つぼの岸に、はらばいになって、水の中をのぞきこんだ。



すると、おどろいたことに、水の底に、いままで見たこともないようなきれいなむすめがいて、こちらを見あげているではないか。

「おうい、むすめさんよう。いまそこにまさかりをおとしたんだが、おめえさん見なかったかよう。」

木こりは、でっけえ声でたずねた。

むすめは、にっこりわらっていった。

「あのまさかりは、あなたのものですか。まさかりはかえしてあげましょう。だから、目をつぶってここへきてくださいな。そうして、わたしについていらっしゃい。」

木こりは、いわれるままに目をつぶり、滝つぼの中へはいっていった。むすめはすぐに木こりの手をとり、あるきだした。

しばらくいくと、むすめがいった。
「さあ、もう目をあけていいですよ。」
目をあけた木こりはおどろいた。まあ、なんてりっぱなおやしきだろう。目もさめるようなうつくしさだ。
おまけに、木こりがざしきへすわると、つぎつぎと、ごちそうがはこばれてくるではないか。
「さあ、どっさりめしあがれ。あなたは、わたしたちの恩人です。」
「えっ、恩人だって？」
「はい、あなたのなげたまさかりが頭にあたって、滝つぼのまものが死んでしまったのです。おかげさまで、わたしたちは、これからあんしんしてくらせます。ありがとうございます。」
くる日も、くる日も、ごちそうがでる。酒がでる。むすめがおどりをおどってみせるというぐあいで、あっというまに三日もたってしまった。
いつまでも、こうしていたいのはやまやまだったが、おっかあがしんぺえしているべえとおもうと、きゅうに家にかえりたくなった。
むすめがひきとめるのをふりきって、まさかりをかついでもどってきた。と、まあ、こういうわけだ、と木こりははなした。

「そんなばかなことがあるもんか。だいいち、おめえは三日だというが、おめえがいなくなって、三年もたっているんだぞ。このうそつきやろうめ。」

と、人びとはいった。

「いや、うそではねえ、たしかに、あの滝つぼの中に、きれいなむすめさんがいて……。」

といいかけて、木こりは、きゅうにまっさおになってしまった。

「せがれや、どうした。ぐあいでもわるいのか。」

おっかあがびっくりして、木こりのからだにすがりついた。とたんに、木こりは、がたがたふるえだした。

「おっかあ、おれは、えれえことしてしまった。むすめさんは、わかれぎわにいったんだ。『わたしは、この滝つぼの主です。わたしにあったことは、だれにもいってくださるな。もし、このやくそくをやぶったら、あなたのいのちはないものとおもってください。』って。それなのにおれは……。」

そこまでいったとき、木こりは、おっかあのうでの中に、ばったりたおれ、ことりといきをひきとった。

それから、村の衆は、その滝つぼのことを〈まさかりが渕〉とよぶようになったということだ。

〈再話・長崎源之助〉

ぼんぼんザメ

〈伝説・足柄下郡〉



相模湾につきでた小さな半島、真鶴半島の沖あいを笠島沖という。

むかし、ここには夫婦のサメがすんでいて、子どもをたくさんそだてていた。サメの夫婦は、じぶんたちの海にやってくるものをひどくきらった。漁船がやってくると、ぐーんとうきあがってきて、船をつきあげた。船は浅瀬にのりあげたように、へさきをつきあげ、うごくにもうごけなくなる。そのくらいなら、まだいい。虫のいどころのわるいときには、どーんとつきあげて、船をひっくりかえす。こんなふうにして、サメの夫婦はじぶんたちの海と子ザメたちをまもっていた。

「笠島沖へちかよるでねえぞ。主のサメがいるぞ。」

と、漁師たちは、笠島沖をおそれていた。このちかくで漁をするときも、もりを手にした若衆をのせたサメおい船についてあみをうっていた。

あるときのことだ。上方（関西地方）から一そうの船がつりがねをつんで江戸へとむかって船出し

た。その船は紀伊半島沖の難所、熊野灘もぶじにとおり、伊勢湾もすぎ、遠州灘もことなくとおり、ようやく伊豆の下田沖をとおりすぎた。が、江戸はもうじきじゃとおもうと、ふと心がゆるんだ。

「どや、今夜はひとつ、真鶴の船宿にとまって、あす、ゆっくりたつことにしよか。」

船頭のひと声に、船子(船ののりくみ員)たちはとびあがってよろこんだ。帆をいっぱいあげると、かじを西にむけた。船つき場は、真鶴半島の西がわにある。船は半島のさきの笠島沖をとおらなくてはならん。しかし、そこがおそろしいサメのすむところじゃとは、だれひとり知らなんだ。

やがて、笠島沖にさしかかったとき、ふいに船がぐらーっともちあがったかとおもうと、うごかなくなった。

「浅瀬やっ！　船がわれるど！　よけろっ。」

船頭はかじをきってろを力いっぱいこいだが、船はびくともしない。

「こんな沖あいに浅瀬があるもんかいな。」

船頭は船ばたから海をのぞいた。

「あっ！　サメや！　大ザメやでえ！」

大ザメが、どけどけといわんばかりに、船をぐいぐいとおしあげてくる。

ひとりの船子がもりをとると、大ザメめがけてつきさした。もりはサメのせなかへふかぶかとつ

きささり、サメの血で海は赤くそまった。さすがの大ザメもぐらっと身をしずめたが、それでもひるまず、からだをひるがえし、ドーン、ドーンと船底をつきあげ、つきあげてくる。

「ひっくりかえされるでえ。」

まえにもましてはげしいつきあげに、船はぐらりとかたむいた。つりがねが、ずずっとうごいた。

「かねをすてろっ！　船荷をかるくするんや。」

船子はつりがねをかかえると、むかってくる大ザメをねらってころげおとした。ザブーンと水音をたててしずんだかねは、どうしたはずみか、サメの頭にすぽっとかぶさった。大ザメは、かねもろとも海の底にしずんでいった。

ぶくぶくとあわがたち、海面にはうずがまきおこった。

「ひどいめにおうたなあ。サメのやつめに、お寺さまへおさめるかねを、みすみすとられてしもた。」

船頭や船子は、海をのぞいてくやしがった。

船はうごきだした。ところが、また、ぐらっと船がもちあげられて、うごかなくなった。

「あっ！　大ザメや。まだいやがったんや。」

それは、夫をしずめられた妻のサメだった。夫のかたきとばかりに、船をねらってきたのだ。

船子は、もりをかまえて大ザメをつきさそうとしたが、サメはからだをひるがえしては船底めが

けてぶつかってくる。夫をうしなった妻のサメのすさまじさに、船頭たちはふるえあがった。

「よし、こうなったらまたかねや。もうひとつかねをなげろ。かねでサメをしずめてしまうんや。」

船頭や船子は、つりがねをかかえてサメがむかってくるのをまった。

「もう一ど、サメにかぶせるんや。うまくいかんかったら、いのちはないで。」

血ばしった目が、サメをおいかけた。それっ、いまや。



ザバーン

つりがねはみごと大ザメをすっぽりとのみこむと、海の底にしずんでいった。船頭も船子も、船べりをつかんで、いつまでも、しずんでいくかねを見つめておった。

「とんでもない船旅になりよった。つりがねを海へおさめたやなんて。」

「でも、いのちがたすかってよかったやないか。あきらめよか。」

船頭はようようのことで真鶴に船をつけると、船宿のおやじにサメをたいじしたことをかたった。

この話はせまい漁師町にすぐひろまった。

「なにい？　笠島沖の主の大ザメを二ひきもたいじしたって？　そら、ほんとかいな。」

漁師たちは、船宿におしかけてきた。

船頭は身ぶり手ぶりで、かねをしずめたことをはなした。

「どうも、ほんとうらしいぞ。なら、あす、笠島沖へいってたしかめてみるべ。」

と、つぎの朝、浜の漁師は、サメおい船をせんとうに、おそるおそる笠島沖へと船をこいでいった。

すると、海の底からボーン、ボーンとかねをたたくような音がひびいてくる。

「あら、なんの音だべ。」

と海の底をのぞくと、二ひきのサメがとじこめられたというつりがねがふたつしずんでいるのが見

える。それを、子ザメたちが、小さな尾びれでボーン、ボーンとたたいて、かねをひっくりかえし、中の親をたすけだそうとしているのだった。

子ザメたちは、はるかとおくからいきおいをつけて、

ボーン　ボーン　ボーン

と、かねにぶつかっていく。子ザメの尾びれからは血がふきだし、いまにもちぎれそうになっていた。けれども子ザメは、ひるまず、つぎつぎとぶつかってくる。

ボーン　ボーン　ボーン　ボーン

かねの音はいつまでも海の底でなりつづけた。

それから、笠島沖のサメをぼんぼんザメというようになった。いまも海の底から、かねをたたく音が、とおくかすかにきこえてくるという。

〈再話・萩坂昇〉

黒ネコとキュウリ〈伝説・横須賀市〉

浦賀（いまの横須賀市浦賀）の港は、むかし、たいそうはんじょうしておった。上方から江戸へものをはこぶ大船小舟が、まい日のようにではいりするので、港はいつもにぎわっておった。

そのころ、東浦賀の長川橋のあたりに、菊屋という船宿があった。いきのいいじいさまが死んでしまってからは、気のいいばあさまと年とった黒ネコがのこされたが、それでも店はしめず、きてくれる客だけをあいてにくらしておった。

ある年の、夏のはじめのころだった。

夕方、上方から一そうの塩船が港にはいってきた。江戸はもう目と鼻のさきだが、風むきはよくないし、しおのかげんもわるい。ここでひとやすみしていこう、ということらしかった。

まもなく塩船から、さしこばんてん（いちめんにこまかくさしぬいをしたもめんのはんてん）をはおった、ひとりの若い船頭がおりてきて、菊屋へはいった。



「ごめん。ひと晩せわになるで。」

そういいかけて、船頭がふと見ると、土間においてあるおけに、マグロのかた身がいれてあり、大きな黒ネコがまえ足をかけ、しきりににおいをかいでいる。

船頭はおもわず、

「こらあっ。」

とどなるなり、おもいきり横腹をけとばしたが、黒ネコはにげもしない。ゆっくりと船頭のほうをむき、うるさそうに、じろーっと見すえたので、船頭のほうがきみわるくなってしまった。

船頭のどなり声に、ばあさまがおくからでてきた。

「こりゃあまあ、お客さんでしたかな。いらっせえまし。」

それから、まだおけに足をかけたままの黒ネコの首すじをとっつかまえ、鼻づらを土間の土にすりつけながら、

「おめえは、なんていうことをするだ。だいじなお客さんにさしあげるもんに、手をだすなんて、とんでもねえ。やいこら、やい。」

ばあさまは、ネコをぎゅうぎゅう、おさえつけながら、しかる。ネコは顔をへしまげながら、船頭のほうを、うらめしそうにぎらぎらにらむ。その目のすさまじいこと。

船頭はすっかりしらけた気もちになってしまった。菊屋にとまる気もうせた。
「おばあさん、せっかくだが、わしゃ、船でとまることにする。」
「あれまあ、そういわねえで。今夜はいきのいいさしみをごちそうしますで。」
と、ばあさまはひきとめたが、船頭は、船にかえってしまった。
その夜ふけのこと。
船頭はなぜかねむれぬまま、船ばたへでて、海をながめていた。よい月夜だった。
とつぜん、ガリガリと、なにかが船べりをひっかくような音がする。はて、とおもってのぞくと、なんと、大きな黒ネコだ。いまにも船にはいのぼろうとしている。それが、顔をあげて船頭をにらんだ。青く目がひかった。
船頭はぞっとした。
「ありゃあ、船宿のネコだ。ええい、きみのわるい。おらをうらんで、ここまできたのか。」
船頭はネコをめがけて、おもいきりまきをなげつけた。ギャッとさけんで、ネコは海へころげおち、もがくようにして、はらを見せると、波間にしずんでいった。
つぎの朝、塩船はなにもなかったように、帆をあげて、江戸へむかっていった。
菊屋のばあさまは、かえってこない黒ネコをさがしてあるくうち、海岸にうちよせられている黒

ネコの死体を見つけて、おどろいた。

どうして死んだのか、わからぬままに、ばあさまはネコのなきがらを、庭のかたすみにうめてやった。

それからちょうど一年たった夏のはじめ、また上方の塩船が港にはいってきて、あの若い船頭が船をおりた。船頭が菊屋のまえをとおりかかると、ばあさまが水をうっている。ばあさまは、若い船頭をおぼえていた。

「こりゃあまあ、ごきげんさんで。このまえはわるうございましたなあ。今夜ここでおとまりなら、どうかうちで、ゆっくりやすんでいってくだせえまし。」

そういわれると、つい船頭は、菊屋にとまる気になった。

へやにあがると、話はしぜんに、きょ年のことになった。ばあさまは、

「あのネコもなあ、どうしたわけか、死んで浜にうちあげられましてなあ。ふびんだで、庭のすみにうめてやりましただよ。」

だまってきいていた船頭はネコをころしてしまったときのことをおもいだして、顔をくもらせた。

ふろからあがると、ばあさまがぜんをはこんできた。



「ことしはめずらしく、もうキュウリがとれましてなあ。初なりだで、どうぞめしあがってくだせえ。」

見ると、ぜんの上には、さしみとキュウリがのっている。船頭は、キュウリをひときれ口にいれた。なんともいいようのない、みょうなあじ。船頭はおもわず口からだした。

「おばあさん、このキュウリは、どこでとれたんかね。」

「ほれ、そこの庭のすみで。」

ばあさまのゆびさすさきを見て、船頭はぎょっとした。

「おばあさん、さっきネコを庭にうめたといったが、ネコはどこにうめたんじゃ。」

「そういえば……。」

ばあさまも、はっと気がつき、ふるえ声で、

「いまキュウリがはえているあたり。」

船頭は顔色をかえ、もったはしをなげだして庭へおりると、くわをかりて、キュウリの根もとをほりだした。

ひとくわ、ふたくわ、土をほりだすとすぐに、なにやら白い骨があらわれた。ひろいあげた船頭はおもわずわっといって、骨をほうりだした。キュウリの根は、ネコの頭がいこつの、ぽっかりあいた両の目のうろから、ひょろひょろとのびていたのだった。

それからまもなく、ばあさまは病気になってひっそりと死に、菊屋はすむ人もなく、あれてしまったという。

塩船の、そのわかい船頭も、二どとすがたを見せなかった。

〈再話・牧ひでを〉

キツネやタヌキとかたった話



おどり与平とおどりギツネ

〈伝説・藤沢市〉

むかし、笹窪というところに、よめなしとよばれるキツネがすんでいた。

なんでも、キツネのよめいり……ほれ、空がはれているのに、雨がふってくるのをキツネのよめいりっていうだろうが……そんな雨がふったときに、このキツネはまあ、よめさまもいないのに、むこさま気どりでしゃなりしゃなりあるいておったんだと。そこから、こういう名まえがついたそうな。

ところで、このよめなし、いたずらのめっぽうすきなキツネであった。おなかのあたりがもそもそっとするともういけない。いたずらの虫がむっくり目をさます。

「よめなしにはこまったものよ。いや、このあいだのことだが、おらんとこのニワトリが、モウー、モウーって牛みてえにないただよ。おら、なにごとがおこったのかととんでいったらば、よめなしのやつが、ニワトリのまわりをくるくるまわって、ニワトリに『モウー、モウー。』ってなかせてるだよ。おら、はらがたって、はらがたって……。」

「へえー。ニワトリまでばかしただか。おらんとこのばあさまだって、ええめにあっただぞ。なに、このあいだの夜のことだが、葛原へよばれにいったばあさまのかえりがあんまりおそいもんで、おら、村のはずれまでむかえにいっただよ。そうすると、ばあさまが、こえだめのまえで、きものをぬいでるでねえか。びっくりこいて、おらが、

『ばあさま、ばあさま、なにしてるだ。』

と、きくと、

『なに、いい湯がわいてるっていうから、おら、ひとつふろをごちそうになろうとおもうて。』

なんていうでねえか。そのときは、まあ、あぶないところで、ばあさまをたすけたんだが、いや、まったく、よめなしにはゆだんもすきもあったもんでねえ。」

村人たちは、よるとさわるとそんな話をした。そして、なんとかしてよめなしをふんづかまえることはできないものかとはなしあった。しかし、よめなしは、若いくせになかなかの術達者で、けっしてつかまることはなかった。

ところで、この笹窪に与平というおどりのうまい男がいた。とりわけ、与平の女形おどり（男が女の役をしておどる）は天下一品で、村の若い衆なんぞ、ついついその女ぶりに見ほれてしまうくらいであった。

その与平が、ある日の午後、引地川ぞいの道をあるいていたとき、馬のふんを見つめてにやにやしているよめなしを見つけた。

「ははん、よめなしのやつ、また、なにかわるさをしようというだな。よし、ひとつきょうは、やつのばけの皮をひんむいてやるべえ。」

与平はさっそく菜の花畑に身をひそめて、じっとよめなしを見はっておった。

よめなしは、あいかわらず馬のふんを見つめて、にやにやしていた。が、なにをおもったのか、コーンとひとつ、かんだかいなき声をあげると、ひょいとすがたをけした。と、それまでほこほことゆげをあげていた馬のふんは、うまそうなぼたもちになってしまった。与平は、おもわず目をこらした。

と、ちょうどそこへ、庄屋の弥兵衛さんがとおりかかった。弥兵衛さんは、竹の皮の上でゆげを



あげているぼたもちを見つけると、にこっとした。そして、あたりを見まわしてだれも見ていないことをたしかめると、すっとぼたもちに手をのばした。

「うへっ、庄屋さまがばかされていなさる。」

与平は、ぷっとふきだしてしまった。

が、つぎのしゅんかん、与平は青くなった。弥兵衛さんが、ぼたもちをたべだしたのだ。

「こ、こりゃ、いかん。」

与平は、菜の花畑からとびだすと、大声でさけんだ。

「庄屋さまあ、食っちゃいけねえ、食っちゃいけねえ、そりゃ、馬のくそだあ。」

しかし、与平の声がきこえないのか、弥兵衛さんはいっこうに馬のふんをたべるのをやめようとしない。

「ええい、しぶといキツネじゃ。ならば、しかたがない。ゆるしてくだせえ、庄屋さま。」

とうとう与平は、弥兵衛さんのむこうずねを、ええいとばかりけとばした。

ところが、うっとうめき声をあげてひっくりかえったのは、与平のほうだった。

「うっううう……。」

あまりのいたさに、与平はうーんとのびてしまった。

与平がけとばしたのは、庄屋さまではなく、じつは石のお地蔵さまだったのだ。
それからどれくらいたったろう、目のまえに黄色いものがちらちらするので、与平は目をさました。
よめなしだった。よめなしがしんぱいそうに与平の顔をのぞきこんでいたのだった。
「こ、この……。」
与平は、そういうがはやいか、よめなしにとびかかった。しかし、そのときはもう、よめなしのからだは、いちめんの菜の花畑の上をとぶようにはしっていた。

それからなん日かした朝のこと、与平は、お地蔵さまのちかくで、またよめなしにでくわした。こんどはよめなしは正体がないほどねむりこけていた。まわりに酒どっくりや、タイの頭やらがちらかっているところを見ると、またわるさをしでかしたらしい。
「これは、よいところにでくわした。よし、ひとつきょうは、このくそギツネをふんづかまえてくれん。」
与平はさっそく朝草をいれるためにかついできた大きなかごをおろすと、そのかごをさかさにもって、そろり、そろりとよめなしにちかづいた。よめなしは、あいかわらずグワン、グワンと酒

くさいいびきをかいていた。

「ふん、このざまじゃ、しばりあげられても気がつくめえ。」

与平は、かごを大きくふりかぶって、いまにもよめなしにとびかかろうとした。

が、与平は、ちょっとまてよ、とおもった。このまま、生けどりにしたんじゃあつまらねえ。それではいままでなぶりものにされたおれの気もちがおさまらん、おなじ生けどりをするにしても、なにかむねのすくようなさいくはないものか。

与平は、そうだとおもった。

(おれも笹窪一のおどり手といわれた男だ。ひとつ、おれの女形おどりでこいつをばかしてやるべえ。こんどは、おれがこいつをばかすばんだ。)

与平は首にまいた手ぬぐいをあねさんかぶりにすると、さっそくいい声でうたいだした。そして、声にあわせておどりだした。

おいとこそうだよ　おこんののれん
みせやとかいてある　おんめは十六
十代つたわる



ふな屋のむすめさんよ

村いちばんのおどり手だけあって、与平のおどりはみごとだった。与平は、もうどこから見ても若いむすめだった。

と、そのうち、いい声につられて、よめなしが左の日をうっすらあけた。そして、

「はん？」

というような顔（かお）をした。目のまえで、見知（みし）らぬいいむすめがおどっている――。

よめなしは、あわてて右（みぎ）の目をあけた。まちがいない。まちがいなくいいむすめが目のまえでおどっている――。

よめなしは、ぽっと顔（かお）を赤らめた。そして、ふらふらと立ちあがったかとおもうと、熱（ねっ）にうかされたようにおどりはじめた。

そのさまを見て、与平（よへい）は、しめしめとおもった。

（ふっふ、よめなしのやつ、とうとうひっかかったか。よめなしも、やはりよめがほしいとみえる。ならば、さあ、おどれ。おどりおどって、むすめの気もちをなびかせてみい。）

与平（よへい）は、いい声（こえ）をいっそうはりあげてうたいつづけた。

あのこいいこだ
あのことそうなりゃ　三年三月（みつき）でも
はだかではらもしょいましょ
おびる（こえ）もくみましょ

　　おまんまもたきましょ

時がたつにつれて、よめなしのおどりもめきめき上達していった。中でも、ふさふさとしたしっぽで、

「ハア！」

「ヤッ！」

と、調子をとるところなんぞはなんともいえなかった。

そのうち、与平はじぶんのあいの手をつとめているのがキツネのよめなしだということをすっかりわすれていった。与平の頭の中には、もう、ふな屋のむすめと、そのむすめをすきになった粉屋の男のことしかなかった。与平のうたう声は、ますますはりのあるいい声になっていった。

　　東海道五十と三次　粉箱やっこらさと
　　かついで西のはてから　東のはてまで
　　あるかにゃなるまい　おいとこそうだよ
　　　　　　　　　　　　おいとこそうだよ

それからどれくらいたったろう、与平ののどはかれ、おどる足どりもあやしくなって、とうとうしりもちをついてしまった。

与平は、ぶるっとさむけをかんじた。

と、それまであかるかった菜の花畑に、さあっとやみがおしよせてきた。

与平はあわてた。あわててあたりを見まわした。そして、はじめて、やられた、とおもった。夜は、もうとうのむかしにきていたのだ。

「ふっふ、ばかすつもりが、またばかされて……か。」

菜の花畑のむこうを、キツネ火がひとつ、ゆらゆらととおざかっていく。与平は、しばらく、ぼんやりとその火を見つめていた。が、きゅうに立ちあがると、大声でいった。

「よめなしよう、またこいよう、おれといっしょにおどるべえ。」

それから笹窪のあたりでは、キツネと人間がおどっているのをよく見かけたという話だ。

〈再話・植田儀武〉

タヌキの山門

〈伝説・鎌倉市〉



いまから二百年もむかしになろうか。

相模と甲斐の国ざかいにある寺へ、りっぱな僧がたずねてきていった。

「わたしは鎌倉、建長寺の万拙おしょうともうします。寺の山門がふるくなったので、つくりかえたいとおもい、諸国をまわってご寄付をねがっております。ここにはみごとなケヤキがあるようなので、ひとつそのケヤキをご寄進いただけまいか。」

建長寺といえばこの寺の本山だったので、寺のおしょうは万拙おしょうをおくの間へとおし、てあつくもてなして、ケヤキのことはよろこんでひきうけた。

ところがしばらくすると、こんどは建長寺の万拙おしょうが、病のとこについてしまったという知らせが、相模の寺へつたわってきた。

「万拙おしょうのご健在のうちに、ケヤキをおくりださねばならぬ。」

と、寺では村人をたのんで山やまをまわらせ、よいケヤキをさがしているところへ、おふれがまわってきた。

おふれには、建長寺の万拙おしょうがこの地へくるということがかいてあり、ついては犬をはなしがいにしてはならぬこと、おしょうが食事をする席に同席してはならぬことなど、してはいけないことがいくつもかいてあった。

「おかしいな、ご病気とうかがっていたが。それに、このまえにはこんなおふれをださずにこられたのに。」

寺のおしょうはふしぎがっていた。

三日ほどたって、万拙おしょうがやってきた。寺のおしょうが、

「病にかかられたとうけたまわりましたが、おみまいにもあがらず、もうしわけございません。おやくそくのケヤキのことは、いま手配しておりますから、いましばらくおまちください。」

というと、万拙おしょうは、

「なに、ケヤキじゃと。ああ、そうじゃったのう。ひとつ、おたのみもうす。ところでこのたびは、お金のほうでうかがったのじゃが。」

と、なにやらあわてていった。

「それもそうですな。材木だけあっても山門はできませんからの。いやいや、しつれいいたしました。」

と、寺のおしょうが金をつつんでわたすと、万拙おしょうは、ほっとしたように、

「では、お礼に書でもかいてしんぜましょう。」

といって、なにやらかいてくれたが、なにがかいてあるのかだれにもよめない。それでもありがたくおしいただいて、やがて食事のときとなった。万拙おしょうは、

「わしは、へんな性分でのう。ひとさまがおられると、食事ができんのじゃ。どうか、席をはずしてくだされ。」

という。おかしなおしょうさまだとはおもったが、おふれにもあったことなので、寺のものはへやをでていった。

　ところが、へやをでたとたん、グシャグシャ、ビチャビチャとおかしな音がする。あまりふしぎなので、そっとふすまのすきまからのぞくと、万拙おしょうは、おぜんの上にめしもしるもぶちまけ、口をつきだしてたべているのだった。

「なんとぎょうぎのわるいおしょうさまだ。あれでも天下の建長寺さまかいのう。」

と、寺のものはあきれてしまった。食事がおわってふろへあんないすると、万拙おしょうはふろの

中で、ジャボジャボとすさまじい音をたてている。でたあとを見ると、湯どのの天井やかべには湯がとびちって、まるで犬が水あびしたようなありさまだ。

「うーむ、こいつはただのおしょうでないぞ。犬ぎらいといい、めしの食いかたといい、どうもおかしい。なにやらばけものではないだろうか。」

寺のおしょうは首をかしげたが、もしほんとうの、万拙おしょうだったら、たいへんだから、だまっておった。

つぎの朝、万拙おしょうはふかく礼をいって、小原の宿へたっていった。寺のおしょうは、小原の宿へこっそりつかいをだして、万拙おしょうがあやしいことを知らせた。

小原の宿でも万拙おしょうは、いろいろおかしなふるまいをした。宿のものは、これはばけものにちがいないと、かっていたむく犬のつなをといて、はなしておいた。

つぎの朝、万拙おしょうが、

「たいへんおせわになりました。」

と、礼をいってそとへでたとたん、むく犬はくるったようにほえながら、きばをむいておしょうにとびかかった。

万拙おしょうはのどぶえにかみつかれ、血をふいてたおれると、そのままいきをひきとってし



まった。
　ふところの中には、山門建立のためにくろうしてあつめたらしい金が、金三十五両、銭五貫二百文がしっかりとおさめられていた。
「ざまあみろ。いまにばけものの正体をあらわすぞ。」
　宿の人びとはそういって見ていたが、いつになっても万拙おしょうのすがたはかわらなかった。宿の人はしだいに青ざめてきた。もし、ほんものの坊さまをころしたとあっては、どんなおとがめがあるかわからない。
　一日たち、二日すぎた。万拙おしょうのからだは、すこしもかわらない。三日、四日、五日とすぎて、もうこれでは、あすお役人にとどけるしかあるまいと、かくごをきめた七日めの朝、万拙おしょうのなきがらは、年おいたタヌキになっていた。
　そこで建長寺にといあわせてみると、そのタヌキは建長寺のうら山にすんでいたタヌキということがわかった。
　ほんものの万拙おしょうはなみだながらに、
「おお、そうであったか。そのタヌキはわしにようなついておっての、おおかたわしが病んだのを知ると、わしにかわって諸国をまわって、寄進をあつめてくれたのじゃろう。かわいそうなことを

してしもうた。」

と、寺の境内に小さなほこらをつくって、タヌキの霊を供養した。

すると、そのほこらに夜ごと燈明がひとりでにともったという。

建長寺の山門は、宝暦五年（一七五五）に再建されたが、この話から、山門を〈タヌキの山門〉というようになった。

相模の寺にはタヌキのなきがらがかわったという石の首がのこっているし、また、津久井の山のほうでは、ごはんをたべちらかすと、

「建長寺さまみてえだぞ。」

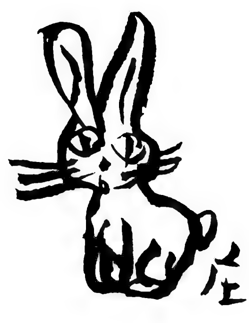
といって、この話をかたりつたえている。

〈再話・阿貴良一〉

十二支のはじまり

〈むかし話〉

むかしというても、はるかの大むかし。
ある年のくれちかくだった。
神さまが動物たちに、
「元旦に新年のあいさつにくるがよい。そうすれば、その中の一ばんから十二ばんまでを、じゅんじゅんに、その動物の年にしてやるぞ。」
というおふれをだしたんだと。
おふれをうけた動物たちは、よろこんで、
「よし、来年こそおれの年にしてやるぞ。」
と、元旦を、いまかいまかとまっていた。
ところがネコは、神さまのところへいく日をわすれてしまった。



「正月というても、三が日はある。それに、小正月（陰暦で正月十四日から十六日まで）もあるぞ。」

ネコは首をかしげてかんがえていたが、なかのいいネズミのところへききにいった。

ネズミは、けろんとした顔でいうた。

「そら、正月の二日にきまっておる。元旦にはひとさまのうちをたずねるなと、むかしっからいうでねえか。」

「そうかい、そうかい。二日の朝だな。こんどはわすれんぞ。」

ネコは礼をいってかえっていった。

そうこうしているうちに、大みそかになった。ネズミがやねうらからのぞくと、牛は、くらいところでぶつぶついいながら、旅じたくをしておった。

「おら、いちばんのろまだで、今夜でかけることにするだ。」

しめたとばかりネズミは、牛のせなかにとびのった。

そうとは知らぬ牛は、夜道のしもをふみふみ、神さまのごてんへとむかっていった。ながいことかかってごてんにつくと、だれもいない。

「ほう。一ばんはこのわしにきまったようなもんじゃ。」

と、よだれをたらして門がひらくのを、いまかいまかとまっていた。

やがて里のほうで一ばんどりが時をつげると、門はしずかにひらいた。牛がにんまりして門をくぐろうとしたとき、せなかにいたネズミがとびおりて、ちょろちょろっと門をくぐり、

「あけましておめでとうございます。ネズミが新年のごあいさつにあがりました。」

と、やった。

そんなわけで、牛は二ばんになり、トラは千里の道をひゅーっとかけてきたが、三ばんになった。つづいてウサギ、タツ、ヘビ、馬、ヒツジ、サル、トリ、犬、イノシシがはいってきたところで、門はしめられた。

これが、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二支になったんだと。

ネコはネズミにおそわったとおり、二日の朝はやく門をたたいたが、神さまに、

「やれやれ、おまえは、いままでぐうすかとねとったんじゃないか。ねぼけておらんで、顔でもあらってこい。よんだのは、きのうじゃぞ。」

そういわれて、すごすごとかえっていった。

それからネコは、まい日顔をあらうようになったが、うその日をおしえたネズミがにくらしくて、ネズミを見つけさえすると、おっかけるようになったんだと。

ネコはこうして、十二支のなかまからはずされたが、やっぱり十二支にはいれなかったイタチ



は、まい日、まい日、神さまのところへいき、
「おらんところへは、そのおふれというのがきませんでした。これじゃ不公平です。もういちど、やりなおしてください。」
と、たのんでいた。
神さまもこれにはこまってしもうて、こっそりいうた。
「イタチどんや。ひとつそうだんじゃが、一年に十二日だけおまえの日をつくってやるがどうじゃな。それでがまんしてくれんか。月のさいしょの日を、おまえの日にしてやるぞ。」
「神さま、一年にたったの十二日じゃつまんねえが、ないよりいいから、それでがまんします。それじゃあ、その日を、イタチの日にしてください。」

神さまは、イタチの日といわれてかんがえた。

「そうしてやりたいが、それがまたさわぎのもとになる。どうじゃ、イタチの上につをつけて、つイタチにしてやる。それがおまえさんの日じゃ。でも、これはないしょだぞ。」

イタチは、

「つイタチ、つイタチ。」

と、なんべんもいうていたが、

「神さま、つが気になりますが、なかったとおもえば、これでがまんしますわ。」

と、いった。

それから月のはじめの日を〈ついたち〉というようになり、この日だけはイタチの日なんだと。

この十二支の話が職人衆のあいだにひろまると、時間や日をまちがえてきて、しごとのなかまにはいれない人を、

「あの人はネコ年だわ。」

というようになったんだとさ。

〈再話・萩坂昇〉

かっぱどっくり

〈伝説・茅ケ崎市〉



むかし、西久保（いまの茅ケ崎市西久保）に、五郎兵衛という男がすんでいた。この男、朝はあけの明星のころから、夜はよいの明星のころまでのらにいるという、村でもひょうばんのはたらきものであった。

その五郎兵衛が、いつものように間門川の川原で馬のあおをあらってやっていたときだ。それまで首すじをのばして、気もちよさそうにしていたあおが、きゅうにはげしくいないないたかとおもうと、ずるずると川の中にひきこまれはじめた。

五郎兵衛はおどろいた。まっさおになって、あおの首すじにしがみついた。なにしろ、あおは五郎兵衛のたったひとつの宝ものだ。それを川にひきこまれたのではたまらない。

五郎兵衛は、全身の力をこめると、ええいとばかりあおの首をひっぱった。けれどもあおはうごかん。うごかんばかりか、じりじりと川のふかみにひきこまれていく。

「あお、がんばるんじゃ。」
五郎兵衛がはげますと、ヒヒーン、あおもひっしだ。
えいや、えいやと五郎兵衛は力をこめてひっぱりつづけた。
と、とつぜんふわっと力がぬけて、あおはすぽーんと川からとびだしてきた。と、どうだ。そのしっぽにしがみついて、かっぱが一ぴきとびだしてきたではないか。
(はあ、こいつだな。ちかごろ間門川にいて、わるさをするかっぱちゅうのは。)
そうおもうがはやいか、五郎兵衛は、ちかくにあったまるたんぼうで、めくらめっぽうかっぱをうちすえた。そして、ぐったりとなったかっぱをつかまえると、土手っぷちの大木に身うごきもできないほどぐるぐるとしばりつけた。
「ふん、すこしはこたえたか。まあ、二、三日そうして、いままでのわるさをかんがえてみるだな。」
五郎兵衛は、ぎょろりとかっぱをにらみつけて、そういった。そして、まだぶるぶるとふるえているあおをつれて、家にもどった。
その夜、五郎兵衛は、なんだかきゅうにつかれがでてきたようだったので、いつもよりはやいめにとこについた。ところが、ねむれない。夜がふけるにしたがって、目はますますさえてくる。風の音にまじってギョーギョーときこえてくるかっぱのなき声が耳につき、気になってしかたがな



かったのだ。
五郎兵衛はたまらなくなって、とうとうかっぱをしばりつけた場所へでかけていった。
「ほら、もうわるさするでねえぞ。さあ、けえれ。」
五郎兵衛は、つっけんどんにそういうと、ぐるぐるまきにしてあったなわをほどいてやった。そして、なんどもおじぎをするかっぱに目もくれずに家にかえった。
それから何時かした夜のあけがた、ひたひたと戸口をたたくものがあるので、五郎兵衛は目をさました。
（はて、だれだんべえ。）
ふしんにおもいながらも、五郎兵衛は戸をあけてみた。と、戸口に、手紙をゆわえたびんぼうどっくり（つつ形で首がほそながいとっくり）が一本と、草の葉にとおしたスズキが二ひき、ちょこんとおかれてあった。五郎兵衛はまず、手紙をよんでみた。

間門川のかっぱにてそろ。さきほどのお礼にて、心ばかりのとっくりとスズキ二ひき。とっくり、くめどもつきぬとっくりなれど、しりたたかば、酒たちまちにしてやまん。

かっぱ

五郎兵衛さま

手紙をよみおえて、五郎兵衛は、おもわずほっぺたをつねってみた。

「いてっ、ゆめじゃねえ。ふっふ、〈くめどもつきぬとっくり〉とは、こりゃ、なんともうれしいとっくりでねえか。」

五郎兵衛はさっそくとっくりをかたむけてみた。すると、どうだ。うっすら黄みがかった、とろりとあまい酒が、でるわ、でるわ。のんでも、のんでも、とっくりの口にあふれてきた。

その日から、五郎兵衛は酒びたりになってしまった。そしてひと月もたったころには、五郎兵衛の田は草ぼうぼうとなってしまった。

しかし、五郎兵衛は気がつかん。目がさめれば酒をのむ。とうとうしまいには、あれほどかわいがっていたあおも、えさをろくろく食わせてもらえないので、はり金のようにやせてしまった。

(いけねえ、いけねえ。酒がすっかりおらの身をもちくずさせてしまった。酒はもうきょうをかぎりで、きっぱりとやめるだ。)

さすがの五郎兵衛も、なんどかそうおもった。しかし、つぎの朝になってみると、五郎兵衛の手は、ついついとっくりのほうにのびるのだった。

そんなある夜のこと。間門川の土手っぷちのほうから、

ポン　ポンツク

ツク　ツク

ポン　ポン　ポンツク

と、つづみをうついい音がきこえてきた。五郎兵衛はしばらく、家の中でその音をきいていた。が、そのうちじっとしているのがたまらなくなって、とっくりをもったまま、音のするほうへでかけていった。

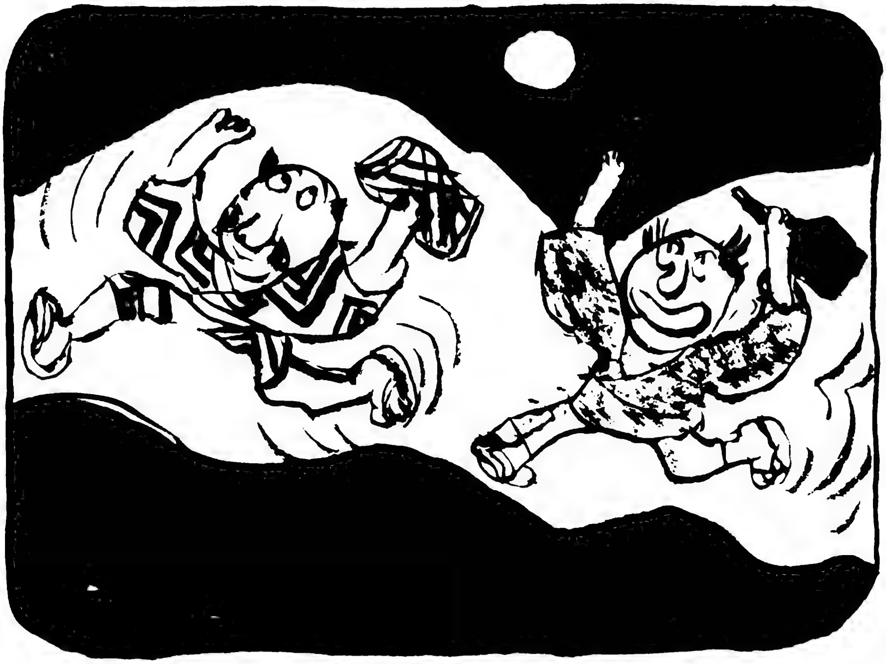
土手っぷちでは、かたにつづみをかかえた男が、月あかりの下でひょっとこおどりをおどっていた。

「はて、だれだんべえ。どこかで見たようなおひとだが……。」

五郎兵衛は、酒づけになった頭で、だれだんべ、だれだんべとくりかえしてみたが、おもいだせない。そのうち、五郎兵衛の足は、つづみの音にあわせて、かってにひょこひょこおどりはじめた。と、手も、いつのまにやらふりあがり、つづみにあわせてうごきはじめていた。そして五郎兵衛が、はっと気がついたとき、かたにしたとっくりのしりを、

ポン

と、うっておった。



(ああ、もう酒がでなくなる……。)
五郎兵衛はいっしゅんそうおもった。
けれど、とっくりの音はなにやらもっとつよい力で五郎兵衛の心をひきつける。
五郎兵衛は、それをたしかめるように、もうひとつ、とっくりのしりを、

ポン

と、うった。たしかだ、たしかになにかある。
五郎兵衛はあとはもう、くるったようにとっくりのしりをうちはじめた。

ポン　ポンツク

ツク　ツク

ポン　ポン　ポンツク

そして、五郎兵衛はとうとう朝までとっくりのしりをうちつづけた。五郎兵衛のからだから

は、もうすっかり酒のにおいがきえていた。ふしぎな男のすがたは、いつのまにか、どこかへきえておった。

それからというもの、五郎兵衛はきっぱりと酒をやめ、またもとのようにはたらきだしたということだ。

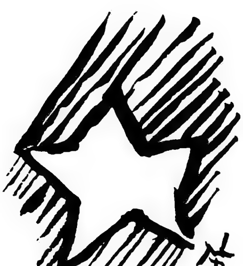
五郎兵衛の家では、かっぱからもらったとっくりを、かっぱどっくりと名づけて、末代までの家の宝とした。

そのとっくりは、いまも茅ケ崎市西久保円蔵の小室さんの家につたわっている。

〈再話・植田儀武〉

ネコのおどり場

〈伝説・横浜市〉



むかし、戸塚（いまの横浜市戸塚区）に水本屋という、しょうゆ屋があった。

大ぜいの男たちがまい日、しょうゆをしこんだり、たるにつめたりして、いそがしくはたらいていた。そして夜になると、その日よごした手ぬぐいを、きれいにあらってのきにほす。それでその日のしごとは、おしまいになったと。

ところが、いつのころからか、その手ぬぐいが、朝ごとに一本ずつたらんようになった。はじめは（風にとばされたのだろう。）とおもってたが、あまりつづけてなくなるので、おかみさんが気にした。

「いったい、どうしたっていうんだろうね。きみがわるいよ。」

「どろぼうではあんめえ。手ぬぐい一本だけとっていくどろぼうなんて、きいたことがねえよ。」

主人はわらっていたが、おかみさんがあまりいうので、とうとう、だれのいたずらか見きわめて

やろうとかんがえた。そこである夜、いちばんはしっこにほした手ぬぐいにひもをつけ、そのひものはしをじぶんのうでにまきつけてねた。

夜中にひもをひっぱられてとびおきた主人は、かいネコの三毛が手ぬぐいをくわえてにげていくのを見た。ほどけたひもをひきずったまま、三毛はまるくなってすがたをけした。

「なんだ、三毛のいたずらだったのか。」

主人はわらって、そのままうっちゃっておいた。

それからしばらくして、主人は横浜へ用たしにでかけ、すっかりくらくなってから岡津をとおってもどってきた。小だかい丘づたいにあるいていくと、さわやかな夜風がほおにあたる。あかるい月の光の中で、道ばたの大木にからみついたフジの花ぶさがゆれている。

すこしお酒がはいっていたせいもあって、主人はよい気もちであるいていた。

やがてまた、道は、のぼりになった。ここをのぼりきってしまえば、あとは左へくだるだけで水本屋だ。ここまでくればもうかえったようなもんだ、と、主人はぶらりぶらり、のんびりとあるいていった。

そのとき、どこからかにぎやかな歌声らしいものが、かすかにきこえてくるのに気づいた。

「まつりのころでもないのになあ。」

首をかしげてあるいていると、歌声はますます大きくなってきた。目をこらすと、坂の上のほうが、そこだけ、ひときわぽうっとあかるくて、なにやらざわめいている。

ほう、いってえなんだろうと、主人はいきをきらしてのぼってみて、あっとたまげた。輪になっておどっているのは、どこからこんなにあつまったかとおもうほどたくさんのネコどもだった。

ネコはみな、手ぬぐいでほおかむりして、しっぽでひょうしをとりながらおどっていた。耳がなれてくると、ネコのうたっている歌のもんくもきこえてきた。

　ネコじゃ　ネコじゃ
　わしゃ　ネコじゃ

そこまで声をあわせてうごくと、おどりの輪ははたととまり、一ぴきのネコが両手を空にあげて、

五郎兵衛のタマじゃ　ミャーウ

するとあとのネコたちも、いっせいに手を空にあげて、ミャーウとわめいた。

そしてまた、

　ネコじゃ　ネコじゃ
　わしゃ　ネコじゃ

と、おどりだし、輪(わ)がとまるとべつの一ぴきが両手(りょうて)をあげて、

　かすけの　とらじゃ　ミャーウ

ほかのネコどもも声(こえ)をそろえてミャーウ。こんなくりかえしで、おどりはさいげんもなくつづいていった。

　そこへ一ぴきの三毛(みけ)ネコが、これも手ぬぐいをかぶったすがたでかけこんできた。

「どうした、今夜(こんや)はえらくおそいじゃないか。」

「おまえがこないじゃ、おどりもつまんねえよう。」

「ごめんよう。家(いえ)のもんがあついおじやを食(く)わせるもんで、したをやけどしちまって。」

　むすめざかりらしい、きれいな三毛(みけ)ネコは、あまえた声(こえ)でそういって、おどりのなかまにはいった。すると、ぱあっと花がさいたように、なんだかおどりの輪(わ)がにぎやかになった。

　かくれて見ていた水本屋(みずもとや)の主人(しゅじん)は、びっくりして目をこすった。

（あとからきた三毛(みけ)ネコに、どうも見おぼえがある。それに、かぶっている手ぬぐいは、ありゃあ、うちの手ぬぐいじゃねえかなあ。それに、からだつきがよ、白い毛(け)なみの中にある茶(ちゃ)と黒(くろ)とてんてんといい、しっぽのさきがちょっぴりよこにまがったようすといい、うちの三毛(みけ)にそっくりだぜ。）

　そうおもって見ていると、その三毛(みけ)ネコが音頭(おんど)をとるばんがきた。

ネコじゃ　ネコじゃ
わしゃ　ネコじゃ
水本屋の三毛じゃ　ミャーウ
ほそい、すんだ声が主人の耳にはいった。
「水本屋っていったぞ。やっぱし、おらがのネコだった。」



主人はなんだかきゅうにおそろしくなり、ぶるっとふるえた。

うちの三毛は、ばけネコだったのか……。よいもさめてかくれていた場所からそっとぬけだすと、坂をころげるようにして家にもどった。

そしてかえりつくなり、

「今夜、おらがじゃ、ネコになにをくれた。」

と、血相をかえてたずねた。

「いやあ、今夜はおじやをくれてやったよう。」

夜なべをしていた家のもんは、のんびりとへんじをした。

主人は見てきたばかりの、ネコのおどりの話をした。家のもんは、主人の話をなかなかしんじようとはしなかった。

「今夜はずっと、そこでねてたよう。」

そういっていろりばたを見たが、まるくなってねむっているはずの三毛のすがたはなかった。

水本屋では、三毛がどんなようすをしてもどってくるかと、夜っぴてまっていたが、それきり、三毛はもどらなかった。

そうなると、主人はきゅうに三毛がかわいくなった。

「三毛もむすめざかりだ。たのしみたかっただね。」
主人は、そこらじゅうのネコが、おらがの三毛をまっていたぞと、じまんしてまわった。
この話がひろまって、だれいうとなくそこを〈おどり場〉とよぶようになった。
ネコの供養のために碑も立ててある。
戸塚から長後へいくバスにのると、おどり場っていうバス停があるのがそれだよ。

〈再話・安宅るい子〉



お夏と孫三郎

〈伝説・逗子市〉

むかし、逗子新宿（いまの逗子市新宿）の披露山に、お夏というめギツネがいたそうな。

いっぽう、披露山のちかくの久木には、孫三郎というおすギツネがいたそうな。

お夏と孫三郎はめおとになることになって、お夏は久木へよめいりした。

その夜はたいへんなにぎやかさで、大ぜいのキツネが、ちょうちんをともし、笛やたいこをならし、行列をつくって、花よめのお夏をおくっていった。披露山の峠から、七まがりの細道を、ゆっくりくだっていったそうな。

ところで、このお夏と孫三郎のめおとギツネ、どちらもそろって、とんといたずらものだった。

おまけにさかなが大の好物。なんとか人間をたぶらかして、さかなをせしめようとしあんした。

「そうだ、おまえさん、披露山をさかな売りがとおるんだよ。それを、これこれ、こんなふうにしてさ。」



はしっこいお夏が、うまい方法をかんがえついた。小坪という漁師町から、とりたてのカツオやマグロをになって、まい日、さかな売りが披露山をのぼってくる。そのカツオやマグロをいただこうというわけだ。

「いままではひとりだったろ。でもさ……。」

「うーむ、そうか。一ぴきじゃあむずかしいが、二ひきいればしめたもんだな。それじゃあ、さっそくやるべえよ。」

お夏と孫三郎は、さっそく、披露山の坂道のやぶかげに、こっそりかくれた。

やってきたさかな売りがつよそうな男だと、孫三郎がとーんと男のすがたにばけて、

「おいおい、すもうをとろう。」

と、もちかける。

見たこともないへんなやつが、とびだすんだから、さかな売りはおったまげる。

「おりゃあ、いそがしいんだ。おめえさんのあいてなんぞしていられねえ。」

と、いきかけても、孫三郎が、

「おや、そうかい。おめえさんがすもうにつよいっていってきいたもんで、ちょっくらお手あわせしてもらいてえとおもったんだがよ。話ほどでもねえみてえだな。」

などといってにやーっとすると、さあ、いせいのいいさかな売りのこと、

「なにいってやんでえ。」

と、さかなのかごをわきにおき、むずとくむ。えいや、えいやともみあっているうちに、お夏がかごからさかなをとってしつれいする。とまあ、こういうしかけよ。

やってくるさかな売りが、やさしげないい男だと、こんどはお夏のばんだ。とーんときれいな女にばけて、声をかける。

「ちょいとおねがいがあるんですよ。足になにかささっちまって、いたくってあるけないんですよ。見てくださいな。」

さかな売りはぼうっとして、道ばたにかごをおき、なあに、とげなんぞささっちゃいねえぜ、なに、ひとりでさびしい、いっしょにいってくれだって、などといいながらすわりこみ、はっと気がついたときには、孫三郎にさかなをぬすまれているということになる。

「いいもんだねえ。二ひきでいっしょにやれば、まい日いきのいいさかなにありつけるよ。」

お夏と孫三郎は大よろこびだった。

ところが、こまったのは小坪のさかな売りたちだ。

「おれも、とられた。」



「わしも、やられた。」
と、話はひろまって、披露山のお夏ギツネと孫三郎ギツネのしわざは、すっかりひょうばんになってしまった。

さて、小坪のさかな屋に、気のつよい男がいた。その男、まだお夏や孫三郎にだまされたことがなかった。

「だいたい、おまえたちは、だらしがねえ。しっかりしていねえから、キツネなんぞにたぶらかされるんだ。」

気のつよい男は、大いばりしておった。

ある日のことだ。その男は大きなカツオをたくさんかごにいれ、いつものように披露山の坂道を、せっせこせっせこ、のぼっていった。

と、どうだ。道っぱたに一頭の馬がいる。

毛なみのいい、みごとな馬だ。たづなも、くらもついていないはだか馬。どうやら、はぐれ馬らしい。

「こりゃ、しめた。」

男はごくりとつばをのみこんだ。さいわい人どおりのない山の中。こっそりひいてかえって売れば、大もうけだ。

「おうい、だれかいねえかやあ。」

男はためしによんでみた。あたりはしんとしずかで、林をすぎる風の音がするばかり。

しめしめと、男はかごをおろして、ひょいと馬にちかよった。馬は用心したのか、ぽこっとうしろへさがる。男が手をのばして、またひょいとちかよると、馬はぽこっとさがる。

　ひょい　ぽこ　ひょい　ぽこ

あせってひょいひょいちかよると、馬もぽこぽこつづけてさがる。

　ひょいひょい　ぽこぽこ

　ひょい　ぽこ　ひょい　ぽこ

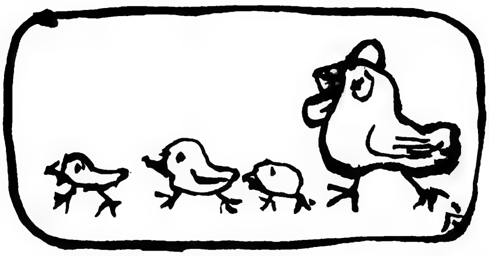
いつまでおっても手がとどかぬ。

「ちえっ、こんなことをしておっては、日がくれてしまうわい。」

男はとうとう馬をあきらめて、もとの場所にもどってきた。
さて、かごをになおうとして中を見ると、なんと、かごはからっぽだ。山ほどあったカツオは、かげもかたちもありゃしない。
「やられた。あの馬はキツネだったのか。」
ええい、ふだんいばっておったのに、ぬすみごころをおこしたばっかりに、キツネにまんまとだまされて、さかなをごっそりとられたとは、村へかえって話もできぬ。
男はじだんだふんでくやしがったと。
さて、そののち、お夏と孫三郎はどうしたかって。逗子の披露山はむかしながらに相模の海をしずかに見おろしているが、ちかごろとんと、キツネの話はきかなくなった。

〈再話・牧ひでを〉

村や町にのこった かなしい話



不知火の松
〈伝説・川崎市〉

むかし、川崎の大師河原に父とむすめのふたりぐらしの漁師がおった。

おとうはまい日小舟で沖へ漁にいったが、漁師のしごとはのらのしごととちがって、しおのながれしだいで、きまった時刻にかえってくるのがむずかしい。さかながおもうようにとれないときは、もうひとあみ、もうひとあみと、ついおそくなってしまう。そんなときむすめは、たいまつをかざして浜の松の木の下に立ち、

「おとうー、おとうー。」

と、たいまつをふりながらかえりをまつのがならわしだった。
雨の夜も、風のつよくふく夜も、むすめはおとうがかえるまで、松の下をうごこうともしなかった。おとうはくらい沖あいから、浜にひかるたいまつをめあてに舟をこいでくる。どんなにつかれても、その火を見ればおとうには力がわいてきた。
舟が浜につくとむすめは、かけよってきて、あとかたづけもした。おとうが、
「こんなさむい晩にゃ、むかえにこんでもいいよ。かぜでもひいたら、どうするだ。」
といっても、むすめはわらっていった。
「おら、かぜなんぞひかねえよ。おとうこそ、さむかったべ。うちへはやくかえって、やすんでくんな。あったかいしるも、つくっておいたでよ。」
父とむすめは、まずしくてもしあわせな日をおくっていた。
ところがある日のこと。それは年の瀬もせまった冬の日だったが、その日はみょうにくもったいやな空だった。
「風むきがかわったぞ。ふぶきにならねばいいがな。きょうは、やすむかな。……いや、正月もちかいで、おまえにきものの一まい、かんざしのひとつも買ってやりてえし。」
おとうはくらい空をあおいだ。



「おら、きものもいらん、かんざしもいらん。きょうは、海へいくのはやめておくれよ。」

むすめはひきとめたが、おとうはふりきって漁へでていった。が、あんじたとおり、夕方からふぶきとなった。

むすめはたいまつをふりながら、浜の松のところへはしった。

「おとうー、おとうー。」

むすめは声をかぎりにさけびつづけたが、その声も、ふきまくる風と、ほえるような波にかきけされていく。

沖ではおとうがろにかじりつき、ひっしになって舟を浜へちかづけようとしていた。しかし舟は、浜へむかうどころか、沖へ沖へとおしながされるばかりだった。



見あげるような高波に、舟がふわっともちあげられたときだった。おとうの目に、むすめが浜でふっているたいまつの火が、ちらっとうつった。

「いまかえるぞう。」

おとうは浜にむかってさけんだ。が、そのとき、舟は荒波をかぶって、あっというまにひっくりかえり、おとうは海になげだされた。

おとうはうきつしずみつしながら、ひっしにたすけをもとめたが、あたりには、一そうの舟もない。力つきたおとうは、そのまま高波にのまれてしまった。

「おとうー、おとうようー。」

そうとは知らぬむすめは、ただあんじながら、せめてこの火が見えればばと、くるったよう

にたいまつをふりつづけていた。
しかし、夜になってもおとうはかえってこない。雪ははげしくふりつのり、身も心もこおるようなさむさとつかれに、むすめはどっと雪の中にたおれてしまった。おきる力もなく、たおれたままのむすめの上に、雪はふりつんでいった。
おそろしかった一夜があけて、いつもとかわりない朝をむかえた。太陽がぼんやりとてり、波はドビーン、ドビーンとよせてはかえしていた。
浜の松の下では、こんもりもりあがった雪の上で、海鳥の親子がたわむれていたが、その下には漁師のむすめが、たいまつを手にしていきたえていた。そして浜には、つめたいおとうのなきがらが、うちあげられていた。
漁にでようとして浜にきた漁師たちが、かわりはてた父子を見つけた。村じゅう、なかぬものはなかった。そして、父とむすめのなきがらを、松の下にねんごろにほうむった。
それからというもの漁師たちは、まい朝、まい晩、ここにおまいりして、きょう一日のぶじやら、大漁やらをいのるようになった。
ある晩、漁師たちが沖で漁をしていると、浜の松の上から、ふしぎな光がぽっ、ぽっとかがやいた。
「おい、浜に火が見えるぞ。たしか、あそこは松のあるところだ。あの火は、なくなった父子が、

わしらをよんでいるのかもしれん。」
「そうかもしれん。今夜は、ここらできりあげるべ。」
漁師たちはあわててあみをあげ、舟を浜にむけた。すると、そのあとをおうように、高波がおそってきた。
ぶじに浜についた漁師たちは、むねをなでおろし、
「やっぱりそうだったな。父子がわしらをよんで、たすけてくれたただ。」
それからというもの、しけや大風がおきるまえには、かならずこの松に火がともって、漁師たちに知らせてくれた。
漁師たちは、いままで名もなかったこの松に〈不知火の松〉と名をつけて、海のまもり神とした。
不知火の松は、すこしむかしまで大師河原の浜にそびえていたが、ここにも工場ができることになり、松はきりたおされ、浜はうめたてられてしまった。
あたらしくできたうめたて地の町名は、このかなしい伝説からか夜光町とつけられた。
夜光町は石油コンビナートとなり、大工場のあかりが不夜城のようにかがやいているが、海で漁をする人はいなくなってしまった。

〈再話・萩坂昇〉

おこんどぶ

〈伝説・横浜市〉

横浜の日吉は大むかしには海の底で、あのあたりでは綱島だけがぽっかりうかんでいたんだと。
海がだんだんにしりぞいて、陸になったが、じめじめした沼地でアシがおいしげっていた徳川時代のおわりには、こんなところにも田んぼがひらかれた。
田んぼといっても、ひどいどぶっ田でね。なにしろ三メートルもの青竹をさしてみても、しずんでしまうという底なしだ。
田うえするにも丸太を井げた（井の字のかたち）にくんでしずめ、それにのってしたもんだ。
そんなどぶっ田のひとつに〈おこんどぶ〉とよばれる田があった。その田にだけ、どうしてこんな名まえがついたかというと、それにはかわいそうな話があるんだよ。
駒林村におこんというむすめがいた。おこんがまだ十にもならないころ、はやりかぜのため、つ



づけてとうさんとかあさんが死んでしまった。あとにのこされたのは八さい年上の兄の初太郎とおこんだけ。それからは、おさない兄といもうとのふたりぐらしがはじまった。

初太郎は家のまわりの畑に、とうさんがしたように種をまき、ダイコンやナッパをそだてた。おこんは小さな手で水をはこび、かれ枝をひろってごはんをたいた。そして、秋になるととれたやさいを、すこしでもよい値に買ってもらおうと、江戸の浜町とか神田市場まではこんでいった。

市場の朝ははやい。それにまにあうには駒林村を夜のうちにでなければならない。

初太郎がひいている、やさいをつんだ荷車のうしろには、ねむい目をこすりこすり、小さなおこんがつかまっていた。おこんはいっときでも兄のそばをはなれなかったし、初太郎も家におこんひとりおいていくのは気がかりだったからだ。それでものぼり坂になると、おこんは、はっと目をあけて、力いっぱい車のあとおしをした。

こうして夜じゅうあるきとおして、夜あけに市場にはいる。おもっていたよりやさいがたかく売れた日は、初太郎は赤や黄色のあめをおこんに買ってやった。

かえり道には、おこんは車の上にいる。お日さまはやさしく、夜じゅうあるいたおこんの小さな足をあたためてくれる。初太郎がガラガラひきつづける荷車の上で、おこんはあんしんしきってねむった。

こんなふうに、兄といもうとは、たすけあってくらしながら大きくなった。そしておこんも、兄にまけないほどのはたらきものになった。あちこちの田うえの手つだいや、田の草とりにやとわれて、一人まえも二人まえもはたらいた。

その年も田うえの季節になった。はたらきものの初太郎とおこんはひっぱりだこだ。

あたらしく初太郎が買ってくれた、かすりのきものをきて、赤いたすきをかけると、おこんはびっくりするほどむすめらしく見えた。なにかと村の若者たちのうわさにのぼる、きれいなむすめになったおこんを、初太郎は、うれしいような、しんぱいなような目で見まもった。

おこんは大ぜいの植え手たちと朝はやくから田んぼにはいった。底のふかい田なので、井げたにくんでしずめた丸太にのり、なえをいれたたらいは、なわでこしにゆわえつけてうかしている。

歌い手が、

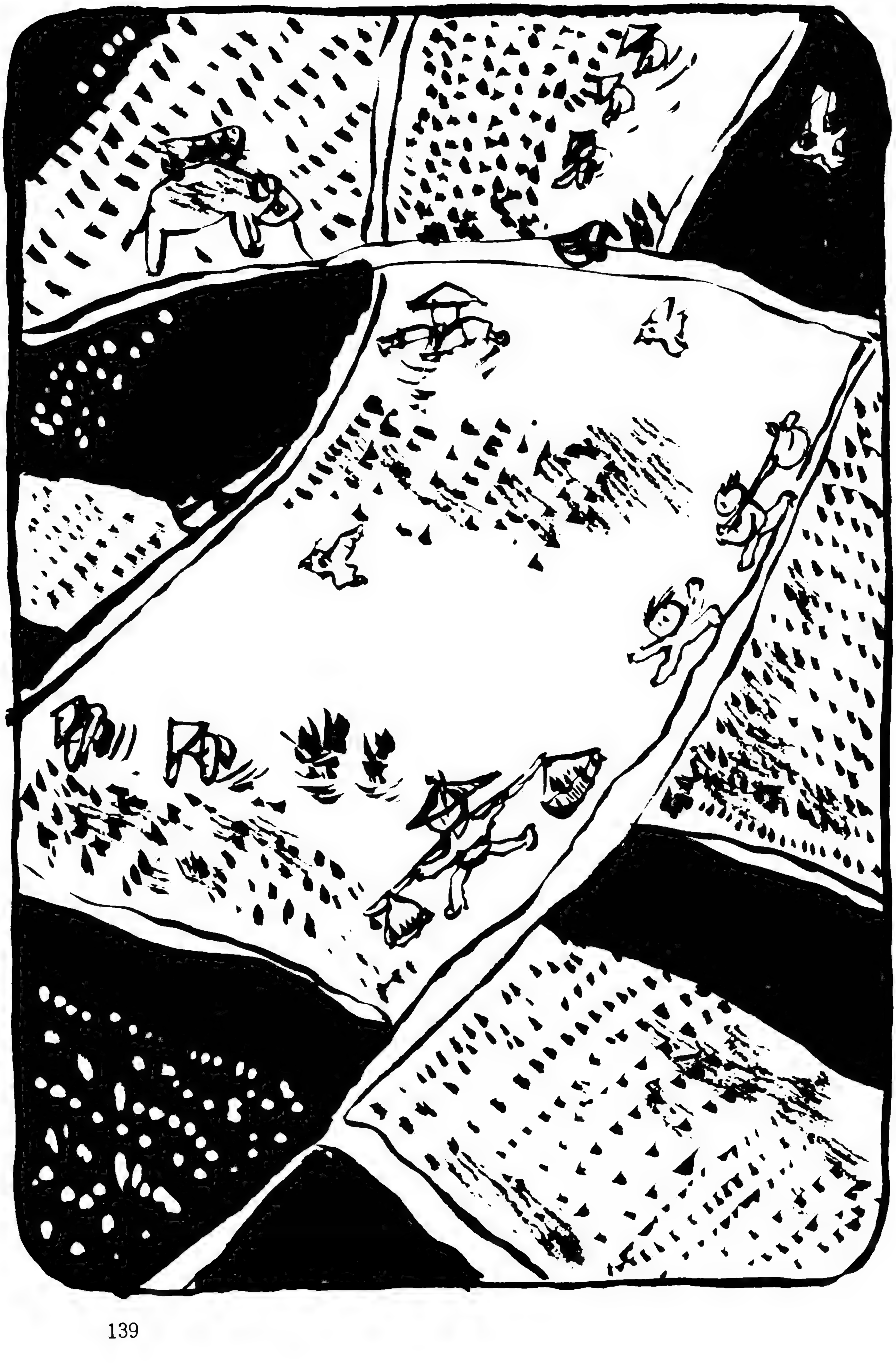
　めでためでたの若松さまよ

と、よい声をはりあげると、

　枝もさかえて葉もしげる

と、大ぜいの植え手たちが声をあわせて田うえがはじまった。

たらいからなえを六かぶとってうえては、ひと足さがって、また六かぶうえる。そろえてうえな



ければならないし、足は底の丸太をさぐらなければならん。中ごしのしごとだから、それはつかれた。でも若いおこんはげんきいっぱい。そんなおこんを見ては、まわりのものもげんきがでた。

歌い手はみなの気もちをひきたてようと、おもしろい歌をつぎからつぎへとうたった。

　富士のすそ野で昼寝をすれば

　　タカにけられて目がさめた

歌にあわせていっせいに手がうごき、田いちめんにならんだ青いなえが風にゆれる。

昼をすぎ夕ぐれちかくなると、つかれてきて、こんなつらいめをさせる田のもち主をうらみたくもなる。そこですかさず歌い手は、

　きょうの太郎次（田のもち主の名）のかまどを見たら

　千石だきの　かまがある

その声をきけば、田からあがったあとの、ふるまい（ごちそう）をおもいやって、ひとしきり手のうごきがはやくなろうというもんだ。

にぎやかな田うえ歌の中で、おこんはせっせとなえをうえ、いつのまにか、だれよりもはやくうえすすんで、みんなよりずっとうしろのほうにきていた。

そこで、ひといきいれようとしてこしをのばしたときである。ツバメがついと、おこんの目のま

えをとびぬけた。ふいのことで、おこんはおもわず、身をひいてよけた。そのとたん、うっかり底の丸太をふみはずしてしまった。

底なしのどぶっ田だからたまらない。おこんのからだはみるみるひきこまれていく。おこんは両手を空にあげて、もがくばかり。おこんのひめいは、にぎやかな田うえ歌にかきけされ、だれの耳にもはいらない。

おなじ田にいた初太郎が、なにげなくうしろを見たときはもう、おこんはむねまでしずんでいた。あわててかけつけようとしたが、どぶっ田のことなので、おもうようにならなかったんだね。みながたちさわぐ中で、おこんの手のさきだけが、しばらく、どぶっ田の上にひらひらしていたが、すぐにそれもきえた。

村の人たちは、おこんをしのんで、その田を〈おこんどぶ〉とよぶようになった。

日吉本町に駒林小学校があるだろう。おこんどぶは、あのちかくだった。いまは家がたってしまって、どこだかわからないが。

〈再話・安宅るい子〉

せなかの赤いカニ〈伝説・川崎市〉

むかし、川崎宿のはずれ久根崎村（いまの川崎市旭町）に医王寺という大きな寺があった。山門をはいると右に池があり、池のそばに鐘楼があった。

　ゴーン　ゴーン　ゴーン

朝に夕につくかねの音は、多摩川の川面をながれ、とおく池上（いまの東京都大田区）の山にまでひびいたというくらいりっぱなかねだった。

寺の小僧さんがかねをつきにくると、いつも、池の中のフナやコイやカニが、いっせいに池の底から水のおもてに顔をだしてきた。

「おまえたち、このかねの音がすきなのかよ。」

小僧さんはそういって、池のコイやらカニをからかった。みんなで顔をつきだすありさまは、まるでおまいりしているようにあいらしく見えた。ほんとうに、コイやカニたちはかねの音をありが



たいとおもっていたのだ。

池や小川にすむさかなやカニにとっていちばんこわいのは、シラサギだった。シラサギは、ときおりなん十ぱとむれをなしてとんできて、あのこわい目でさかなやカニを見つけると、するどいくちばしでつきころしてたべてしまう。

そのシラサギも、この医王寺だけにはおそってこなかった。かねのひびきをおそれていたからだ。シラサギは、医王寺をはるか下に見てとんでいった。

池のさかなやカニは、これもお寺のかねのおかげとよろこびながら、寺まいりにくる人がなげてくれるものを、なかよくわけあってくらしていた。

ところが、ある夜のことだった。

川崎宿のはずれからでた火の手が、つよい風にあおられ大火となり、宿場をやきはらい、医王寺におそいかかってきた。宿場は大さわぎとなった。荷物をかつぎ、さきをあらそって、みんな多摩川のほうへのがれていった。

夜空はまっかになり、めらめらといきおいづいた火は、山門をやきはらうと本堂をやき、さらに鐘楼におそいかかってきた。

寺のおしょうさんも小僧さんも、じぶんがにげだすのがせいいっぱいで、とても火事にたちむか



うことはできなかった。

そのとき、池のはたからぞくぞくとカニがあらわれたかとおもうと、鐘楼をのぼっていった。やねにびっしりとしがみついたカニたちは、いっせいにあわをふきだし、ふりかかる火の粉をけしはじめた。

しかし、あれくるうほのおは、けされてもけされても、ゴオーッと鐘楼をおそってくる。そのた

びにカニは全身をふりしぼるようにあわをふきつづけたが、力つきてつぎつぎとやけおちていった。

すると、もう、かわりのカニが、池の中から無数にはいあがり、鐘楼をうずめつくしていく。うずまくほのおとカニの、それはすさまじいたたかいだった。

おそろしい夜があけて、いつもとかわらぬしずかな朝になった。いちめんのやけ野原の中に鐘楼だけがのこっていた。

おしょうさんは鐘楼の下に、なん百、なん千というカニが、まっかにやけただれて死んでいるのを見つけた。

「そうだったか。おまえたちが、いのちがけでまもってくれたんじゃな。」

おしょうさんは、カニたちを供養して池のはたに〈カニ塚〉をつくった。

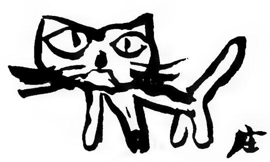
それからこの池のカニは、せなかにほのおをかぶったように赤くなったという。

この鐘楼も昭和二十年四月十五日の大空襲でやけおちてしまったが、いまは、あたらしいかねがつくられ、池を見おろしながら、こんなむかし話をかたっている。

〈再話・萩坂昇〉

膳部のネコ塚

〈伝説・横浜市〉



むかしむかし、武蔵の国（いまの東京都西部）と相模の国のさかいに〈膳部谷〉（いまの横浜市旭区）とよばれるふかい谷があった。昼まもうっそうとくらく、めったに旅人のすがたなど見かけることもなかった。

ある秋の日のこと、この谷を、六部すがたのおばばが、ネコをだき、とぼとぼとおりかかった。

「あれまあ、めずらしい。旅の六部さん（ほどこしをうけながら諸国をめぐる巡礼）だよ。」

「だがよう、なんとへんてこりんな六部だんべ。ネコなんぞかかえて、いまじぶん、どこへいくつもりか……。」

村人たちが見まもる中を、おばばは立ちどまるでもなく、ふりかえるでもなく、ただ、とぼとぼとあるいていく。そのすがたは、いかにもたよりなげであった。

このさきに知りあいでもあんのかなあ。けんどあのあるきかたじゃあ、あかるいうちにつぎの村

へはいきつけねえ。ひとこと声をかけて、とめてやるべえか、そうしねえと、どうなっちまうだか……と、みんながおもいながら、みんながだまっていた。かかわりあいになるのがめんどうだと、口にはださないがみんながそうおもい、とうとう村人たちはそのまんま、六部のおばばを見おくってしまった。

そしてそれっきり、村人たちはおばばのことをわすれてしまった。

ところがいく日かたって、山しごとにでかけた木こりが、

「たいへんだ、たいへんだ。六部のおばばが、このさきで、ゆきだおれになっているぞ。」

と、さけびながら、いきせききってもどってきた。

「いつもどおり、のこさげてこのさきの山道をのぼっていくとよう。」

と、木こりははなしだした。

道ばたの草むらから、ふいにネコがとびだした。山ネコでもあらわれたかと、いっしゅんきもをひやしたが、ネコは毛なみのきれいなかいネコで、しきりにニャゴニャゴなきたてては、木こりの足にまつわりつく。はらいのけても、はらいのけても、ネコはしつこく足にからだをすりよせてくる。

(はて、どこかで見たようなネコだが。)

と、木こりがかんがえていると、ネコは二、三歩あるいてはふりかえる。またすこしあるいては、ふりかえる。さそわれるように、木こりがあとをついていくと、ネコは大きい松の木の下まで、木こりをあんないしていった。

「おらあ、びっくりした。松の根かたに、六部のおばばがたおれているんだもん。」

といって、木こりはみんなを見まわした。

木こりをせんとうに、村人たちがかけつけたとき、ネコは、つめたくなったおばばのえりもとにうずくまってうごかなかった。

「ひゃあ、ネコも死んでるぞ。」

と、ひとりがいった。

「主人のさいごをおれたちに知らせ、ほうむってもらえるもんとあんしんして、主人のあとをおったんだろうよ。」

「なんと主人思いの、かんしんなネコだんべ。」

女たちはためいきをついた。

せめて身よりでもわかれば、知らせてやるべえ、ということになって、村人たちは、おばばの小さい荷物をひらいてみたが、身もとのわかるようなものは、なにひとつ見つからなかった。



あのとき、声をかけてひきとめていれば……。そういう思いが、村人の心をよぎった。なんで見て見ぬふりをしちまっただ……。かかわりあいになるのをおそれてよ……。

「塚をこさえてやるべえ。」

と、ひとりがこつこつ土をほりかえしはじめた。

「んだ。塚をこさえてわびるべえ。」

くわをにぎっていたものはあなをほり、かまをにぎっていたものはむらがりさくススキ、野ギクをあつめてきた。女たちは手おけに水をはこんできた。人びとは、松の根かたに、おばばとネコをほうむった。村人たちの心根をそのままに、やさしくまるい塚であった。人びとはこの塚を〈膳部のネコ塚〉とよび、とおりすがりに花をそなえた。やがて、いつからともなく、かいネコが死ぬと、この塚のまわりにうめて供養するのがならわしのようになり、いちじは供養のための卒塔婆が林のように立ちならんだという。

〈再話・武鹿悦子〉

乙女峠

〈伝説・足柄下郡〉



むかし、箱根の仙石原に、年おいた夫婦と、とめというむすめの三人ぐらしの百姓がおった。
とめは、心もやさしく村でもひょうばんの親孝行もんだった。で、年ごろになるとあちこちから

「おら家のよめに。」と、よめの話がかかってきた。

父と、母は、

「ひとりむすめだで、よめにはやれん。むこならむかえてもいいがな。」

と、そのはれの日をゆめ見てはたらいていた。

むこにしてくれという話もふるようにあったが、とめはなかなか首をたてにふらなかった。

ところが、ある冬のこと、父は、しごとのむりがあったのか病のとこについてしまった。

母ととめは、つきっきりで看病したが、父の病は、おもくなるばかりだった。とめは、山をこえて小田原まで一日がかりで、くすりを買いにいくこともあった。でも、父は、日ましにやせおとろ

えていった。
　ある日、父は、とめをまくらもとによんで、
「とめや、すまんのう。おらは、もうながいことねえ。あとにのこったおっかあのことをたのんだぞ。」
と、かれ木のようになった手をさしだした。
「おとう、なんてことをいうだ。まえからみると、ずうーっとよくなったで。じきになおるよ。そんなこといわんと、やすんで。」
　父は、とめのやさしいことばになぐさめられて、じっと目をつぶった。
　とめは、父のそばにすわっていたが、ねむったのをたしかめると、こっそりと家をでていった。
　つぎの夜も、そのつぎの夜もでていった。そして、夜もふけたころ、そっとかえってきた。
　このことが、いつのまにか村人の目にとまった。
「なんでえ、親孝行も見かけじゃったのう。とめのやつ、おとうの病気がおもいっていうのに、このところすきな男でもできたらしいな。」
「まい晩、あいにいくようだな。とんでもねえむすめだったのう。」
　うわさがひろまると、ふるようにあったよめの話も、むこの話も、しおがひくようにきえていっ



た。そして、うわさは、母から父の耳にはいった。

「ま、まさか、とめにかぎってそんなばかなことがあるか。それは、うそだ。とめは、おらの子だ。」

父は、ふるえていった。だが、もしかしたらというしんぱいもあった。

その夜、父は、ねむったふりをしてとめをうかがっていた。とめは、そうっと戸をあけてでていった。

「やっぱりそうじゃ。とめのやつ。」

と、父は、おきあがると、母がとめるのもふりきって、そとへでていった。

雪がのんのん、のんのんとふり、箱根の山やまをつつんでいった。はるかの山はだに、とめの

すがたがぽちっと見える。
父は、よろけてはたおれ、いかりにもえて立ちあがり、また、たおれては、けわしい峠をのぼっていった。峠をこすとふぶきになった。それでも父は、とめのあとをおっていった。
雪の中の足あとをたどっていくと、御殿場の入り口の竹の下の地蔵堂のまえできえていた。
「ま、まさか、こんなところに。」
父は、おもいきって堂もりにきいた。
「ああ、あのむすめさんですか。あのかたはりっぱなかたですわ。もう二十一日ものあいだ、雨、風、ふぶきをいとわずおまいりにこられて、父の病をなおしてくだされと願かけしておられました。ちょうど今夜が満願の日、むすめさんは、ねっしんにおがんでおりましたが、いっときまえにおかえりになりましたよ。ふぶきをよけたんでしょう。右手の道をいかれましたが。して、おめえさんは、どこのかたですか。」
父は、ふぶきの中へとびだしていった。
「とめー、とめー、とめー。」
父は、さけびながら峠をのぼっていった。
まがりくねった坂のところへくると、雪の中に黒いものがうずくまっている。おもわずかけよる

と、それはつかれきってたおれているとめだった。父(とと)は、だきしめた。
「とめ、とめ、ゆるしてくれ。とめ、とめ。」
と、さけんだが、とめは、もうつめたくなっていた。

それから、村の人は、とめがなくなったこの峠(とうげ)を、乙女峠(おとめとうげ)というようになった。
いまも頂上(ちょうじょう)にいくとちゅうの道(みち)のわきに、石がつまれたところがある。ここが、とめがなくなったところという。

〈再話(さいわ)・萩坂昇(はぎさかのぼる)〉



影取池〈伝説・藤沢市〉

むかし、藤沢宿のはずれの大鋸(いまの藤沢市大鋸)に、森というだいじん(金もち)がおったそうな。
ひろいやしきの中には、白かべの土蔵がいくむねもならび、朝日、夕日にはえておった。
その土蔵のひとつに、いつのまにか一ぴきのヘビがすみついた。
森家の大だんなは、
「ヘビというても水神さまのおつかいじゃ。そまつにするでないぞ。」
と、おはんと名づけて、酒や米をあたえて、だいじにだいじにそだてておった。
おはんは、おかげでなに不自由なくくらし、十年もたつと大蛇となり、一日に米一斗(約三十七・五キロ)、酒五升をたいらげても、まだはらがへっているほどになった。
だが、さすがのだいじんだった森家のくらしもだんだんにかたむいていった。そして、大だんながなくなり若だんなの代になると、みるみるうちにおちぶれていった。



それでも若だんな夫婦は、親のいいつけをまもって、くろうしてあちこちから酒や米をさがしてきては、おはんにたべさせていた。ときには夜もふけてから、わずかの酒をはこんでやるときもあった。

「おはん、はらがすいただろ。おそくなってすまんな。さ、えんりょなくたべてくれ。」

おはんは、そのすがたを見るにしのびなかった。

（わたしがいるばかりに若だんなは、すきな酒もやめてわたしにのませてくださる。わたしさえいなければ。）

ある晩、おはんは、蔵をぬけだすとあてもなく戸塚宿のほうへむかっていったが、とちゅうで池を見つけるとそこに身をしずめた。

おはんは、こうして池にすみついたものの、いままでとちがってじぶんでたべものをさがしてこなければならない。

夜をまっては、あたりの野や山をさまよい、えさをさがしまわったが、いつもむなしく池にもどってくるのだった。

こんな日がいく日もいく日もつづいた。

あのうつくしかったうろこも光をうしない、そしてやせていった。

おはんは、もうえさをさがしにでかける気力さえなくなり、じっと池の底にうずくまっていた。

そんなある日、池のおもてにとおりかかった村人のかげがうつった。
おはんは、おもわずその人かげをのんだ。すると、ふしぎなことに米か酒をのみこんだような、おなかがいっぱいのかんじになるのだった。
「おお、ありがたい。これで生きながらえることができる。」
それからのおはんは、池にうつった人かげをのんでくらしていた。
ところが村では、
「あの池のふちをとおるでねえぞ。池の主の大蛇にかげをのまれちまうぞ。そうするとよ、なん日もたたねえうちに死んじまうとよ。」
といううわさがひろまった。
村人は、この池をおそれてだれもちかよろうとしなかった。
そうしたとき、たまたまこの原宿の宿に江戸の鉄砲うちの名人というのがとまった。それをきいた村の衆は、宿にきて名人に大蛇たいじをたのんだ。
「うーむ、鉄砲でうつことはやさしい。だが池はひろい。めくらめっぽうにうっても、たまがむだになるばかりじゃ。」
そういわれると村の衆はことばがなかった。名人は、いっぷくつけると、



「どうじゃ、だれか池のふちをあるいてみんか。すれば、そのかげひとのみと、主がでてくる。そこをねらって一ぱつうてばそれまでじゃが。」
と、いったが、村の衆は、まっさおになって、
「と、とんでもねえ。そんなことしたら、いのちがなくなるだ。」
と、ふるえだした。
　これをきいていた旅のあきんどが、
「じつはな、昨夜、藤沢の宿できいたのじゃが、その主は、おはんという名の大蛇かもしれんぞ。」
といって、村人のまえにでてきた。
「おはんだと？　いったいそりゃどんなことだい。」
「なんでも大鋸の森というだいじんが、だいじにかっていた大蛇らしいぞ。それがきゅうにいなくなって、さがしていたということじゃ。ためしにおはんとよんでみなされ。」
　鉄砲うちは、ひざをうった。
「そりゃいいことをきいたぞ。池からはなれたところで名をよぶんじゃ。それならかげも池にうつらんでねえか。」
　話は、そうきまった。

つぎの日、鉄砲うちは、池からはなれたところで鉄砲をかまえ、村人のひとりが、池のはたの木のかげから、

「おはん、おはん。」

と、おそるおそるよんだ。おはんは、その声をきいた。

「だれじゃろ。若だんなの声とはちがっているが、わたしの名を知っているのは、森家のものにちがいない。きっと、くらしもよくなってむかえにきてくれたのだろう。いまいきます。まっていてください。」

おはんは、なつかしい森の若だんなをおもいだし、いそいで水面にあがってきた。

ズダーン

たまは、おはんにめいちゅうし、池は、血でまっかにそまった。

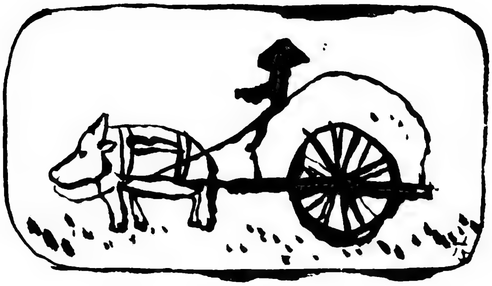
そのとき、池のはたの木ぎは、いっせいに葉をおとし、おはんをかくすようにつつんだという。

それから村の衆は、この池を影取の池とよび、鉄砲をうったところを鉄砲宿、村の名も影取村にしたという。

いまは、その村名もきえ、〈影取〉というバスの停留所の名となってのこっている。

〈再話・萩坂昇〉

村(むら)や町(まち)にのこった おどけ話(ばなし)



とんでもくい

〈伝説(でんせつ)・横浜市(よこはまし)〉

むかし、鶴見(つるみ)の潮田(うしおだ)(いまの横浜市(よこはまし)鶴見区(つるみく)潮田町(うしおだちょう))あたりの海岸(かいがん)が、まだいちめんのアシの原(はら)っぱだったころのことだ。

あるとき、長吉(ちょうきち)と幸助(こうすけ)というふたりづれが、海(うみ)っぱたをとおりかかった。

「幸助(こうすけ)、どうだ。ここらでめしにすべえか。」

「そうだな、ちょうど昼(ひる)じぶんだし、そうすべえか。」

そこでふたりは、岸(きし)べにならんですわり、日ざしにきらきらひかる沖(おき)をながめながら、のん

びりべんとうを食いはじめた。
「おい、見ろよ。ありゃあ、なんだべえ。」
幸助がとつぜん、すっとんきょうな声をはりあげた。
「なんだい、なんかあっただか。」
長吉も、いそいで幸助がゆびさすほうへ目をむけた。
岸からちょっとはなれたアシの中に、黒いものがいくつか頭をだしている。
「ほら、あそこの水ぎわに、黒いくいみたいなもんが見えるでねえか。おかしなところにくいをうったもんだ。」
「あれか。ありゃあ、くいではねえよ。カラスだべさ。」
「いやいや、あれがカラスなもんか。びくっともしねえぞ。ありゃあ、くいだっちゅうに。」
ふたりは、くいだ、カラスだ、くいだ、カラスだと、食いつきそうにいいあったあげく、長吉が、
「そんじゃあ、見てろよ。」
と、たいせつなにぎりめしを、おもいっきりなげつけた。
するとその黒いものは、いっせいにバタバタとまいあがり、とんでいってしまった。
「そうれ、やっぱりカラスじゃねえか。」

長吉がかちほこっていうと、
「いんや、とんでもくいだ。」
と、それでも幸吉はがんばったと。
それから潮田のへんでは、ごうじょうな人のことを〈とんでもくい〉というようになったそうな。

〈再話・菊池正〉



江戸もどり

〈伝説・横須賀市〉



むかし、三浦は観音崎（いまの横須賀市観音崎）の海っぱたに、浜三というひとりもんがおった。

浜三はいい年をしているくせに、女房ももらわねえでよ、だぼらふいちゃあ、ぶらぶらしておった。

ついこのあいだの、大しけのときもよ、村じゅうで船を浜へあげたり、あみをしまったり、てんてこまいしたっていうのに、浜三のやつあ、つぎの日の夕方、風もおさまってから、どこからともなく、ふらふらとかえってきたもんだ。浜のもんが、

「おめえ、このいそがしいのに、どこへいっていただ。」

と、きくと、浜三、けろっとした顔でぬかした。

「ああ、ゆんべ、城ケ島が波にさらわれそうだって知らせをうけたで、おらいそがしかったが、おさえにいってただ。」

こんなふうにだぼらばかりふいているので、浜の衆は、南から風がふくと、

「浜三のやつあ、また、油壺あたりでだぼらふいているだな。だから見てみろ、このひでえ風だ。」
と、いったし、北から風がふくと、
「やろう、ここんとこ見かけんが、房州（いまの千葉県南部）の木更津あたりで、でっかいのをぼがーんとふいているんでねえか。」
などと、はなしとった。

あるときのことだ。その浜三がめずらしく、ねじりはちまきで、浜でドベラの木をきってあつめだした。

ドベラというのは、このあたりにやたらにはえている木だ。漢字でかくと、海桐花ってなるのだが、みつをだすのか、花もさかないのにチョウやアブがむらがるおかしな木だ。

浜三は、そいつをせっせときりたおしては、山とつんだドベラの木を、こんどは一尺（約三十三センチ）ほどのながさにきりそろえて、手ごろにたばねはじめた。

あのなまけもんの浜三が、にわかにはたらきだしたもんで、浜の漁師はたまげた。
「浜三、われあ、なにはじめるだ。」
「ああ、ドベラでまきをつくって、船につんで江戸へ売りにいくだあ。したら、おらはドベラだいじんってもんだわ。」



浜三はあせだくになってドベラをたばねていた。

漁師たちは、

「なにがドベラだいじんだ。それよか、だぼらだいじんにならねばいいがなあ。」

と、いっていたが、浜三は、知ってか知らずか、むちゅうになってはたらいておった。そのうちに、

「浜三のやつは、生まれかわったのかもしれんぞ。ことによったらドベラだいじんになるかもしれん。なら、そのわけまえにあずかるか。」

と、中には手つだうものもでてきた。

いよいよ船出の日がきた。浜三は、船にドベラのまきをうずたかくつむと、帆をいっぱいふくらませて、観音崎の浜をあとに、江戸にむ

かっていった。浜では漁師たちが大ぜい見おくったということだ。

　それからいく日かたったが、浜三からはなんのおとさたもなかった。

「どうしたかなあ、だいじんになって、はあ、江戸であそんでいるんじゃねえか。」

など、うわさをしていると、浜三が、船にドベラをそっくりつんだままで、ぷくりとかえってきた。

　浜にうちあげられたごみあくたみたいに、しょぼしょぼになってかえってきた。

「浜三、どうしただあ。ドベラだいじんになれんかったかあ。」

　浜のもんがからかうと、浜三、うつむいて、

「ドベラは、チョウやアブがすくから、値よく売れるべとおもったが、火にくべたら、くさくて、くさくて、江戸のやつらは鼻をつまんでおったわ。とてもまきにゃならんわい。」

と、なさけない声でいうた。漁師たちは、

「そうかあ、そりゃまずかったなあ。そいじゃ、ドベラも江戸もどり、だぼらも江戸もどり。どっちもこっちも江戸もどりじゃ。」

と、いったと。それから、ここらでは、ドベラの木を〈江戸もどり〉というようになったんだと。

　ドベラにはこりたが、浜三はあいかわらずだぼらをふいて、けっこう長生きしたということじゃ。

〈再話・茶木滋〉

村いちばんの孝行むすこ

〈むかし話〉



京浜急行の三浦海岸駅よりもっとさきに金田というところがある。
むかしの話だ。
あるとき、庄屋さまから金田村いったいに、めずらしいおふれがだされた。
「つね日ごろ、親をうやまい、親をたいせつにしているもの。親のいいつけをよくまもり、すこしもそれにそむかないもの。そういう孝行者は、なん月なん日、庄屋の家にあつまるべし。」
ざっとこんなおふれだった。
さあ、村の中はたいへんなさわぎになった。
「これは、きっとごほうびをくださるにちがいない。」
そうおもったものだから、孝行者はもちろんのこと、日ごろ親をなかせているようなものまで

が、いろいろちえをしぼって、ごほうびにありつこうとしたもんだ。

いよいよ、庄屋さまの家にあつまる日がきた。すると、まあ、くるわ、くるわ。どこやらのドラむすこや、ドラむすめまでが、きれいにきかざって、この日ばかりはしおらしい顔をして、いそいそとあつまってきた。

「へえ、おらは、おやじさまを下においたことがねえだよ。ふとんを三まいかさねて、いつもその上におのせして――。」

「なにいってるんだよ。おめえんとこにゃ、ふとんなんて一まいもねえじゃん。」

「おらは、畑へいくにも、浜へいくにも、おっかさまをおぶっていくだあよ。ほれ、うそじゃねえしょうこに、こうして、おびをもってるだ。」

「へえ、そうかねえ。そのおびは、おめえのおっかさまがいつも孫くくりつけてるおびでねえか。まがったせなかに孫のっけてよ。いつもかわいそうにとおもって見てただよ。」

「なにを。」

と、けんかもはじまるさわぎで、そのうちには、おい、なかまわれすんなよととめるものもでて、みんなわいわいと、かってなことをいっていた。

そのときカラン、パタ、カラン、パタと、門さきにみょうな男がやってきた。みんながおどろい



て見ると、その男、かた足にげた、かた足にぞうりをはいているのだ。カラン、パタ、カラン、パタというはずだ。みんなはいちどにわらいだしてしまった。

「なんと、だらしのねえ。庄屋さまの家にくるのに、あのかっこうは、まあ。」

でも、その男はみんなの中にわりこむと、なにをいわれても、すました顔をしておった。

そのうち、代官さまがおでましになると、庄屋さまは、ひとりひとりに親孝行のようすをきいていった。そして、さいごが、例のみょうな男のばんだった。

庄屋さまは、親孝行のようすをきくまえに、まずこの男をしかりつけた。

「ひとの家にくるときは、だれでもすこしは身

ぎれいにしてくるもんだ。それなのにおまえは、かたほうずつちがったものをはいてくるなんて、とんでもない無礼なやつじゃ。どんなに孝行者でも、ゆるすわけにはいかん。」

すると、その男はかしこまってこたえたもんだ。

「へえ、おらのおっかさまが、でがけにこういいましただ。『雨があがったばかりだで、道がわるい。げたをはいていけや。』すると、おやじさまが『なんの。庄屋さまのところにいくのに、げたでいくなんぞ、無礼せんばんだ。どうでもぞうりでいけ。』おら、よわっただよ。おっかさまたてれば、おやじさまたたず、おやじさまたてれば、おっかさまの心が無になる。そこでかんがえて、どちらのいいつけにもそむかぬように、こうしてかた足ずつはいて、でかけてきましただ。」

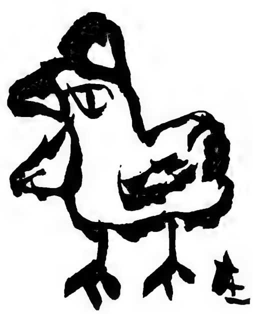
これをきいて、庄屋さまも、代官さまも、「うーん。」とうなってしまった。

これで、この日のほうびは、そっくりこの男のものになったそうだ。

〈再話・木村セツ子〉

須賀のとんきょ話 〈伝説・平塚市〉

相模川の河口にある須賀（いまの平塚市須賀）は、漁業の町としてさかえてきた。むかしは〈大山千げん、須賀千げん、馬入は三百六十けん〉といわれるくらいこのあたりきっての町だった。
須賀がこのようにさかえたかげには、さかな屋さんの力があったという。
須賀のさかな屋は、あちこちの村へ行商にいき、すっとんきょな話をしては、客の人気をあつめ、さかなを売っていた。



あるとき、須賀のさかな屋が厚木（いまの厚木市）の岡津へあきないにやってきた。
「さあ、さあ、買った、買った。相模湾のとりたてのさかなだよ。」
と、そこらをふれてあるくと、かみさんどもがたかってきた。
「さかな屋さんや、そんなこといってもほんとにあたらしいのかね。目玉がうるんでいるでねえ

かね。」

「とんでもねえ、いきがいいなんてものでねえ。おら、かついでくるとき、盤台ん中でぴんぴんはねやがって、おもくってしょうがねえかった。となり村のかみさんなんかは台所でほうちょうできろうとしたら、さかながにげたって大さわぎさ。ようく見たら、ながしの中でおよいでいたっていうだ。」

そのまあいせいのいいことといったらねえ。かみさんたちは、その話につられてついついさかなを買ったとさ。

ねじりはちまきでホイホイ、ホイホイと盤台をになって林という村にくると、ここでも「ほら、須賀のさかな屋さんがきたぞ。」と、かみさんどもがあつまってきた。

「さかな屋さんや、くるとちゅうに、なにかかわったことがなかったかね。」

「ああ、あった、あった。村はずれの橋んとこでな、白い犬とブチの犬がけんかやっててよ。白い犬がかってブチがまけただ。」

かみさんたちは、須賀のさかな屋さんのことだから、なにかおちがあるのだろうと、

「そいつは、ブチがかったのとちがうか。」

と、ひっかけてきた。

「そうくるとおもったわ。そいつは、こうなんだ。橋のところへくるとな、むこうからじさまが白

い粉をいれたふくろをかかえてきたが、石につまずいてひっくりかえり、粉を道にぶちまけたで、そこらじゅうまっ白になっちまっただ。ブチまけて白かったってことになるじゃねえか。」
と、やらかした。かみさんたちは、さすが、須賀のさかな屋さんだわと、大わらいしてさかなを買ったとよ。
大山のふもとの村へいくと、村の中はからっぽ。いくらよびあるいてもだれもあつまってこない。
（こら、どうしただべ。）
と、村の子どもにきくと、大山が山火事で、みんなけしにいっちまったという。
さかな屋さん、「とんだ山火事だわ。」と、かえってくると、相模川の土手っぷちでひとりのじさまがぽつねんとしておった。
「じさま、おめえさんはなにをかんがえているだね。そんなひまがあったら、トウガラシでもほしたらどうだ。」
じさま、むっとしてさかな屋をにらんだ。
「なに？　トウガラシをほせって？　こんな夕方ちかくにかよ。おめえさん、頭がどうかしているんじゃねえのか。」
須賀のさかな屋さん、頭をコツンとたたいて、

「おらの頭は、おめえさんよりは、しっかりしているわい。いいか、いま、大山が山火事でぼうぼうもえているだぞ。むかしっからトウガラシは遠火であぶれっていうじゃねえか。さ、そんなところにすわっていねえでトウガラシでもほした、ほした。」

さかな屋さんは、そういうとホイホイと、いってしまったとさ。

さかなを売りつくし、足どりもかるく須賀へかえってくると、きゅうに空がまっくらになり、かみなりがゴロゴロなって、どしゃぶりになった。

さかな屋さん、「ちょっとごめんよ。」と、かみ床（とこや）にとびこんで雨やどりをした。

いなびかりがぴかっとして、かみなりが火いふいて、ちかくにおっこちた。その音にたまげて、かみ床にいた若い衆はちぢみあがった。

やっと、かみなりがおとなしくなると、かみ床のおやじをかこんでかみなり問答がはじまった。

「ありゃ、天の上で、おにがたいこをたたいているだぞ。」

「いや、そうじゃねえ。天の神と地の神がけんかやっているだ。」

「いやいや、ちがう。天に雲がいっぱいたまってはれつしただ。」

と、なかなか問答はつきない。みんなのたねがつきたとき、かみ床のおやじがいうた。

「おめえたちのこたえは、まるっきりちがう。かみなりはな、水火（水と火）がぶつかって火をふき、


かみどこ

雨をふらすだ。」

　すると、若いひとりが、

「どうりで、スイカの産地、須賀にゃ、しょっちゅうかみなりがおちるのか。これでわかった。」

と、いうた。そのとき、須賀のさかな屋さん、

「してみると、カボチャは、おとなしいもんだのう。これからは、スイカづくりをやめてカボチャにするだな。」

と、やらかすと、雨あがりのそとへとびだしていったとさ。

　須賀港の川っぷちには、須賀のさかな屋さんをほめたたえた記念碑が立っている。また、茅ケ崎市の中島には、

　須賀のとんきょは　鳥よりはやい
　鳥が一町とびゃ　三町とぶよ

という子守歌がのこっている。

〈再話・萩坂昇〉

力もちの善正坊〈伝説・愛甲郡〉

江戸時代も天保のころというから、百四十年あまりもむかしのことになろうか。

いまの愛甲郡半原の善正寺という寺に、善正坊というとてつもない力もちの坊さんがおった。

この坊さん、すもうをとらせればだれよりもつよく、また、アズキがゆがぐらぐら煮えている五寸なべを、そばのしぼうのさきにかけてもちあげて、けろっとしていたというから、たいへんな力もちだった。

そんなふうだから、正月のもちつきは村じゅうのぶんを一手にひきうけて、本堂のまえでまとめてつくことになった。

さあ、その日になると、村じゅうがまつりのようなきぶんになる。もち米をせいろでむすやら、つきあがったもちをまるめるやら、にぎやかなさわぎじゃ。つき手は善正坊ただひとりじゃが、あれよあれよといっているうちに、村じゅうのもちを、ぺったらぺったらつきあげてしまった。



「善正坊さんのおかげで、わしら、よい年がむかえられる。」
村のものたちは大よろこびだ。すっかりいいきぶんになった善正坊は、よせばいいのにちゃめっけをだした。
「なあに、これしきのこと。」
というなり、からっぽになったうすを、ひょいと人さしゆびにのせて、くるくるとまわし、空たかくぶーんとなげあげた。
「ひゃあ。」
村の人たちは、わっと、クモの子をちらすようににげだした。子どもはつきとばされる、年よりはころぶ、あわてふためいてにげまどったが、さて、いっこうに、なげあげたうすがおちてこない。きえてしまったのかときょとんとしていると、本堂のうら庭から善正坊が、うすを人さしゆびにのせて、すました顔ででてきた。本堂のやねをとびこえたうすを、さきまわりした善正坊が、ひょいっと人さしゆびでうけとめたというわけじゃ。
村のものたちはほっとしたが、だんだんはらがたってきた。
「なんと、かるはずみなことをする坊さんじゃ。けが人でもでたら、どうするんじゃい。」
「いくら力がつようても、坊さんらしいおちつきがのうてはなあ。」

というわけで、善正坊のひょうばんがすこしばかりわるくなった。
それからしばらくしたある日のこと。善正坊は、うらの竹やぶを畑にしようとおもいたった。竹というもんは、そりゃあ根っこがしっかりしとるもんじゃ。なみたいていのことではほりおこせん。しかし、力もちの善正坊のこと、モウソウ竹を、まるで草でもぬくように、ずぼりずぼりとひきぬいておると、夕ぐれちかく、とつぜん、
「おい、おい。」
と、うしろから声をかけるものがいた。
善正坊がふりむくと、おそろしい顔のてんぐが、じっとにらんでおる。
「おまえが善正坊か。怪力だといううわさが、おれさまの耳にはいってな。どんなやつか顔をおがんでやろうと、丹沢の山からやってきたんじゃ。だが、おまえの力も、たいしたことはないようじゃな。竹を一本ぬくのに、だいぶくろうをしておるようじゃ。」
善正坊は、
（てんぐめ、わざとわしをばかにしているな。）
とおもって、知らん顔をして、そのまましごとをつづけていた。だが、たしかに、てんぐのいうとおり、だいぶつかれてきた。朝からくらべると、竹一本ぬくのに、ずいぶん時間がかかるように

なっていた。

「なあ、おれさまが、らくにぬく方法をおしえてやろうか。あのな、一ど竹を土の中におしこんでから、こんどはおもいきりひっぱってみるんじゃ。」

てんぐはとくいになっておしえてくれたが、善正坊がきこえないふりをしていると、

「こら、きこえておるのか。さあ、やってみろ。」

そこで善正坊は、てんぐのいうとおり、おしてはひっぱり、おしてはひっぱりして、竹をぬいてみた。すると、いや、かるがるぬけること、ぬけること、見わたすかぎりの竹やぶが、あっというまに畑にかわってしまった。

そのはやさには、やりかたをおしえたてんぐも、おもわずうなってしまった。

「……ふーむ、おまえの力はうわさどおりじゃ。」

そういうなりてんぐは、できたての畑を一反（約十アール）ひょいっと手にとりあげて、おもてうらをひっくりかえして、ようくすかしながめた。

そこへ、村の捨吉がとおりあわせて、目をむいた。朝あったはずの竹やぶがなくなって、ひろびろとした畑にかわっている。おまけにその畑を、てんぐがもちあげて見とるではないか。善正坊はと見れば、そばでわらっている。



捨吉はこしをぬかさんばかりにたまげて、ぬき足さし足、そのうしろをとおりぬけると、すっとんで家にかえった。話をきいた村のものが、まさかそんなことがと、おそるおそる寺へようすをさぐりにきてみると、てんぐと善正坊は、炉をかこんできげんよく酒をのんでいる。こりゃ、ほんとのことだと、かさなりあってのぞいていると、なにをおもったのか、てんぐが炉の中にさしてあった鉄の火ばしを、くるくるっとこよりのようにねじってしまった。

「あっ、すまん。すっかり気もちがようなって、つい力がはいってしもうたわい。」

てんぐがあわてて火ばしをもとにもどそうとすると、善正坊がいそいでとめた。

「まあまあ、ええわい。こんどはわしのばんじゃ。」

善正坊はこよりのようにねじれた火ばしをうけとると、くるくるとまたもとのように、よりもどしてしまった。それを見たてんぐは手をうって、

「わっはっはは。おれさまとおまえとは、よく気があうのう。これからも気がむいたら、あそびにやってくるとしよう。」

そういうと、空をとんでかえっていった。

それからというもの、村のものたちは、てんぐとなかよくなった善正坊を、きみわるがってちかづかんようになってしまった。

たしかに善正坊の力はますますつよくなり、人間わざとはおもわれないほどになっていった。ある年、大雨がふりつづき、中津川の水がいまにもあふれそうになったときなどは、戸板一まいで川をせきとめたほどだ。その戸板は一間（約一・八メートル）もあるほどでかいものだが、その戸板で中津川の水をおしかえし、村を洪水からすくったという。

満身の力をこめて洪水をおしかえす善正坊のすがたは、それこそ、おにかてんぐにも見えるすさまじさであった。そのおかげで、村は水びたしにならずにすんだ。

「もうしわけねえ。いままでわる口ばかりいってよ。」

村のものは手をあわせて、善正坊をおがんだという。

年月がながれ、善正坊もしだいに年をとった。

善正坊には長年のゆめがあった。それは善正寺の本寺である清雲寺の山門をたてたいということだった。

半原は、いつも春になると、丹沢の雪どけ水が、中津川にながれこむ。そのころには、まえの年にきりだした材木をはこびだす木流しがはじまる。

ある年のこと。江戸城の改修のために、大がかりな木流しがおこなわれた。丹沢の山からながさ



れるケヤキの大木は、清雲寺から見おろせる馬渡川原に、一どひきあげられて、いっぱいになっていた。

善正坊は山門をつくるのに、どうしてもそのケヤキがほしかった。

川原におりた善正坊は、川役人にたのんでみた。

「このケヤキを、ひとせおいでけっこうじゃから、いただけまいか。寺の山門をつくりたいのじゃ。」

「ひとせおいでよいのなら、もっていくがよい。」

役人は、ひとせおいならたいしたことはあるまいと、あっさりとゆるしてくれた。善正坊は、さっそく、はしごほどもあるやせうま（せ

おいばしご）をもってきて、ケヤキの大木をむすびつけた。
川役人は目をむいた。ひとせおいというから、せいぜい枝の二、三本かとおもったのに、これでは大木一本ではないか。
「こりゃ。いうておくが、ひとせおいだけじゃぞ。それいじょうやるとは、いうておらんぞ。」
「はい。ひとせおいでございます。」
善正坊はやせうまをひきおこし、背にあてて、ぐっと力をいれたかとおもうと、みごと大木をせおってしまった。
「ありがとうぞんじます。」
ていねいにあいさつし、のっしのっしと寺へむかってあるきだした。川役人は、あまりの怪力に声もでず、ぽかんとして見おくったという。
いまものこる清雲寺の山門は、このときの木でつくられたので、〈ひとせおいの門〉とよばれるようになった。

〈再話・伊東迪子〉

キリシタンのまじゅつ

〈現代民話・横浜市〉



メリケン（アメリカ）の黒船（一八五三年日本を開国させるためにアメリカのペリーがひきいてきた船）には、あのころの日本人はみんな、どぎもをぬかれたようだ。なにしろ、いままで見たこともねえようなでっけえ船が、じょうきたらいう力で、海のうらがわからやってきたちゅうんだから、みんなたまげてしまったらしい。

メリケン人は、からだが大きく、ちょんまげ頭の日本人を見おろして、ちんぷんかんぷん、ぺらぺらぺらとしゃべりまくった。赤い顔で、鼻がてんぐさまのようにたかい。ばけものみてえだと、人びとはおそろしがった。

「いや、たしかにばけものにちげえねえ、それがなによりしょうこには、人間の生き血をのむぞ。」

というものがおった。

「えっ、ほんとか。」

「ほんとともｏギヤマンていうちゃわんに、まっかな血をそそいで、ぐいっと、ひといきにあおっているのを、おれは、たしかにこの目で見たぞ。」

「ふーむ。おそろしや、おそろしや。」

と、みんな青い顔をした。

そんなばけものにつかまったら、なにをされるかわからないと、人びとはふるえあがった。

ところが、あとでわかったのだが、その赤いのみものは、ブドウでつくった酒だそうだ。わかってしまえば、とんだおわらいだが、メリケン人のもってきたものは、なにもかもめずらしく、ふしぎで、なにやらまほうじみて見えたのだろう。

じょうきというものは、船ばかりではなく、人間をのせた車もはしらせるということをおしえてくれたのも、メリケン人だ。ペリーが幕府へもってきたみやげものの中にも、その〈おかじょうき〉の模型があったそうだ。

ほんものの三分の二の大きさで、円形にしいた線路の上を、列車をひっぱってはしったという話だ。

幕府の役人がやねにしがみついてのったそうだ。そのぶざまなかっこうに、メリケン人ははらをかかえたが、日本人たちは、馬もいないのにはしるとはキリシタンのまじゅつではないかと、目を

見はったそうだ。
あのころの日本人は、なんでもふしぎなものは、キリシタンのまじゅつとかんがえた。
トトン、ツーツーと、とおくはなれている人とも、暗号で話ができる通信機や、火うち石がなくても火がでるマッチや、あぶらをつかわずに、昼のようにあかるくするガス燈や、カニみたいにあわをだして、ものをきれいにするシャボンなどなど、異人さんのもってきたものは、びっくりするようなものばかりだった。
中でも、とくべつまかふしぎなのが写真というものだ。この横浜でも、下岡蓮杖という人が、ハリスの通訳のヒュースケンとかいう男から、写真術をならったとかで、弁天通りに写真館をひらいた。
もっとも、写真館をひらくまえ、蓮杖さんの苦心はなみたいていではなかったようだ。暗室がわりに便所をめばりしてつかって実験したそうだが、いくらやってもうつらない。とうとう種板（写真の原板）が二まいになってしまった。借金はかさむし、これがうつらなければ、夜にげするよりほかないと決心した。さいわいなことに、くすりの調合をかえてやったら、そいつがうまくいった。
蓮杖さんは、おかみさんとなみだをながしてよろこんだちゅう話だ。
そんな苦心のすえ、やっと開店したものの、写真はキリシタンのまじゅつだというので、日本人はちかよらなかった。あれは、人間のたましいをぬいてうつしだすのだといううわさがひろがって



いたからだ。

写真をうつすと、かげがうすくなるなどといわれ、日本人はあまり写真をとりたがらなかった。だから、横浜の写真館のお客は、はじめのうち異人さんばかりだったそうな。

ちょうどそのころ、横浜の生麦村で、イギリス人が大名行列にであって、ころされるというじけんがおこった。イギリスがかんかんになっておこっているので、戦争がおっぱじまるぞといううわさが、ぱっとひろがった。

さあ、たいへんだ。いまのうちににげろというので、人びとは、家財道具をまとめてにげだしたから、横浜の町じゅう、荷車やにげる人たちでいっぱい。

ところが、幕府の役人たちが、いくさじたく

もりりしく、やりや鉄砲をもって、写真館へやってきたからおもしろい。外国との戦争でうち死にするかもしれない。写真におのれのすがたをうつして、妻や子どもへのかたみにしたいというわけだ。

おかげで、写真館は大はんじょう。蓮杖さんは、ほっくほく。

しかし、そんな大さわぎをしたにもかかわらず、横浜では戦争はおこらなかったのさ。

そうなると、写真をうつした役人ども、気になること、気になること。なんだか力がぬけたみたいで、いっこうげんきがでない。

「どうもちかごろ、かげがうすくなったようだ。」

「あーあ、写真などうつすんじゃなかった。」

と、ためいきばかり。

なにぬかすか、写真なんかうつさなくたって、あのころの役人どもは、黒船いらいたましいをぬかれたように、おたおたしていたくせに。

えばりくさってたやつにかぎって、いざというときになると、足こしがしっかりしねえのは、いつの世でもおなじだんべな。

〈再話・長崎源之助〉

たくあん大明神〈現代民話・横浜市〉



友三じいさんはもう七十をすぎたじいさまだが、まだまだげんきで、たくあんをボリボリかじってはお茶をのむ。なにしろたくあんさえあれば、ほかのおかずはなにもいらないというくらい好物なのだ。生まれたときから、おっぱいのんじゃあ、たくあんをしゃぶって、かわりばんこにそうやって大きくなったんだというからむりもない。もうひとつおもしろいのは、たくあんをつまんで口へいれるまえに、たくあん大明神、ああうまいうまい、といってたべることなのだ。

それには話がある。

ほれ、横浜にいまでもあるバブなんたらといったかなあ、むかしからあるふるい会社。あれはイギリス人がつくった会社で、ボイラーにつかうバルブなんかをつくっていたんだ。横浜には、そういう外人さんの会社がずいぶんあったのさ。

いまから五十年ばかりむかしのことよ。

友三じいさんは若いころ、そのバブなんたらという会社でトレース（機械などの製図をうすい紙にうつすこと）のしごとをしていた。たくあんが大明神に出世したのは、そのときのことなのさ。

まえにもいったとおり、友三じいさん、いやそのころは友三さんだが、たくあんが大好物なものだから、べんとうのおかずというとたくあんなんだな。たまにふんぱつして塩ジャケのこともあるが、それだってたくあんはちゃんとはいっている。

お昼になると、それをたべる。

ところが、におうんだなあ、たくあんてやつは。ふたをあけるとぷーんとにおう。いや、あけないうちから、あったかいごはんといっしょじゃん。ぬくぬくあたためられたにおいが、ぷーん、オフィスんじゅうにただようわけよ。

さあこまったのがイギリスさんだ。なにしろ外人には、どうにもたくあんのにおいががまんできないらしい。そのにおいを気にしはじめると、しごとも手につかん。頭がいたくなる。むかむかする。

こまるのは冬で、友三さんは冬になると、うれしそうに、アルミのべんとう箱をストーブの上にのっけるんだなあ。そうなるともういかん。あたたまるにつれて、ぷーん。

とうとう社長をかこんで、イギリス人によるイギリス人のためのたくあん会議がはじまった。

「なぜかれは、ニク、タマゴ、ソーセージ、ハム、チキンなどをもってこないのでしょうか。」
ひたいをあつめ、首をひねったあげく、社長が声をあげた。
「おう！　わかりました。モンダイかんたんです。お金たりないからです。ニク、タマゴ、ハム、もってこれない。給料あげましょう。」
ツルのひと声で友三さんの給料はぽんとあがった。じつはこのとき「ミスタートモゾウ。タクアンヤメテクダサイネー。」とひとこと、だれかがいえばよかったのだが、イギリスはジェントルマンの国である。そこをいわないのがまずかった。友三さん、ぜんぜん気がつかなかったのである。おかみさんは給料ぶくろを神だなにあげてかしわ手をうち、これも大山さんのおかげとていねいにおがんだし、友三さんも仏だんに線香をあげてかねをならし、これもご先祖さまにお礼をもうしあげた。
そういうわけだから、べんとう箱からたくあんがきえるはずもなく、つぎの日も、そのつぎの日も、たくあんをしこたまつめこんだべんとうをもって、さっそうと友三さんは出勤した。
がっかりしたのはイギリスさんたちで、きょうはたくあんのかわりにたまごになるか、きょうこそ肉にかわっているかと、たのしみにしているというのに、あいかわらずぷーんとにおってくる。
またまた会議をひらき、まだ給料がやすすぎるのだろうというわけで、またもや給料はあがっ



た。これには友三さんもおかみさんもすっかりかんげきし、あんたのトレースのうでがよっぽどいいんだよ。なあに、それほどでもねえが、まあなあ、などと、その晩はお酒を一本おいわいにのんだそうだ。

友三さんがたくあんに気がついたのは、三べんめに給料があがったとき、たまりかねたひとりのイギリス人が、こっそりそのわけをおしえてくれたからだという。

「はーん、そういうわけでしたか。」

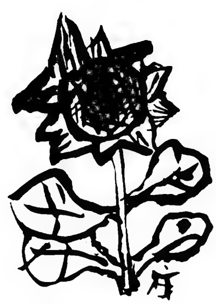
おおいにきょうしゅくした友三さんは、それからふっつりたくあんをべんとうにいれなくなったが、そろそろ給料をあげてもらいたいなあ、とおもうと、またもやたくあんをぷんぷんさせ、たくあん大明神というてボリボリたべたそうな。そうすると、日本人の従業員みんなが右へならって、たくあんボリボリ、たべたそうな。

ちっとむかしの、横浜の話だ。

〈再話・松谷みよ子〉

そんとくのちえくらべ

〈現代民話・横浜市〉



この話はな、戦争がおわったころの、かなしいわらい話だよ。
昭和二十年八月十五日、日本は連合軍に降伏して、まるまる十二年もつづいた第二次世界大戦はおわった。
だが、戦争はおわったし、空襲もねえしと、ほっとしたのもつかのま、家はやかれちまったわ、食いもんはねえわというわけで、くるしいくらしはずっとつづいた。
それにな、ながい戦争のおかげで、なにもかもないないづくしだったから、お金よりも品物のほうがねうちがあって、町の人はとっておきの洋服やらはれぎを手ばなして、イモや米を手にいれていた。
たばこも配給でよ、一日に三本ぐらいしかすえなかった。中にはトウモロコシの毛をまいて、「た

ばこににてるぞ。」とすって、むせんでいる人もあったし、すきなたばこもすわずにためておいて、それと米とりかえてくるもんもあった。ところがとりかえにいったかえり道、米のとりしまりにあって、せっかく手にいれた米を、警官にそっくりもっていかれることもあっただよ。いやはや、えらい世の中だった。

そのころ、東京の品川と横浜港をむすぶ品鶴貨物線を、日本を占領した進駐軍をのせた軍用列車がはしっていた。

品鶴貨物線は、戦争ちゅうはひみつ線といわれて、日本の兵隊さんを戦場へはこんだ鉄道だったが、外国の軍隊をはこぶようになってしまった。その列車は、新鶴見の操車場でひとやすみしていくのだが、これをねらって夜中であろうと、朝であろうと、あたりの町からおとなや子どもたちがおしかけてきた。それは、進駐軍と品物をとりかえっこするためだった。勝ちゃんて子もそのひとりでよ、

「ハロー　ジャパニーズ　オヒメサマ　シガレット　チェンジ　オーケー。」

と、どこでおぼえてきたのか知らんが、かたこと英語で、うちからもちだしたひな人形と、アメリカのたばことりかえようとひっしだ。

アメリカ兵は、人形を見ていたが、国へのみやげになるとおもったんじゃろ、

「オーケー　オーケー　ナイス　ナイス。」
と、たばこをだしてとりかえてくれたんだと。

　ところが、ひな人形が、そんなにあるわけがない。そのつぎは、タンスや戸だな、おしいれをかきまわして、せんす、おびどめ、げた、日の丸のはた……と、なんでも日本らしいものをもっていった。

　あるときは、かあちゃんのむかしのかんざしをぴかん、ぴかんと見せびらかして、
「ハロー　ジャパニーズ　カンザシ　ダイヤモンド　はいってる。」
とやった。アメリカ兵はかんざしをぴかん、ぺかんとやっていたが、これも、
「オーケー　オーケー。」
と、ピーナッツのかんづめととりかえてくれた。

　つぎの日、勝ちゃんは、もうもっていくものがなくなってしまった。で、ちえをしぼって、操車場へやってくると、
「ハロー　ジャパニーズ　クンショー　シガレット　チェンジ　オーケー　クンショー　クンショー。」
と、やった。



「ジャパニーズ　クンショー？」
アメリカ兵は、まゆをよせた。
むりもない。勝ちゃんが「クンショー　クンショー。」といってふりまわしているのは、なんと学校の記章で、ぼうしについていたのをもぎとってきたものだった。とにかく、そのじぶんは、学校もやけちまって、勉強どころではなかったからのう。
「クンショー　クンショー？」
アメリカ兵はブリキ製の記章をいじっていたが、なににつかうのかわからないらしい。勝ちゃんは記章をとると、むねにあてがってそっくりかえってみせた。
「オーケー　オーケー。」
とアメリカ兵は、なんと紙でつつんだたばこ一

ケースとチョコレートをだしてきた。勝ちゃんはそれをかかえると、家へふっとんでいった。
おとっつあんはよろこんだのなんの、勝ちゃんのかたをたたいて、
「おお、やったな。あんな記章でたばことチョコを手にいれてくるなんて、おめえもたいしたちえがあるな。やっぱし、それ、名まえがいいのよ。勝利ってつけたもんな。よし、これを米ととりかえてくるぞ。あすは銀めし（白米のごはん）だ。」
と、家じゅうが大よろこびだ。
つぎの日、おとっつあんは、リュックをしょって買いだしにでていった。
「アメリカのたばこだ。だまっていたって米五升だぞ。」
と、埼玉の農家へいき、あんちゃんをつかまえて交渉すると、あんちゃんは首をたてにふって家の中から米五升もってきた。
さてあんちゃんは、さっそくいっぷくつけてみるべえと、たばこのつつみをほどき箱をあけたとたん、
「あれっ、わらくずと紙くずでねえか。」
とさけんで、米をしまいこんでしまった。
おとっつあんもびっくりした。

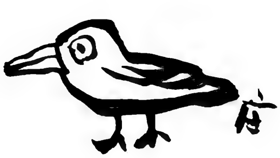
「むうん、アメリカにやられたわい。わらくずだったか。それにしても、よくかんがえやがったもんだ。」

おとっつあんは、じだんだふんでくやしがった。そして、ぺしゃっとつぶれたリュックをしょって、しおしおとかえってきたと。

家ではおっかちゃんが、からっぽのかまをきれいにあらってまってておった。勝ちゃんははしとちゃわんをまえにして、これもまちかねていたと。

この話ももう三十年もむかしになろうか、とにかく、いつでもはらがへっていたころだったよ。

〈再話・萩坂昇〉



解説・1

いま生きている民話

「ふるさとの民話」編集委員会

わたしたちが生まれ、そだったふるさとには、たくさんのお話がつたわっています。

「むかしむかし、あるところに」ではじまるのを、昔話といいます。

――むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがおったそうな。ある日のこと、おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくに……。

知っているでしょう。『桃太郎』のはじまりです。『うり子姫』も、こんなふうにはじまります。こういうのが昔話です。

――なんとか山の、なんとか池には、むかし、おそろしい主がすんでいた。その主は大蛇だったと。

こんなふうに、いまでも場所や、ものがのこっているような話を、伝説といいます。

伝説は、池とか山とかだけではありません。道ばたに立っているお地蔵さまにも、町のまん中に立っている木などにもあります。

このほか、村むらで語られてきた話、これを世間話といいます。

なんとか村の、なにべえさんは、キツネにばかされてね、という話や、なんとか村の、なにすけさんは、たいへんな力持ちでね、などという話です。とんちのある人が、とんちで殿さまをやっつけたりする話もあります。

もっとも、昔話のようでもあり、伝説のようでもあり、世間話のようでもある、はっきりき



められない話もあります。なにしろ口から口へ、語りつたえられてきたものですから、いりまじってもしかたありませんし、それはそれでいいのです。

こうした、語りつたえられてきた話を、民話といいます。

こんどわたしたちは、日本中の民話を県ごとにわけ、『ふるさとの民話』全四十七巻をまとめることになりました。この本は、その中の一さつです。

わたしたちが『ふるさとの民話』を本にしたい、みなさんに読んでほしい、と思ったのには、いろいろなわけがあります。

みなさんは、旅行がすきでしょう。電車に乗ったり、バスに乗ったり、もしかすると飛行機に乗ったりして、遠い土地へいくことは、すばらしいことです。美しいけしきにであえるだけでなく、自分たちとはちがうくらしのありかたを知ることができます。それが心を豊かにし、ひろい目でものごとをかんがえる力になっていきます。

しかし、むかしむかしの世界へいきたいと思っても、バスもありません。電車もありません。そういうとき、お年よりにねだって、民話を語ってもらったり、本で読んでほしいのです。そこにくりひろげられる物語は、時間をこえて、あなたを遠いむかしの国へつれていってくれます。

そこには、いまは見られないひろびろとした野や山があります。

山には、やまんばがすんでいます。

川には、かっぱがすんでいます。

てんぐが空をとび、大蛇はうねうねと山の木や草をおしわけてすすみ、まっかなしたをぴら



ぴらさせます。
日が暮れればキツネ火がもえ、タヌキが人をばかします。
ふしぎな世界です。

むかしの人びとは、そういうふしぎな世界にすんでいました。しかし、ただ、ふしぎといってしまえば、それまでです。ありそうにもないこと、でありながら、そこにはあんがい、ほんとうのことが語られているのではないでしょうか。

いまよりももっとまずしく、米の飯など正月にしか口に入らないくらしの中で生きた人びとは、おそれる心をもっていました。山をおそれ、川をおそれ、水をおそれ、風をおそれました。

それが、やまんばやかっぱとなったのかもしれません。

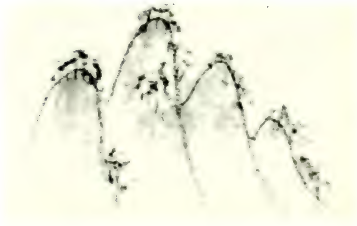
しかし、むかしの人びとは、おそれてばかりはいません。力強く、たくましく、知恵やとんちをはたらかせながら生きぬいてきました。

民話には、そうした祖先の心が、いきいきと語られています。人びとのねがい、喜び、悲しみ、おかしさがあふれています。だからこそ、わたしたちは、民話をたいせつに思うし、あなたたちにも知ってほしいと思うのです。

ここまで読むとみなさんは、ああそうか、民話というのは、むかしの話なんだな、と思われるかもしれません。

それがそうではないのです。

「むかしむかし」ではじまるお話も、あたりまえのことですけれど、ついこのあいだの話だったのです。それが、だんだん語りつたえられているあいだに、むかしむかしの話になってきた



わけです。

むかし、戦いがあって、負けた武士たちが山をこえてにげだしました。自分の国へかえろうと思ったのです。ところが何日かにげつづけていったある夜のこと、ふと見ると目の前に海が見えるではありませんか。山へ山へとにげたはずなのに、ここはまだ敵の土地だったのです。もうだめだ、武士たちはもう、にげつづける力もなく、そこで切腹して死にました。

しかし、それは海ではなかったのです。白い花をつけた、いちめんのソバ畑だったのです。月の光で、それは海に見えたのでした。

村人たちは武士たちをあわれんで、それからその村では、ソバをつくるのをやめたという話です。

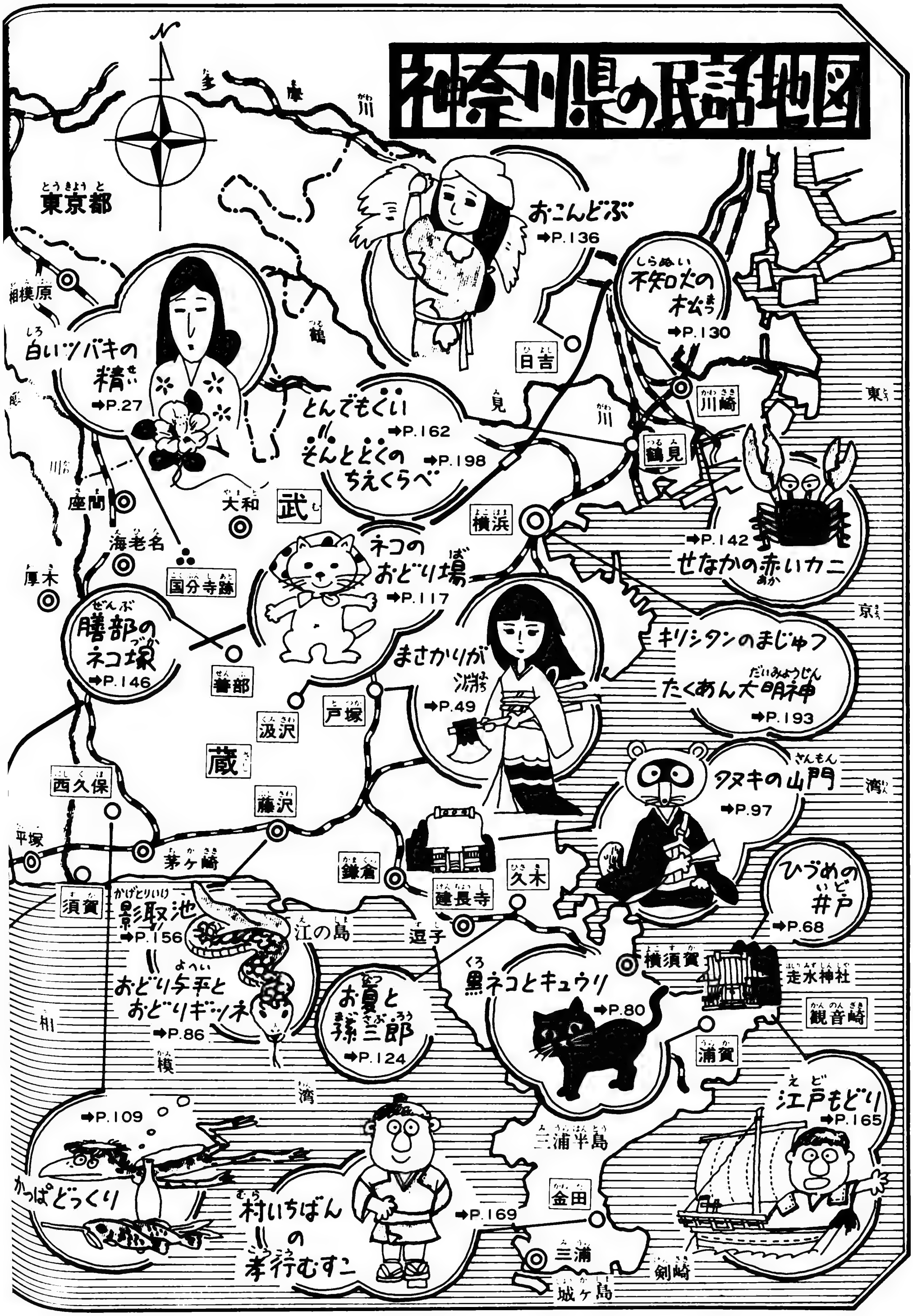
これは民話です。ほんとうにあった話が語りつたえられて、伝説化したのです。とするならば、みなさんの、おとうさん、おかあさん、おじいさん、おばあさんが体験した戦争の話も、やがて民話として語りつたえられなくてはなりません。そのことによって、戦争のさなかに生きた人びとの、ねがい、悲しみ、怒りが、のちの世につたえられていくのです。

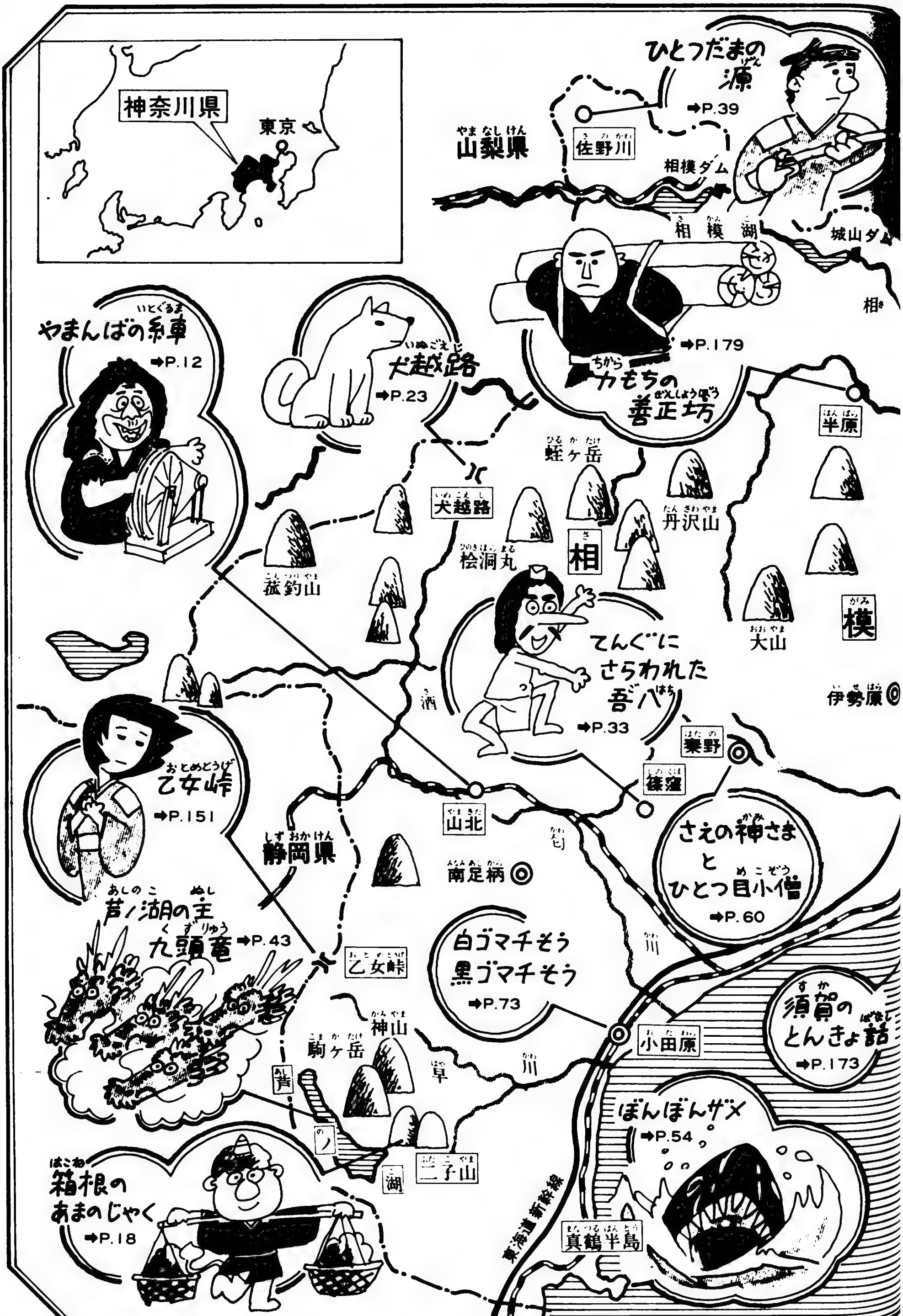
こういう意味で、この本には遠いむかしの話ばかりでなく、少しむかしの話もいれました。

どうかこの本を読んだあと、自分たちの町や村、山などにつたわっている話をさがしてください。おじいさん、おばあさんに、むかしの話を聞かせて、とねだってください。そしていまに、あなたたちに子どもが生まれたら、こんどは、あなたたちがお話をしてあげてください。

そういうねがいをこめて、わたしたちはこの本をつくりました。

〈解説1・おわり〉


神奈川県の民話地図
N
多摩川
東京都
相模原
白いツバキの精
→P.27
おこんどぶ
→P.136
不知火の松
→P.130
日吉
鶴
とんでもくい
→P.162
そんとどくのちえくらべ
→P.198
見
川
川崎
鶴見
東
座間
海老名
大和
武
国分寺跡
厚木
ネコのおどり場
→P.117
横浜
→P.142
せなかの赤いカニ
膳部のネコ塚
→P.146
善部
まさかりが淵
→P.49
戸塚
汲沢
キリシタンのまじゅふ
たくあん大明神
→P.193
京
蔵
西久保
藤沢
タヌキの山門
→P.97
湾
平塚
茅ケ崎
鎌倉
久木
建長寺
ひづめの井戸
→P.68
須賀
影取池
→P.156
江の島
逗子
横須賀
走水神社
おどり与平とおどりギツネ
→P.86
お夏と孫三郎
→P.124
黒ネコとキュウリ
→P.80
観音崎
相
模
浦賀
湾
江戸もどり
→P.165
→P.109
三浦半島
かっぱどっくり
村いちばんの孝行むすこ
→P.169
金田
三浦
剣崎
城ヶ島



神奈川県
東京
ひとつだまの源
➡P.39
山梨県
佐野川
相模ダム
相模湖
城山ダム
やまんばの糸車
➡P.12
犬越路
➡P.23
➡P.179
力もちの善正坊
半原
蛭ヶ岳
犬越路
丹沢山
桧洞丸
相
菰釣山
大山
模
てんぐにさらわれた吾八
➡P.33
伊勢原
秦野
乙女峠
➡P.151
篠窪
山北
さえの神さまとひとつ目小僧
➡P.60
静岡県
南足柄
芦ノ湖の主
九頭竜 ➡P.43
乙女峠
白ゴマチそう
黒ゴマチそう
➡P.73
須賀のとんきょ話
➡P.173
小田原
神山
駒ヶ岳
早
川
ぼんぼんザメ
➡P.54
芦
ノ
湖
二子山
箱根のあまのじゃく
➡P.18
東海道新幹線
真鶴半島

解説・2

神奈川県の民話について

萩坂　昇

神奈川県は、むかしの武蔵の国の西部と、相模の国をあわせてつくられた県です。面積は二千三百九十一平方キロメートルと、四十七都道府県のうち四十三番めの小さな県ですが、海岸地方や平野部は、たいへんふるくからひらかれていました。

本文の『白いツバキの精』にもあるように、八世紀にはすでに海老名に相模の国分寺がおかれていましたし、十二世紀になると、鎌倉に幕府がひらかれて、日本の政治、経済、文化の中心になり、ここで、百五十年にわたって、武士の政治がおこなわれました。

また、十七世紀に江戸に幕府ができると、京都や大阪、四国、九州などの西の国ぐにと江戸をゆききする人びとで、小田原、藤沢、川崎など東海道の宿場はにぎわいました。

さらに、箱根権現や大山などは、ふるくからの信仰の地とされ、おまいりの人がたえませんでした。箱根権現は、八世紀にひらかれたといわれる由緒ある神社ですし、大山は〈雨ふり山〉ともいわれ、山頂の阿夫利神社の上に雲がかかると雨がふるとされて、日でりの年には関東一円から雨ごいにきたものです。

こんなふうに、むかしからひらけ、旅人の往来がさかんな土地だったことは、民話にもあらわれています。

箱根や大山には、信仰にまつわる昔話や伝説がたくさん生まれましたし、鎌倉には、源頼朝など武士の伝説がつたわっています。



長いあいだ日本の玄関口だった横浜港

東海道や大山道などの街道をいく旅芸人や商人たちは、こうした話をよその土地へつたえたり、あちこちの土地の民話を語ったりしたことでしょう。中にはそれが、神奈川の民話として定着したものもありました。たとえば、昭和になってからのことですが、山梨県西八代郡上九一色村の昔話をあつめた土橋里木の『続甲斐昔話集』には、神奈川県の話が五話のっています。話者の河野市作さんは、昭和五年当時六十歳ぐらいでしたが、わかいころ、もめんの行商などで神奈川県の津久井郡へもたびたびきていたので、そこできいた話を山梨県へもちかえったのでしょう。

いっぽう、おなじ神奈川県でも、津久井や丹沢、足柄など、県の三分の二の面積をしめる山間部では、やはり山地らしく、りょうしや山の妖怪などの話がたくさんのこっています。平野部ではほとんどうしなわれてしまった、めずらしい民俗舞踊や、相模人形などの人形芝居が、まだいろいろのこっていることとあわせて、近年まで村の生活が息づいていたことがうかがえます。

さらに、東が東京湾、南が相模湾にめんした神奈川県には、海の民話もすくなくありません。ふるくから漁村としてさかえた三浦半島や真鶴半島の民話、明治になって外国のめずらしい文化がどっとはいってきた横浜や横須賀の民話など、それぞれの土地の風俗とそのころの世相をよくあらわしています。

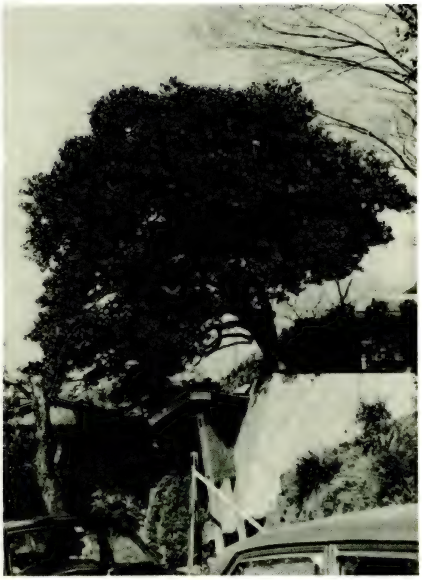
このように変化にとんだ神奈川県の民話ですが、最近はよその県から

うつりすむ人が多くなり、先祖代だいすんでいる人はすくなくなりました。横浜や川崎には大きな会社や工場がふえ、全国各地からはたらきにくる人があつまってきましたし、東京の学校や会社へかよう人たちの住宅や団地が、田畑をつぶし、山林をきりひらいてつくられています。人口二十万人をこす都市が六つもでき、横浜は二百五十万人以上、川崎は百万人以上の大都市にふくれあがりました。このために自然のすがたは大きくかわり、農業、漁業につく人口がへって、昔話や伝説を知っている人もすくなくなりました。

けれども、そんな中で、よその県よりおくれていた神奈川県の民話採集も、藤沢、川崎、小田原、秦野、三浦半島などではじめられています。また、この本にもおさめたような現代の民話も、つぎつぎと生まれているのです。ふるさとの民話を語りついできた、わたしたちの祖先の夢とわらいとなみだは、そんな形で生きつづけているといえましょう。

『やまんばの糸車』　この話の話者の細川喜三郎さんは、昭和二十六年当時八十四歳で、足柄上郡三保村上ノ原（いまの足柄上郡山北町）にすんでおられ、狩人の話がとくいだったといわれます。上ノ原は、御殿場線の谷ケから酒匂川の支流河内川を八キロも上流にある山の部落です。丹沢山地には、てんぐややまんばなどの妖怪がすむといわれ、山にはいってふしぎなことがおきると、山の妖怪のしわざだと語ってきました。そのおそろしい妖怪をたいじするには、勇気とちえが必要とされ、こうした話が山のりょうしのじまん話として生まれたのでしょう。

『箱根のあまのじゃく』　あまのじゃくは、一般にわざと人に反対する心のねじくれた者のことをいいますが、箱根のあまのじゃくは、ダイダラボッチとおなじような大男で、夜だけ力を



相模国分寺あとのツバキの木

発揮できる妖怪のような存在になっています。それにしても、富士山をけずりとって海へなげ、伊豆七島をつくるとは、なんと豪快な話でしょう。わたしたちの祖先は、山や島の起源を、このように雄大に語りつたえてきたのです。

『犬越路』　西丹沢の中川温泉をこえ、箒沢をすぎていくと、足柄上郡と津久井郡のさかいに〈犬越路〉という峠があります。犬越路の名のおこりについては、この話のほかに、むかし、箒沢にすむおす犬が、甲州（いまの山梨県）にすむめす犬を恋して、この峠をこえていったからとか、イノシシのこえる道なので猪越路といっていたが、それがなまって犬越路になったのだといわれています。どれをとっても動物と関係があるのは、かつてはこの峠は、けもの道といって人のとおらないところであったとかんがえられます。

『白いツバキの精』ツバキという木は春をつげるたいせつな木とされて、木と春を組みあわせて〈椿〉の字ができているのです。また、神の霊魂のやどる神聖な木ともされているので、その精が美しい娘となって人間界にあらわれてくることができたのです。花の精の民話は、たいへんめずらしいものですが、着物に針をさし、糸をたぐっていくところは、昔話の〈蛇聟入〉とおなじ型です。この伝説を生んだ相模国分寺は、天平十三年（七四一年）聖武天皇が国家安泰、五穀豊穣をねがって国ごとにつくられたものの一つで、金堂のあとには、いまはさびしく十四この礎石がの



九頭竜を改心させたといわれる万巻上人の墓。箱根神社のうら山にある

こっているだけです。

『てんぐにさらわれた吾八』　てんぐは、山の神の信仰とむすびついており、山地の津久井郡、足柄上郡には、てんぐの話がたくさんのこっています。南足柄市の大雄山最乗寺（道了尊）には、からすてんぐの像やてんぐのげたがあり、大雄山を守護したのはてんぐだとつたえています。また、足柄上郡の弥勒寺には、てんぐの神かくしの話があり、津久井郡城山町の月夜峰では、月夜の晩に峰からドシーン、ドシーンというひびきがきこえてきたといいます。それは、村でやっている地ならしの胴突きの音を、てんぐがまねをしたのだといいます。こうしてみると、おそろしいてんぐ、やさしいてんぐ、人間をまもるてんぐと、いろいろなてんぐがいたことがわかります。吾八とすもうをとったてんぐは、さしずめ、陽気な人なつっこいてんぐといえましょう。

『ひとつだまの源』　オオカミは、ヤマイヌともよばれますが、山の村の人たちは、山の神の使いとしてつかまえることを禁じていました。愛甲郡、足柄上郡、津久井郡には、りょうしとオオカミの話がのこっています。『ひとつだまの源』もその一つですが、ここでは、鉄砲一ちょうかついで、命をまとにはたらくりょうしの度胸のよさが語られています。りょうしは、山奥でとつじょ、イノシシやクマと組みあって命がけでたたかうこともあるのです。

『芦ノ湖の主、九頭竜』　ふるくから竜、蛇、ウナギは、水の神とされて田の神とむすびつ



いまもふかい水をたたえるまさかりが淵

き、村人は、あがめていました。とくに竜は、村の守り神とされ、いまも竜をまつった神社があります。九頭竜の伝説もこうしたことから語られたのでしょう。大蛇や竜と人身御供の話は『古事記』にあるやまたのおろちにも語られていますが、九頭竜の伝説は、万巻上人がでてきて信仰色をこくしています。神奈川県の伝説で竜がでてくるのは、藤沢市の竜口明神にまつった五頭竜と江の島弁天との恋の物語がありますが、この五頭竜も最後には、村をまもる神として語られています。

『まさかりが淵』　まさかりが淵は、神奈中バス汲沢入り口で下車し露木牧場を経営している露木さんの家のうらにあります。露木さんは「むかしはもっと下流にあったようですが、地盤がやわらかいので、だんだん上流になったようです。昭和三十年ごろまでは、子どもたちがここで水あびしたものですが、いまは、水もすっかりよごれてしまいましたよ。むかしは、正月にはおかざりをたてて、川の神さまをまつったり、きたないものを流すと、ばちがあたるといって、たいせつにしたものですが……。」と語っています。淵のそばには、滝の水神を供養したこけむした石碑がたっています。これとにた昔話が川崎市幸区小倉と、海老名市下今泉にもあります。

『ぼんぼんザメ』　〈沈鐘伝説〉は世界的に分布し、日本でも各地につたわっていますが、東京の鐘ケ淵、筑前（福岡県北西部）の鐘の岬、越前（福井県東部）の鐘ケ崎は、とく

に知られています。海にのぞんだ沈鐘伝説の地は、むかしから船の難所とされたところで、こうした話で漁師や航海する人をいましめていたのでしょう。真鶴半島の笠島(三ツ石)沖もそのようなところで〈釣鐘落とし〉という名称がのこっています。ここでは、いまもサメがとれ、真鶴の魚市場にはならべてあります。

『さえの神さまと ひとつ目小僧』 ひとつ目小僧は、帳づけ番頭ともいい、厄神となっています。一年の農事のおわりといわれること八日(十二月八日)の夜やってきますが、自分より目の多いものをおそれるというので、その晩には門口に目の多いザル(百目ザル)をつるしておくならわしがのこっていました。さえの神は、道祖神、道陸神ともいい、村ざかいや辻にたって悪霊をさえぎる神とされています。〈どんどやき〉は、このさえの神の前でおこなわれるところから、この話が語られたのでしょう。

『ひづめの井戸』 いけずきのその後については、寿永三年(一一八四年)一月二十日、源義経の軍が木曽義仲と宇治川をはさんでたたかったときにでてきます。このとき先陣争いがおこなわれ、佐々木四郎高綱はいけずきの、梶原源太景秀はするすみの手綱をとって宇治川をわたりましたが、佐々木四郎高綱のいけずきが先陣をかざりました。そのことからか、いまも競馬主が、ひづめの井戸のそばにある馬頭観音に必勝祈願にくるといいます。また、ひづめの井戸の水は〈百日ぜき〉にきくとされ、くみにくる人もあり、どんな日でもかれることがなく、村人にうるおいをあたえてきました。

『白ゴマ千そう黒ゴマ千そう』 この昔話は、『日本昔話集成』の中に〈竜宮女房〉と〈難題聟〉の二つにのっていますが、竜宮の王からもらった美しい女房が蛇身となって竜宮へ帰



横須賀市馬堀にある馬頭観音堂。ひづめの井戸はこの右下にある

ること、主人公が正助という固有名詞で、ネギ売りという職をもっていることが、他の類話に見られない特徴をもっています。また、類話では、竜宮女房と男はすえながく幸福にくらすというのが多いのに、この昔話では、正助は女房にさられ、またネギ売りをやっていたとむすんでいます。

『黒ネコとキュウリ』　ネコは、ふるくから人間に親しまれた動物ですが、奇怪な目の光や、不可思議な習性から犬とは正反対の、妖怪、化物譚などで語られてきました。島根県の隠岐では、ネコをマトとかわった名でよび、人間をばかすとされています。また、ネコが死人の上をまたぐと、死人がたちあがるという俗信は、各地にのこっています。東浦賀につたわるこの話の記録には「一芝生長川橋辺に黒門が二つあり、そこから二、三軒さきに菊屋という船宿があった。」としるされていますが、いまは、長川橋の所在さえわからなくなっています。この話は『ネコとカボチャ』と題し全国に分布していますが、事件のおきる場所が船宿になっているのが多いようです。

『おどり与平とおどりギツネ』　昔話の中のキツネは、人をばかすことも、人にばかされることもあります。いまではキツネを見かけることはめったにありませんが、たくさんのキツネ話があるというのは、それだけ人間の身近にいた動物であった証拠といえるでしょう。横浜市緑区にすむ八十歳の前田さんは、「わしゃ、子どものころ、この目でキツネの嫁入りを見ただに。そうさ、赤いちょうちんをテラテラ、テラテラとぼしてよ。」

といって、それをお孫さんに語ろうとしたら、前田さんのむすこさんが、「じいちゃん、とうとう頭にきたな。そりゃあ、夜光虫のあつまりだい。思いちがいだい。」というのです。前田さんは、そういわれて話をやめてしまいましたが、キツネの嫁入りを、夜光虫のあつまりにしていたら、日本には、楽しい昔話はのこらなかったでしょう。

『タヌキの山門』　昔話の中のタヌキは、人なつこいのですが、そのわりに孤独で、ばけかたもへたなようです。『分福茶釜』のように、義理がたく、人間の厚意にむくいようとしますが、かなしい最期をとげたり、ゆくえしれずになったりする話がたくさんあり、『タヌキの山門』もその一つです。この話は、『タヌキおしょう』と題して、東京、神奈川、山梨、長野、静岡などに分布し、愛知、岐阜、新潟、宮城県にも見られます。おしょうも、建長寺や京都紫野の大徳寺、静岡県富士宮市の安養寺といった名の知れた寺になっています。建長寺には、タヌキを供養した〈タヌキのほこら〉というのがのこっていました。

『十二支のはじまり』　青森県から奄美大島までひろく語られている話です。岡山県備中町では、神さまは、十二支は十支でよいと門をしめたとき、イノシシが門をつきやぶってはいろうとしたら、犬がとびこんでしまい十一番め、最後がイノシシになったという話もあります。イタチが一日をつくったという話は、高知県で生まれ、神奈川県にすんだ秋山さんが語ったものです。すこしむかしまでは、川崎市高津区の明津あたりへきていたやねふきの職人のあいだで、時間をまちがえておくれてきて、しごとのなかまにはいれなかった人を「あいつはネコ年だ。」といったといいます。

『カッパどっくり』　茅ケ崎市の盆唄に、「大山街道に名所がござる　一にサギ茶屋　二にド



茅ケ崎市の小室さんの家に
つたわるカッパどっくり

ンドン塚　三に富士塚　四にカッパどっくり　カッパのすまいは間門川　間門川」というのがのこっています。カッパどっくりは、大正二年横浜のデパート野沢屋でひらかれた県民政資料展覧会に出品され「先祖孝行ノ賞トシテ酒ヲ入レテ河童ノ贈リモノト称ス」とされましたが、関東大震災でやかれ、さらに太平洋戦争でゆくえ不明になっていましたが、戦後、静岡県川根町千頭のある家から発見されて、昭和四十二年五月の端午の節句の日に、五郎兵衛さんの遠縁にあたる茅ケ崎市円蔵の小室由さんの家に帰ってきました。そのときの記念碑が円蔵の輪光寺の境内にあります。また、文政七年（一八二四年）正月二日になくなった五郎兵衛さんの墓は、西久保の三堀実さんのやしきの中にあります。

『ネコのおどり場』　むかしの人は、ネコには秘密があって、おどること、人間のことばをつかうこと、歌をうたうこと、かい主をころすという野望をもった動物だと語ってきました。この話は、神奈川県では中郡大磯町、横浜市戸塚区、津久井郡城山町、藤沢市西俣野に分布しています。汲沢町のネコのおどり場は、いまは、神奈中バスの〈踊場〉というバス停になっていて、そばにネコの供養塔がたっていますが、この塔ができてから戸塚の宿場で手ぬぐいの盗難がなくなり、踊場から夜ごとにわかい娘がうたう「ネコじゃ　ネコじゃ　わしゃネコじゃ」の声もきこえなくなったといいます。また、ここは、村の若者たちのあつまったところともいわれています。

『お夏と孫三郎』　逗子市小坪はむかしは、〈さぎの浜〉といわれ、ここでさかなをとることは禁じられていました。その小坪へ源　頼朝がきたと



横浜市のバス停〈踊場〉の近くにあるネコの供養塔

き、小坪の人は、さかなでもてなせないので、小さな茶つぼをおくったことから、小壺の地名ができたとつたえています。それから小坪で漁がゆるされるようになり、村人があみを入れると、桜鯛の大漁でした。それをきいた頼朝は、大漁をいわい「地びきひく霞の中の桜鯛　小壺の浜の春の朝なぎ」と歌をつくって山の上で披露しました。それからこの山を披露山というようになりました。その披露山にお夏、孫三郎がすんで、小坪の漁師からさかなをだましとったというのですからゆかいです。逗子のお年よりは、子どものころこの話をきいてそだったと、なつかしんでいました。

『不知火の松』　いまのように浜の村からはあかりももれていなく、燈台もなかったころ、くらい海の沖から船つき場をさがすことはたいへんでした。とくに海があれたときには、不知火の松によって、どれだけ多くの漁師たちが、しけやあらしからまもられたことでしょう。小田原市の酒匂川の河口にも、〈竜燈の松〉というのがありました。また、横浜市神奈川区の浦島が丘にも大正年間まで〈竜燈の松〉がありました。これは、浦島太郎が両親の墓をたずねてきたときに竜宮の乙姫が、この松に燈をだして、太郎に墓のあるところを知らせたといいます。

『おこんどぶ』　ひとくちに米つくりといっても、田んぼのよいわるいによって、農家の苦労はちがってきます。どぶというのは、どぶっ田、つまり深田のことです。横浜市の港北区には、こうしたどぶがあちこちにあったようで、東山田町の南には、〈およしどぶ〉というとこ



おまいりの人がたえない膳部のネコ塚

ろがのこっています。米という字は、つくるまでに八十八回てまがかかるということから、八十八を組みあわせて米にしたときかされましたが、おこんどぶの米つくりは、それ以上だったでしょう。この話は、江戸時代もおわりの文久年間（一八六一〜六四年）のころといわれています。

『せなかの赤いカニ』　カニは、からをぬいで大きくなっていくので、そのたびに命をあたらしくするとされ、水の霊とかんがえられてきました。『サルカニ合戦』は、山の霊であるサルと水の霊であるカニの争いであるという見方もあります。各地に蟹淵とか、蟹沢、蟹掛け堂というのがのこっているのも、水の霊と関係があります。医王寺につたわるこの話は、〈蟹報恩〉という昔話の型にはいりますが、火とたたかうというところが、ほかの地方の話と大きくかわっています。医王寺は、川崎市川崎区旭町にあり、戦後につくられた鐘楼と、その下に池もつくられています。池のふちには、カニ塚があったといいますが、いまは見あたりません。工場地帯の中にのこっている昔話です。

『膳部のネコ塚』　六部は、六十六部を略したものです。ほどこしをうけながら六十六か国の社寺をまわって法華経を一部ずつおさめていった巡礼のような人です。六部をまつった六部塚があちこちにのこっています。ネコ塚もその六部塚なのですが、村の人がこの塚をとくにネコ塚と名づけたのは、主人のために村人をむかえにきたネコの心にうたれたからでしょう。ま



いまはバス停に名をのこすだけとなった〈影取〉

た、死ぬときにはすがたをけしてしまうというネコの習性のふしぎさを感じたからかもしれません。すこしむかしまで、村の人たちはネコや犬が死ぬと、このネコ塚にほうむったといいます。

『乙女峠』　乙女峠は神奈川県と静岡県のさかいにそびえる標高千メートルの山で、むかしは、箱根ごえの道になったこともあります。いまは有料道路もつくられハイキングコースになっていますが、峠の登り口には「孝女おとめは父の病気回復祈願のため……。」ときざんだ碑がたっています。頂上にいく中ほどの道わきに石がつまれたところがあります。ここがおとめが息をひきとったところといい、ハイカーが供養につんでいったといいます。山国の日本では、峠は約一万か所もあるといわれています。むかしの人は、この峠と語って乙女峠のような、かなしい話をのこしてきました。

『影取池』　影取池は、いまはなくなり、バス停に〈影取〉とのこすだけになりましたが、むかしはひろい池で、東海道より一段さがったところにあり、元文五年（一七四〇年）にだされた東海道駅路図にも〈蛇の池、影取池〉としるされています。影取村の名主だった羽太家には、慶安三年（一六五〇年）の影取池の話をしるした文書があったといいます。類話は、川崎市高津区有馬にものこっています。これも池の主に影をのまれて命をおとす話ですが、どちらも影は人の分身だという根づよいかんがえかたから生まれたものでしょう。



善正坊がたてたといわれるひとせおいの門

『とんでもくいい』　横浜市鶴見区の潮田、生麦あたりは、工場地帯、住宅地になっていますが、二十年ぐらいまえまでは、漁師の町でした。そのむかし、漁師をやっていた生麦のじいちゃんは、「おうさ、おれたちは、きかねえ性質だったよ。うちの者がきょうは海があれそうだからやめろといったって、わしゃ、本牧沖まででかけていったぜ。いちいち、人のいうことをきいていたら、漁師はつとまらんぜ。」と、語っています。この話は、こうした漁師の剛毅な性格をあらわした笑話といえるでしょう。

『江戸もどり』　むかしは、大ぼらをふくとか、注文どおりのへをこくとか、ばか力があるとかの人気者がいたものです。浜三は、大ぼらふきですが、浜の衆は、ばかにしたり、おこったりせず、浜三が江戸へいくときには、わざわざ見おくったほどです。また、しっぱいして帰ってきても、「どっちもこっちも江戸もどりじゃ。」とはやしたてて、ドベラの木を江戸もどりと名づけ、わらいをもりあげています。三浦の漁師は、こうしたわらいで、みずからをはげまして、沖へでていったのでしょう。

『村いちばんの孝行むすこ』　この話は、文化九年（一八一二年）浦賀にすんでいた豪商の加藤雄助がかいた『三浦古尋録』にのったものです。おなじ話が津久井郡相模湖町若柳にもあり、『履物孝行』と題して語られていました。ぶれい者が一転して、最上の親孝行者となるどんでんがえしが話のやま場で、〈孝行むすこ〉となってい

ますが、じつのところは、ちえの勝利であったのです。

『須賀のとんきょ話』　海岸線の出入りのない相模湾にある平塚市の須賀港は、むかしからたいせつな漁港となっています。港は、相模川の河口にあり、須賀港のそばの公園には、「平塚市が今日のようにさかえたそのかげには、話のうまい須賀のさかな商人の努力があった。」ときざんだ平塚市の碑がたっています。須賀のさかな商人の行動範囲はひろく、足柄上郡松田町、厚木市の小野などへいって村の古老にたずねると、「きたよ、きたよ、須賀のさかな屋はいせいがよかった。こんな話もしていったな。」と、とんきょ話を思いだして語ってくれました。須賀のとんきょ話は、いわゆるおろか村話が多いのですが、それをさかな売りがみずから主人公になって語り、生活とむすびつけてひろめていったのです。

『力もちの善正坊』　神奈川県には、力もちがでてくる昔話がいくつかあります。厚木市厚木の長福寺の東陽和尚もそのひとりで、馬にのって江戸へいったとき、橋の工事をしていてわたることができなかったので、馬を背おって川をわたったといい、この橋は長福寺橋と名づけられました。また、津久井郡には舟をもちあげて、その下で子どもに雨やどりをさせたという怪力次左衛門の話があります。

『キリシタンのまじゅつ』　横浜が開港されたのは、黒船が来航してから六年後の安政六年（一八五九年）です。幕府は、幕府の弱腰をいきどおる声や異人にたいする反感がつのるのをおそれ、大名行列のとおる神奈川宿からはなれた横浜村に江戸の商人などを移住させて開港させたのでした。異人をむかえた横浜、そして明治の文明開化から、わらい話や世間話が生まれています。『キリシタンのまじゅつ』もその一つですが、〈横浜ことば〉というのも生みだされ

ました。英語、フランス語、オランダ語、中国語など、耳できいたままの語句をつなぎあわせたもので、マドロス（船乗り・船員）、ドロンケン（よっぱらい）、チャブ台（食卓）、ペケ（ばっ点・わるいこと）など、いまもわたしたちがつかっていることばがたくさんあります。

『たくあん大明神』　この話にでてくる友三さんは、いまも横浜市の磯子区にすんでおられます。戦争がおわり、あちこちの工場で労働組合の運動が活発になった、昭和二十五年ごろ、友三さんがつとめていた工場でもストライキをやるということになったとき、友三さんは、「わたしゃ、そんな大それたことをやらんでも、ちゃんと給料があがったわ。」と、このたくあん大明神の話を語ったのです。

『そんとくのちえくらべ』　昭和二十年十月、戦争がおわってわずか二か月後の都市での主食の配給量は一日二合一勺（二百七十七グラム）で茶わん一ぱいぶんしかありませんでした。ジャガイモ、豆が米のかわりに配給されると、そのぶんだけ米の配給がへらされました。都市の人たちは、列車のやねの上にのったり、窓にしがみついて、命がけで農村へ買いだしにいったのです。しかもお金がなく身ぐるみはいで売っていき、食糧にかえていたので〈タケノコ生活〉といわれていました。せまい庭にカボチャをつくってそれを食糧にしたりもしていました。昭和二十一年春には、全国で一千万の餓死者がでるのではないかといわれたそうです。この話は、そんな時代に語られたことを、かんがえたいものです。

〈解説２・おわり〉

■**お話をうかがった方がた**（五十音順・敬称は省略させていただきました）

赤井誉（海老名市大谷）　足立公平（伊勢原市）
石渡（故人・川崎市四谷）　猪野瀬静枝（横浜市鶴見区）
大菊一太郎（横浜市旭区）　大塚博夫（愛甲郡愛甲町）
尾崎忠昭（足柄上郡松田町・相和小学校教諭）　佐藤昇（厚木市小野）
新倉茂（故人・横須賀市）　服部友三（横浜市磯子区）
服部智信（横浜市磯子区）　間山ツタ（横浜市）
宮山住職（川崎市川崎区医王寺）　山口金次（中郡二宮町）

■**参考にさせていただいた本**（発行年順）

「日本昔話集成」　関敬吾著　昭和28年　角川書店発行
「逗子の伝説」　逗子市教育委員会国語部会編　昭和31年　逗子市教育委員会発行
「三浦半島の口碑伝説百選」　横須賀文化協会編・発行　昭和33年
「書かれない郷土史」　川口謙二著　昭和35年　錦正社発行
「あいかわ炉辺史話」　大矢清一他編　愛川町教育委員会発行
「真鶴」　真鶴町郷土を知る会編・発行　昭和40年
「校訂三浦古尋録」　高橋恭一他校訂　昭和42年　校訂三浦古尋録刊行会発行
「神奈川の伝説」　読売新聞横浜支局編　昭和42年　有隣堂発行
「空想動物園」　池田弥三郎著　昭和42年　コダマプレス発行
「横須賀雑考」　横須賀文化協会編・発行　昭和43年
「神奈川県昔話集」㈠㈡　小島瓔礼編　昭和42〜43年　神奈川県教育委員会発行
「戸塚の歴史散歩」　水島勝江・大橋俊雄著　昭和45年　戸塚郷土史跡研究会発行
「生きている民話」　湯山厚編　昭和45年　牧書店発行
「三浦半島の伝説」　田辺悟編　昭和46年　横須賀書籍出版株式会社発行

「横浜どんたく」　石井光太郎・東海林静男編　昭和48年　有隣堂発行
「藤沢の民話」(一)(二)　丸山久子・中島恵子編　昭和48・50年　藤沢市教育文化研究所発行
「港北百話」　古老を囲んで語る編集委員会編　昭和51年　港北区役所・港北老人クラブ発行
「かまくらむかしばなし」　沢寿郎著　昭和51年　かまくら春秋社発行
「よこはまの民話」　萩坂昇著　昭和51年　むさしの児童文化の会発行

■神奈川県の民話をもっと知りたい方のために（発行年順）

「相州内郷村話」　鈴木重光編　大正13年　郷土研究社発行
「小田原昔話」　田代亀雄編　昭和19年　（昭和52年　名著出版再刊　小田原文庫5）
「相模国武蔵国風土記」　川口謙二著　昭和37年　錦正社発行
「神奈川の民俗」　相模民俗会編　昭和43年　有隣堂発行
「かわさきのむかし話」　萩坂昇・小林綱良著　昭和45年　むさしの児童文化の会発行
「かながわのむかし話」(一)(二)(三)(四)　萩坂昇著　昭和47年　むさしの児童文化の会発行
「神奈川県の民話と伝説」（上）（下）　萩坂昇著　昭和50年　有峰書店発行
「神奈川の伝説」　永井路子・萩坂昇・森比左志編　昭和52年　角川書店発行
「武蔵の伝説」　大島建彦・渡辺千佳子編　昭和52年　第一法規出版発行

■執筆者（五十音順・○印は責任者）

阿貴　良一　「日本児童文学者協会」会員。鎌倉市坂の下在住。
安宅るい子　「トナカイ村」同人。横浜家庭裁判所調停委員。横浜市港北区在住。
伊東　迪子　横浜市西区在住。
今西　祐行　「日本児童文学者協会」「日本児童文芸家協会」「文芸家協会」会員。「びわの実学校」同人。津久井郡藤野町在住。
植田　儀武　「マッチ箱」同人。藤沢市立六会中学校教諭。藤沢市辻堂在住。

角山　勝義　「日本児童文学者協会」会員。「日本児童ペンクラブ」会長。横浜市神奈川区在住。
菊池　　正　横浜市港北区在住。
木村セツ子　「大きなポケット」同人。川崎市立富士見中学校教諭。横浜市旭区在住。
茶木　　滋　「日本児童文学者協会」「日本童謡協会」会員。横須賀市出身。千葉県船橋市在住。
長崎源之助　「日本児童文学者協会」会員。「豆の木文庫」主宰。横浜市南区在住。
○萩坂　　昇　「民話と文学の会」「民話の研究会」会員。子どもの文化研究所勤務。川崎市中原区在住。
武鹿　悦子　「日本児童文学者協会」「詩と音楽の会」会員。「日本童謡協会」常任理事。横浜市旭区在住。
牧　ひでを　「日本児童文学者協会」会員。川崎市川崎区在住。
松谷みよ子　「びわの実学校」同人。子どもの文化研究所「民話の研究会」会員。東京都練馬区在住。

913　日本児童文学者協会
神奈川県の民話
県別ふるさとの民話8
偕成社　228p.　22cm　1983

（県別ふるさとの民話8）
神奈川県の民話

一九七八年一〇月　一刷
一九八三年　八月一一刷

編　者　日本児童文学者協会
発行者　今村廣
発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三―五
電話（編集）〇三（二六〇）三二二九（代）
　　（その他）〇三（二六〇）三二二一（代）
振替／東京五―一三五二
印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　株式会社常川製本

　printed in Japan　ISBN4-03-522080-9

全国県別民話集

ふるさとの民話

日本児童文学者協会編

全47巻

日本児童文学者協会創立30年記念出版

■編集委員　岩崎京子・大石真・久保喬
木暮正夫・柴野民三・渋谷清視・竹崎
有斐・鳥越信・西本鶏介・浜野卓也

■巻末付録①解説②絵地図③県民話資料

小学中級以上向

北海道の民話　再話＝加藤多一ほか
青森県の民話　再話＝鈴木喜代春ほか
岩手県の民話　再話＝高橋昭ほか
秋田県の民話　再話＝今村泰子ほか
山形県の民話　再話＝須藤克三ほか
宮城県の民話　再話＝小野和子ほか
福島県の民話　再話＝最上二郎ほか
茨城県の民話　再話＝来栖良夫ほか
栃木県の民話　再話＝黒川常幸ほか
群馬県の民話　再話＝宮川ひろほか

埼玉県の民話　再話＝市川栄一ほか
千葉県の民話　再話＝高木義雄ほか
東京都の民話　再話＝柴野民三ほか
神奈川県の民話　再話＝萩坂昇ほか
新潟県の民話　再話＝角田光男ほか
富山県の民話　再話＝稗田菫平ほか
石川県の民話　再話＝かつおきんやほか
福井県の民話　再話＝山本和夫ほか
山梨県の民話　再話＝今西祐行ほか
長野県の民話　再話＝はまみつをほか

岐阜県の民話　再話＝岸武雄ほか
静岡県の民話　再話＝清水達也ほか
愛知県の民話　再話＝しかたしんほか
三重県の民話　再話＝北村けんじほか
滋賀県の民話　再話＝岡田純也ほか
＊京都府の民話　再話＝中川正文ほか
大阪府の民話　再話＝奥田継夫ほか
兵庫県の民話　再話＝小林祥光ほか
奈良県の民話　再話＝川村たかしほか
和歌山県の民話　再話＝和田寛ほか

鳥取県の民話　再話＝山下清三ほか
島根県の民話　再話＝常松秀延ほか
岡山県の民話　再話＝平尾勝彦ほか
広島県の民話　再話＝吉本直志郎ほか
山口県の民話　再話＝那須正幹ほか
徳島県の民話　再話＝西篠益美ほか
香川県の民話　再話＝香川茂ほか
愛媛県の民話　再話＝大西伝一郎ほか
高知県の民話　再話＝市原麟一郎ほか
福岡県の民話　再話＝加来宣幸ほか

佐賀県の民話　再話＝古賀哲二ほか
長崎県の民話　再話＝深江福吉ほか
熊本県の民話　再話＝たかしよいちほか
大分県の民話　再話＝佐々木均太郎ほか
宮崎県の民話　再話＝比江島重孝ほか
鹿児島県の民話　再話＝椋鳩十ほか
＊沖縄県の民話　再話＝遠藤庄司ほか

＊印は未刊です

Ａ５判美装本
巻頭４色２色
平均 230 頁



《編集の5大特色》

1 このシリーズは昔話から伝説、世間話まで日本各地で口づてに伝えられてきた、いわゆる「民話」の集大成です。

2 それぞれの土地で育くまれてきた民話を、なるべく土の香りを残したままお届けするために県別に編集しました。

3 筆者はいずれも県ゆかりの方で、生まれ育った郷土の民話を愛情こめて再話しています。

4 各県の代表的な話はもちろん、筆者が歩いて採集した未紹介の話、さらには明治以降に生まれ定着しつつある現代民話もくわえられ全巻を通して見れば日本の基本的な民話はすべて網羅されるよう配慮してあります。

5 日本児童文学者協会が創立30年を期して全国会員の総力を結集した記念出版です。



ふるさとの民話 8 神奈川県　　偕成社／定価950円

ISBN4-03-522080-9 C8339 ¥950E

